

山林植物

照して輝き露を帯びたる木生羊齒の重げに葉を垂れたる、紅紫妍を鬪はず樹下の百花何れを見ても美はしからぬはなし、助手の人に導かれて園内より森林に入る、斧鉞入らざる太古の儘なる大森林はゲデー山の山脈續きなるバンダランゴ山に續けり、此處は山林植物の研究用に保存せられたるものにて百尺の老樹枝を交へて晝尚暗く樹下羊齒陰草茂り、枝より枝に蔓木垂れ又氣根の數十尺に垂れたるが多し、主要の樹木は盡く番號と學名を附したる木札を附け別に位置と番號とを記して學名と對照したる地圖は實驗室内に掲げられたり、此樹木名はコールドルス及ハレトソ博士の檢定に係り、地圖の樹木は三千號に始まり三千三百二十四號に終れり、試みに第十一區の處にて相隣接せる大木を見るに三千三百十四號は、クエルクス、スピカタ、第三千三百二十號は、クエルクス、ブシウドモラツカ、第三千二百七十六號は、ポドカーフス、カブレシチと記入せられたり。

森林を出て、花園を見る、暖地地方の花草多し、日本より移したるも多く樹木には柿の木は多く實を結び栗も盛に實れり、枇杷あり、桃あり、案内者態々枇杷の木に登りて一個の實を取り與へらる、柿は滋味ありて食ひがたしと云ふに、そは其筈なり、滋味あるものは灰汁に浸し又は石灰水に漬けて滋味を抜くなり、其方法を教へ、

日本植物

尙も上に登れば花壇美はしく日蔭室には蘭あり、猪籠草あり、秋海棠あり、有加利樹の大木ある林あり、樟樹園あり、日本の竹林あり、淡竹は盛に花を著けたり、竹の種類は能くも集めたり、樟樹は生育思はしからず、南洋に於ける樟樹栽培に就ては余は悲觀説なり、此處の稚樹に膏藥病多し。

本園は面積八萬坪森林二百萬坪あり、海拔四千五百尺、氣温は十五度より廿二度の間を上下すと云ふ、誘はれて助手の寓居に到る、獨身住ひにて余に何種の酒を好むやと問ふ、余は寧ろ珈琲を得んことを望むや、牛乳は如何と云ふ、曰く牛乳なる哉、忽ち生乳の一杯を與へらる、此深山此佳味あり、眞に意外なり、曰く草肥え牛太り乳極めて佳なりと。植物學者訪問録に署名して午後雨到らざる内にと辭し去りて、こたひは別路を取り森林を抜けて茶園ある所に出たり、途中一幾那樹あり思ふに最初に幾那栽培を試みたるは此山間なりし由なるが、地味風土の適當せざる爲めに失敗に終り遂にマラバール山に移したるなれば、此幾那樹或は當時の遺物なるべしなど考へアラハンの村に下る、此邊柘榴多く柑橘、連霧亦多し、茄の一種木生のものあり、正午ホテルに歸る、午後又大雷雨あり、此日の採集植物中ヒョドリ屬の一珍種あり、ポイテンブルグ植物博物館になき一種なり。

最初の幾那栽培地

西班牙人と
誤らる

十二月九日 朝七時出發十時の列車にて十二時ソカブミに下りホテル、セラバ
トに投ず、年少の店員余を客室に導きさて、貴下は西班牙人にあらずや」と問ふに、
余は「否」とよ日本人なり」と告ぐ、かくの如く此邊は餘り日本客の來らざる所と見ゆ、
午後又大雷雨あり、此地は海拔二千尺餘の地なり。

グツタ護謨園

十二月十日 朝八時出發、チボーダクの驛に下車し馬車にてチペテルの官設護
謨林に到る、驛長は瓜哇人にして英語を解せず、道を問ふも要領を得ず、馭者に命ず
るに、單にチペテルの名を以てす、山に登り廣濶なる茶園の間を上下する事一時間
にして達す、監督チペー氏の寓を訪ふ、折柄日曜なれど余が爲めに園内案内説明の
勞をとれり、此所は一千六百尺の高地にて栽うる所は主にグツタペルカ樹にして
其植栽面積左の如し

- グツタ樹 千五百蘭町
- ヘベアゴム 五百蘭町
- 印度護謨 三千本

グツタの種
類

製造法

グツタ樹は三種あり、バラクタイム、グツタ馬來産、バラクタイム、オブロンギフォリユ
ム、スマトラ産、バラクタイム、ボルチンシス、ボルチオ産にて最古木は二十二年生にて
植附距離は四メートルとなし、初は一蘭町五百本の密植をなし四年目より枝を切
り葉を採集し木の高さ五メートルにて心止めをなす方法を取るものあり、現今は
主に葉よりグツタ護謨を製出する方法を執るも此處にては工場設備狭少なれ
ば生葉を新嘉坡に販出せり、此生葉百キログラムの代價バタバヤ船渡しにて七圓
五十仙なり、バタバヤまでの減損十パーセント新嘉坡までは二十パーセントの減
少なるべしと云へり、生葉より護謨を得るは二パーセントにて、一蘭町の收量生葉
二千キログラムなり、現時此護謨の價格は莖の汁より製したるは七圓葉製のもの
は五圓(日本貨四圓)なり、毎月新嘉坡へ送り出す生葉は六十キログラム宛を麻袋入
れにして月々十萬キログラムなり、一キログラムの製造費は凡二圓を要すとの事
なれば其利益は少しと云ふべからず、和蘭政府は此栽培には力を盡し居る様子な
り。

茲にてグツタ樹及製品の見本を貰ひ聞くべきことを聞きて十二時の汽車にて
ホイテンゾルグに歸る。

名残惜しき植物園

十二月十一日 朝植物博物館にて調べ残りの事を調査す、ドクトル、スミス氏より余の東瓜哇採集の蘭科植物十六種の檢定終れりとて報告あり、内二種は新種なれば新たに學名を定め一種に發見者たる余の姓を附ける旨申越あり不日公表のよし、調査行届ける瓜哇にての新發見はむしろ意外の事と云ふべし、午頃歸れば机上郵書あり、バタビヤ發にて同僚同窓の長嶺技師より明朝其地に行くとの知らせなり、明朝とは今日の事なり給仕召びて日本の紳士來らずやと問へば裏座敷にと云ふ、駈け行き見れば農務局に行きたる留守なり、やがて間もなく歸り來れる同氏と手を握り扱も意外なる所にて親しき友人に遇ひたる互の悦びは此上もなきものにて友の來る由は昨日新嘉坡の岩谷領事よりの電報にて知りたるも餘りに思ひがけなきことゝて唯夢かと思ふばかりなり、先づ食卓を共にして久濶を語り、久振りにて臺灣の近況を聽き、話談は遂に盡さず、午後余案内者となりて植物園を一巡す、今は余も植物園通となりて此植物は世界稀有のものなり、此草はかくの如き歴史的のものなり、この花はかくの如き有用のものなりなど語り得る事なり、夜は

親友の奇遇

一夜相語りて愉快なる事限りなし、同窓同級の殊に親しき友人幾千里外に相逢ふ友あり遠方より來る亦樂しからずや。

十二月十二日 長嶺君を案内して動物博物館を見る、植物園長に紹介し、植物博物館を見、工業博物館に到り圖書館に入り、更に二哩を隔てたる有用植物園に到り、余は兼ねて許されたりし標本用としての採集をなし午後ホテルに歸る、此日體熱あり、倦怠を覺ゆ。

十二月十三日 長嶺君を案内して市場を見る、未だ名果マンゴスチンの味を知らずと聞き時季遅れたれど少しはある可しと探したるも遂に見當らず、午前同君バタビヤに歸り余は尙調査を續く、體健やかならず、胃痛加はる、然れども仕掛けたる仕事あり腹を押へて半日を博物館の一室に送る、ハレトン博士に請うて珍植物「ラフレシヤ」の標品を得たり。

十二月十四日 朝六時植物園に到りウキグマン氏に逢ひ兼て請求せし苗木と種子の二函を受取らんとせるに、苗木の一函は特にバタビヤの船中にて受取る様に手續をなしたればとて之に要する費用など仕拂ひ、蘭室に誘はれ色々の説明あり、植物園長を公室に訪ひ日頃の厚意を謝して暇乞せるに、今後の連絡に就き懇篤

發病

なる助言あり、更に博物館に到り仕残したる調査を終り、ハレトン博士に暇乞を爲さんとて其室に入るに、博士は「愈々別れとなれるか余は切に君の旅途の平安なるを祈る」と強く握手せらる、余は此手を解かずして日頃の懇情を謝し、余の滞在短くして先生の教を受くる事淺きを憾む旨を述べしに「否とよ君は能く勉強せり且つ君が蘭領印度に於ける採品中若干の新種を此博物館に残したるは甚だ悦ぶべきの事にして、専門家が鑑定したる三種の新種と余が君の爲めに爲したる一種の臺灣植物の新種は不日植物園紀要に於て發表し君が名譽を表すべきなり、更に君が健安を祈る」とドクトル、コールデルス夫妻には昨夜暇を告げたるが、愈々出發の時迫れる午後ドクトル、コールデルスは我室を訪ひて更に暇乞ひの辭あり、余はかくて午後一時半の列車にて出發の途につきぬ、午前は腹痛殊に甚しく發汗之に伴ひ、荷物を整へんとして力及ばず、困倒して苦惱半時せめてバタバヤに到り静養せんと遂に自ら勵まして停車場に到る。

三時半バタバヤに著きホテル、チーデルランドに到り馬車より下れば余をよぶ人あり、見れば新嘉坡の知人堺氏なり、意外の面會に何日來れりやと問へば先づこなたへと案内しくるゝに、そこには日本人の一組三人あり、互に初對面の人にて名

刺を交換すれば、一人は農商務省山林局の千本技師一人は潮谷商會の東京支配人荒井氏にて共に余の來着を待ち受けられたる處とて談話に花咲き病苦も忘れたる程なり、領事館より使ありて晚餐に招かる、今日の場合斷る可きなれど相客もあればとて強て其席に列し、實はかくの如き病體なりとて粥と梅干を所望し一月振りの風呂に温まり夜十時に歸る、翌くる十五日千本技師の一行ホイテングルグに向ひ余は領事館に到り一室に安臥して又粥をねだり風呂に温まり看護婦の與へくれし藥劑に少しは落ちつき、領事夫人は手づから腹巻を縫ひくれられ、かく一家の手厚き手當に病勢大に愈り、此分ならば翌日の出發も出來得べしと乗船の手筈などして荷物を整理す、晩の食卓に余が粥を食ふを見て夫人は御馳走の用意に鰻を貯へ蒲焼を參らせんとせし我心盡しも梅干のみ乞はるゝに張合拔けたりなど言はる。

十二月十六日 午後一時出發タン、ジョン、ブリオクに向ふ、染谷領事態々見送られ、諏訪書記生は船迄見送らる、港醫の診察を受けて船に乗る、醫師曰く「アール、ユー、ヘルシイ」余曰く「イエス、アイ、アム、ヘルシイ」其實腹が痛んで困り居る最中なり、代診先生脈を見る、無事船に乗る、船は來航の折と同じく植物學者の名に縁めるラムビウ

ス號なり、船室満員余の室はへさきの小室なれども一人なれば病める身には好都合なり、此處まで送り來れる諏訪氏に別れ、航海中は一步も外に出てぬ覺悟にて直ちに寢衣に更へて我室に籠る、午後三時出帆海上波穩やかなり、給仕は英語を解せざれば事務長に宛て、名刺に書き附けてやる、曰く、余は胃を患ひ食物欲しからず、航海中食卓につかぬ積りなれば、肉汁とブブル(馬來語にて米を軟かく煮たるもの)を持參する様給仕に命令ありたし、ドクトルなにかしと書いてやる、事務長駈け來りて何にかと世話を焼き上首尾なり、給仕にも手厚く丸いものを見せたれば萬事が丁寧なり、十七日は病少しく愈り十八日朝八時新嘉坡に上陸し碩田館に入れば、長き間和蘭語と馬來語の外に用を辨ぜぬホテル生活に飽きたる事とて、三月振りに歸りよれる御客様を歓迎してくれたる女中などの心易さに直ちに寢床の用意させて病人となる、腹痛全く止みたれど瓜哇にて肥え太れりと云はれたる我顔は一週日の病にいたく瘠せ衰へたり、染谷領事に安着の手紙の端に腹卷の御蔭にて冷まし腹痛の癒へたる御禮心に

あたゝかき君がなさを身にふびて

船路もやすく渡り來にけり

蘭領印度の博物學上の位置

蘭領印度は瓜哇、スマトラ、ボルネオ、セレベス、ニューギニアの一部及び其他の島々を含み面積は五十八萬方哩にして人口は四千五十萬人を有する所謂馬來群島にして博物學上最も興味ある地なり、ワレイス氏の八年間の探檢に依りて著述されたる「馬來群島」の分類に依れば、群島は博物學上

- 一、印度馬來區 (新嘉坡、瓜哇、ボルネオ、スマトラ)
- 二、チモール區 (バリ、ロムボック)
- 三、セレベス區
- 四、モラツカ區(バンダ、アンボイナ)
- 五、バプアン區(ニューギニア)

の五區に分てり。

馬來群島の植物調査は未だ完成せず、近來新種の發表頗る多く殊に瓜哇島は植物調査略ぼ完成し既にブルーメ氏の瓜哇植物志あり、又ハレトン及びコイルデルス兩氏の瓜哇森林植物誌は既に十二巻を出版し、コイルデルス氏に依れば瓜哇の

樹木数のみにて一千五百種ありと云へり。
余が採集したる植物は

セ	レ	ベ	ス	二十六	内新種	二
ボ	ル	ネ	オ	三十四	不明種	十一
ロ	ム	ポ	ツ	二十三		
瓜			哇	百四十一		
計				二百二十四	内新種	二

外にリオ島の採集品百五十種は未だ調査を得ざるものなり、此の飛脚的旅行者たる余の採集品中此の如く多少の新種発見を見るが如く群島に於ける調査は尙學者の努力を待つもの多きものと云ふべし。

旅行者の心得置くべき事

前後三月の蘭領内の旅行中二ヶ月は瓜哇にて暮したるが、島内旅行者の注意し置くべきことは

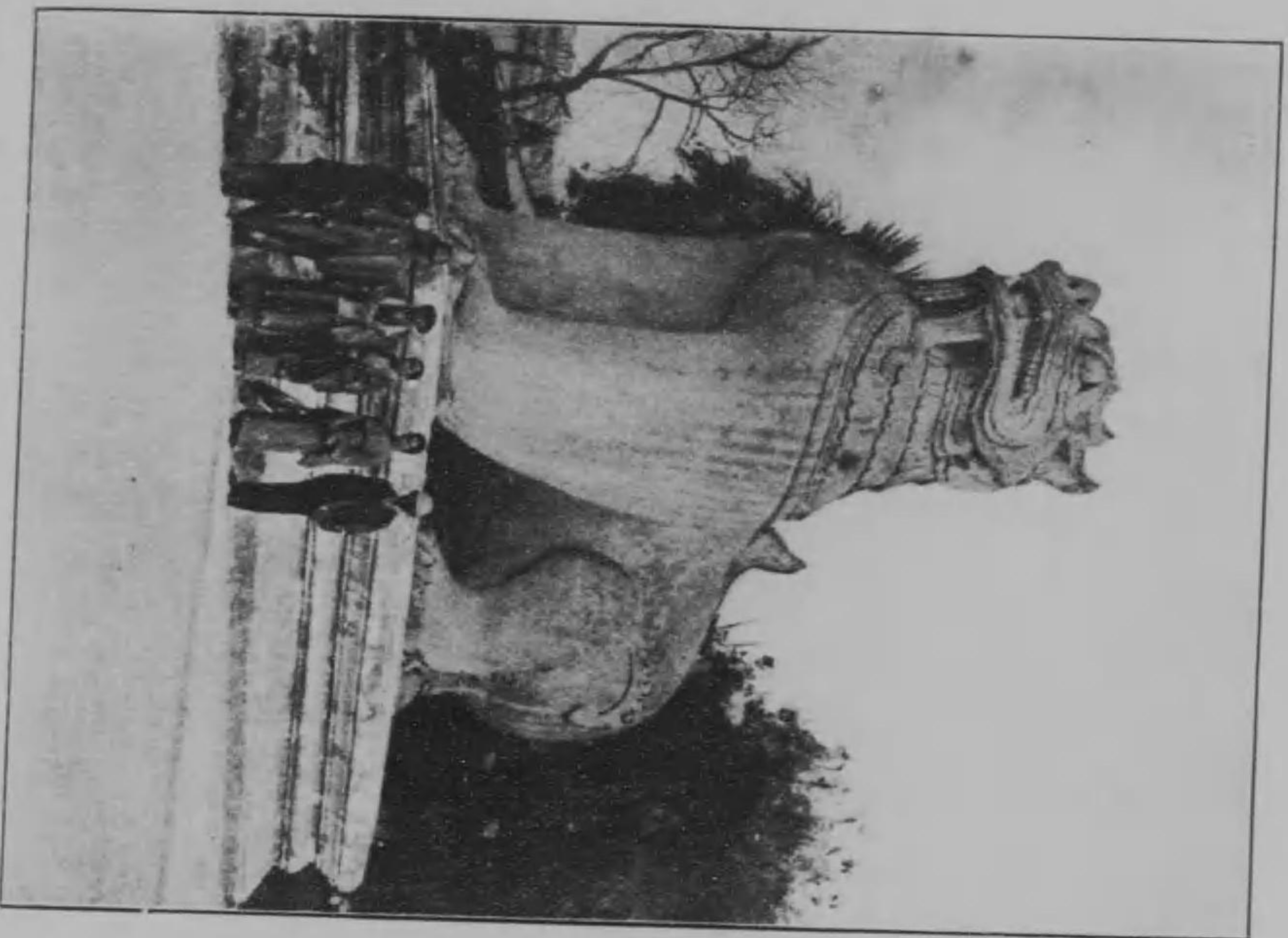
- 一、 必要なる馬來語若干を習ひ覺ゆること
- 二、 バタビヤの旅館にて島内旅行免状を受くる手續を頼むこと

- 三、 服装は最も簡單にて白の詰襟にて夜の食堂にも出て得ること
- 四、 白服の洗濯は滞在一日の間に出來上ること、私服の寝衣必要にて、ホテルの歐人は多く日本キモノを寝衣と爲し居ること
- 五、 贖造銀貨多く、殊に鐵道郵便局など混雜の際之を渡さるゝこと多きこと
- 六、 瓜哇の旅行には官廳及び信用ある人の紹介狀を携へ殊に會社工場一覽の際には最も必要あること
- 七、 旅行中行く先々のホテルには必ず豫め打電し置くこと
- 八、 中食の食卓は都會のホテルにてはライス、テーブルと歐風の二種ありて客の望に應ずるも、田舎にてはライス、テーブルのみなること
- 九、 寢臺には長形の枕のみにて毛布等の被物なきは外來客の異様に思ふこと
- 十、 歐人の役人又商人には晝寢の時間あり、居宅の訪問は夕方なること
- 十一、 婦人の朝の食卓には土人風の腰卷サボンとスリツバの姿に出て來る者多く、都會のホテルにても此服装に驚かされるゝこと

木に登る魚

魚の中には水を離れて陸上生活を營むものあり、台湾にも海岸の潮水引き去りし泥土上に這ひ廻る土蜘蛛とも蜥蜴ともつかぬ眼の光る小怪物ありて餌を追ふを見るべし、これ即ち「ベリヲフタルムス」と稱する魚にて和名飛燕トビと名づくるものなり、馬來地方マングローブの森には此魚頗る多く屢々其木の枝に登るを看ることあり、此魚の前鰭は普通の魚より延びて人の手の如くに變形し、蹠ツツカキの如きもの附著し、後鰭は其體を安置する臺の如きものに變り前鰭は木登りの際手と同作用をなし、陸上歩行の際には足の代用となり後鰭は吸盤の如き用をなし、體を他の物體に吸著せしむると同時に跳躍の場合に支點となるものにて背鰭は直立すれば棘狀をなし以て敵を威嚇する如くに見ゆるなり。(大島理學士「盲の垣のぞ記」に據る)

第十一章 緬甸日記



万塔嶺阿羅漢寺門前



蘭貢の大佛塔

第十一章 緬甸日記

新嘉坡のクリスマス

蘭領印度三箇月の旅終り新嘉坡に歸り來りしも、恙ありて病の人となりければ、面白からぬ日送りて十二月二十五日となりぬ、クリスマスとて商賈は店を閉ぢ官廳は門を閉ぢ子供持てる家々の互の贈答盛にて、今日は子供の最大樂日なり、此の
前日知人の子供に印ばかりの贈物買はんとてジョン、リトルとて日本ならば三越と云ふべき店に行き見るに、二階は凡てクリスマス用品にて白髪童顔の紅き衣つ
けたるサンタクロスの客を待つなど面白き趣向なり。

此朝日本郵船宮崎丸入港す、余の親しき同窓同學の友半澤助教、歐米留學の命を受けたるが、印度洋を經過すべしとの事或る方よりの通知あり、日取を繰るに此船なるべく思はれたれば、倦怠を覺ゆる病軀を推して沖なる船に到る、船の階段を攀ぢて事務長を訪ひ其人ありやと問へば二等室に居ると云ふに、急ぎ甲板に下る、折柄彼方の上甲板に白衣の人影ありと見えしが、其人が轉ぶが如くに駈け下り來

圖らず逢ひ
たる親友

て我が手を握れるに驚き見れば五年相見ざりし我友にて、我姿見て嬉しさに飛び來しなり、かく相對したる兩人互に辭なく、南洋の海上寧ろ此奇遇に悦ぶのみ、直ちに誘ひて陸に上らんとて喫煙室を過ぐ、浴衣がけの壯漢盛に快談に耽る一人あり、互に顔見合はすや、共に「ヤー」と驚きしも道理や、臺北醫院の桂君なり、扱ても意外の會合ぞやと云へば、大越君も居るぞと云ふに急ぎ其室を尋ねて久瀾を叙し、後刻陸上の會見を約して、半澤君と共に待たせ置きたるランチにて上陸し、直ちに「デーヒル」の領事館官舎に導く、岩谷領事も友とは十年振りの會見とて札幌の近況を聞く、余は先づ案内者となりて植物園に到り園内を馬車にて乗り廻して熱帯植物を説き、更に有用植物園を一めぐりして護謨樹と其採液法を示し、車上學問を論じ、家庭を語り、札幌の話、臺灣の談、興遂に盡きずして午後我が旅宿に歸れば、大越、桂の二君部屋なしとて店先きに在る所なれば、我が室に導きて四人麥酒の盃を舉げ快談湧くが如く時の移るを知らず、親友と船を同うせる同僚知己と圖らずも此歡會を爲す悦びや限りなきものなり、此日長嶺君瓜哇より歸り、期せずして同窓四人新嘉坡に集る、乃ち岩谷領事の宅に集りて舊を語る、席上舊事をあばき失策を素破抜き、忘れ果てたる學生時代の愉快なりし思ひ出でに耽り、夜遅く辭して歸る、翌く

楽しきクリ
スマス

蘭賞行

日置黙仙師

る日は岩谷領事特に自働車にて我等を導きて郊外市内を馳せ、椰子園を視、護謨林を過ぎ、シービユーホテルに海上の絶景を眺め、水道水源地を見などして正午波止場に到れば、郵船のランチ今沖なる船に到らんとする所なり、友を此處に送りて相別る、二十七日長嶺君の爲めに植物園を案内す、二十八日印度行の船出づべしとの豫定は外れて出帆の日定まらずと聞き、長嶺君は陸行して今朝出帆のカルカッタ直航船を彼南に追ふ、余は已に蘭賞寄港の切符を購ひたれば残りて其船を待つ事となる、友とは同行を楽しみたりしこと水泡に歸して詮なく、後日の會合を約して相分る。二十九日船入り三十日出帆の事となり、其午後四番の棧橋にかゝれる英領印度汽船會社の「トリラ」號に到りて船室を定む、船は昨年の新造に係り六千五百噸の客船なり、船の出帆は明朝と定まりたれば一と度宿に歸りて夜遅く乗り込む同室三人にて日本の佛教各宗を代表して暹羅皇室戴冠式に參列せる日置黙仙老師及其同行者たる來馬琢道師なり、僧俗の別あれども日本人の心易さは遠慮氣兼もなきは何よりなり、老師は六十五歳の老齡を以て、海外派遣の特命を終り更に印度の佛蹟を拜せん爲めに赴かるゝものにて、印度行きの旅に佛家と行を共にすること何かの因縁なるべし、老師一行とは過ぐる日に三井の招宴に相談り、今又船室

を同らせり、二等室に農商務省海外商業練習生の二人カルカッタに赴くあり、長き航海も此五人の日本人あり、談敵以て無聊を遣るに足るべし。

午前六時船棧橋を離る、細雨あり、右舷半島に近く進み行くに左に蘭領の島々樹木茂れるが其數多く雨に煙れる島山影のけしき又趣きあり、波は穩やかにして終日陸に近く北を指して進航す。

今日は除夜の日なれど、世塵に遠き船且つは外國船の事なれば、年の暮れらしき考も起らず、今年の日記くりひろげて一年の事共顧みるに、此元旦には臺灣南部の中央山脈横斷隊に加はりて淋しき蕃社に新年を迎へたりしが、今宵は南洋馬拉加海峽の船中に年を送る、今年は旅に迎へて旅に送れる年にて、一年の大半二百八十四日までは旅に暮しき、近年我が家は在りながら家庭に屠蘇を祝はざること四度なり。

外國船中の元旦

初日の出

明治四十五年一月元旦 海は油の如く滑らかにして水の色は藍よりも濃く船に碎くる波は白く飛べり連続又斷絶せる馬來半島の山々、近きは黒く遠きは青く

除夜

層雲黒くして低く垂れたるが旭光に照されて刻一刻に赤く、初めは黄に後は緋に又朱に變り行く變化眞に面白く、眞黒かりし密雲の所斑らに光を受けて赤く、黒き雲の間々に蒼き空のほの見えて空と水は漸くにあかるく鮮やかなるに、山の端に照り輝く日光目を射りやがて紅團々たる日の影は顯れ來り、滿天の雲は忽ちに紅に染まり、海波は黄に光り、世界は茲に全く明けはなれ、初日の出はかくして拜まれぬ、時に午前正六時なり。

我國ならば、又我が家ならば屠蘇雜煮の祝ひに新たなる年を迎ふる年賀の式もあるべきに、海上外國船中として唯だ遙かに聖壽の萬歳を祝し奉り、家郷遠征の我身を案じ給ふ雙親の健康を祈るのみ、さて心ばかりの祝ひせばやと二等室なる二青年を招き、日置老師より教育勅語のメタルなど與へられ手づから薄茶を立てられ一同に惠まるゝに、一青年のこれは何と申す茶に候やなどと問ふに、老師は此間にはいたく閉口せられ、いやはやこれはと笑はれ、蜜柑、かき餅など取り出さるゝに、余は新嘉坡にて今日の料にもと或人より態と包みて贈りくれたる餅を取り出すに、其數十個あり、僅かに二日の間に微生物たるを、ポイ招きてトリストを命じ、やがて皿に盛り來れる焼餅を一同に配るに、之も老師の荷の内なる鹽煮の昆布と味附

船中の元旦

海苔を加へて雑煮の眞似事して折も折とて一同の悦ぶに、老師は煎茶の茶碗に此焼餅を入れ海苔を加へて熱湯を注ぎたるに箸を執られ、これぞまことの雑煮ぞと打興ぜられ、狭き部屋に五人の同國人相集りて談笑湧くが如く、樂しき元旦を祝ふ。余は紀念帖とり出して揮毫を需むるに、默仙老師先づ筆執られて

同友客船中 祝年喜不窮 趙茶雲餅樂 談笑入春風
と書かれ、來馬師は

金波千里馬來濱 天外風光別有春 獨立甲板呼萬歲 煙山笑語物華新

練習生の加藤君は、名僧は雑煮に腹の鼓かなと書き加へ、同じく坂口君は署名のみし、余は御勅題に縁みてかくなん

千歳を經たる松が枝に

巢ごもる鶴の女夫づれ

雲井にひびく聲高く

千代萬代とよばふなり

又老師の詩を譯して、

御國同志の船の中 うれしい年始のお祝ひに お茶とお餅でよろこんぶ

春風吹くよな賑はしさ。

彼南の極樂寺

極樂寺

午後一時船彼南の港につく、空は能く晴れ水は靜かにして碇泊の舟皆滿艦の飾りを爲したれば如何にも長閑けき景色なり、食事終へてサンバンにて上陸す、今日は流石にいつもならば賑はしかるべき波止場も靜かなり、田中旅館に至りて番頭に案内を頼みて市外の名高き極樂寺を見る、船の連中も皆見物の爲めに上陸し馬車數臺打續く、美はしき青龍木の竝木道を通り椰子の林に入り一時間にて門前に達す、山を負ひて建てられたる樓閣丹青の彩色鮮やかにて、規模は大なるにあらねど掃除も行き届き心持能き寺院なり、天然石を刻みて書きたる文句あり、俗氣はあれど盆池能く配置せられ花木能く栽ゑられ以て眼を悦ばすに足れり、龜を放てる小池あり、大小幾百の龜、參詣人の投げ與ふる菓子を争ふ様奇觀なり、樓門あり佛閣あり、石階幾段本堂に至れば衆僧看經の時なり、茶席に延かれて熟ふ、東郷、乃木兩大將の清遊紀念に署名せるを額にしたるがあり、聞けば近頃此寺より三人の徒弟を日本に留學せしめたりと云ふ、更に最上樓に登れば經堂あり、こゝは見晴よきとこ

ろにて椰子の林を一目に見、海を隔て、ウエスレーの濱を望むけしき絶佳なり、此處に憩ひ居れる禮服つけたる日本人の夫婦あり、名刺を交換すれば對岸の錫山に雇はるゝ電氣技師の人なり、寺院の後ろの山を拓きて護謨を栽う、佛寺もかくは營利的になりけるよと獨り言せしを耳銳くも老師は聞かれて詩興浮びたりとて示されたる詩あり、

極樂名高風色殊

層々閣聳白雲衢

山僧特有營生術

開拓後鬱栽護謨

此寺は福建の人妙蓮和尚の經營する所にして、其初めて彼南に來るや一貧僧なりしが、能く二十餘萬金を集めて此寺を建てたり、其創設は十餘年前の事なりとひふ、老師其篤志に感じて又詩あり、

聞説十年經苦辛

西方極樂彼南新

玉樓金閣香雲裡

解脫門開廣接人

歸りを急ぎて田中旅館に到り憩ふ、元旦の事とて煮豆、牛蒡、數の子など日本の香ひなつかし、門松の飾りをしては物足らぬにや、孔雀椰子の葉を門邊に立てたり、この家のみかと思へば日本人の家皆此椰子を立てたり、支那人の家々革命旗を翻したるが旗新らしければ中々に派手やかなり。

彼南は馬來半島の西岸にある島嶼にて北緯五度二十五分東經百度二十分、新嘉

門松代りの孔雀椰子

彼南島

坡を去る三百七十哩、面積百六十平方哩ばかり、最高峯をウエストヒルと名づけ海抜二千七百五十尺あり、一年の平均溫度華氏八十度、雨量は百二十吋にて、人口約五萬人、一千七百八十五年英領となれる所にて主に支那人の町なり。水質佳良なるを以て船舶寄港して清水の供給を受く。

五時半船に歸る、此の日は忙しき見物に駆け廻りたれど、時間なくて植物園を見ざりしぞ遺憾なる、六時錨を揚げて北に向ふ、港外少しく波あり。

彼南より蘭貢へ

一月二日 海上波穏やかなり、正午彼南を去る二百十七哩の處を航走す、暹羅領の陸地に近く進み終日島影を左右に見る。

一月三日 少しく白波を見る、終日陸を見ず、正午船の位置は二日の正午より二百八十一哩、蘭貢を去る二百五十一哩の處なり。

午前日置老師薄茶を立て、饗せらる。

一月四日 起き出づれば船は已に濁流の間にあり、風あり雨降る、遙かに大黄金塔の尖頭日光に映じて閃めくにて蘭貢近きを知り、やがて午後二時蘭貢に着く、新

蘭貢

萬塔嶺行

嘉坡を距る事八百二十哩なり、此處は人口二十五萬を容るゝ緬甸第一の都會とて埠頭の混雜甚だし、三井の店員の出迎あり、ストランド、ホテルに投ず、細雨降る、此時季に此雨あること極めて稀なりと云ふ、鳥に似て小なる鳥夥し。男は絹木綿の色様々なる薄く派出やかなる衣を着け帽子は冠らずに額に鉢巻して横に結目を垂れ雪駄に似たる履物を穿ち、女は意氣に鮮かなる上衣に日傘かざしたるなど目につく風俗にて、又樺色の法衣着けたる僧侶の數多きも注意を曳く一つなり。

一月五日緬甸の舊都萬塔嶺に向ひ日置老師の一行と共に十一時半の急行列車に乗る、三井の小川氏及び福島氏等何にかの世話しくれ、多年此國に住ひて能く事情を知れる鳴海氏老師に舊識あり特に案内の勞をとられ、信心篤き其妻君及び小田なにがしの老母と老師の御供して萬塔嶺の釋迦佛拜まんとて同じ列車に乗る、停車場にて賣る蜜柑の美はしきを買ひ込ませ茲を出づれば幾多の小驛は通過し去るに、擴き平野いづれを見ても山の影はなく見渡す限りは水田にて收穫も終り只そこ此處に稻穂を積み擴げたる上を二頭の牛に踏ませて靱を落すがあり、之を監督する爲めに一頭の犬を用ゐ、牛の範圍外に出づるあれば吠えて元の位置に引戻すもあり、珍らしき事なり、蘭貢郊外の川邊には七島蘭茂り、柞草多く、木は唯マン

蘭貢米

グロップの小木散生するのみにて村々には竹藪多く、椽果、酸果樹、香果の類を栽る、香蕉も多く椰子は少し、線路の附近の野草多く花を著け紅紫の色美はし、濕地の處々にニツバ椰子の散生するも見え、溝には水車前に似たる花耳、菰草などの花も多し、停車場到る所に米袋山の如くに積み上げたるは是れぞ名高き蘭貢米にて、此國の輸出高十九萬噸と稱せらる、我國も此の輸入には少からぬ恩恵にあづかり居るなり、默仙老師詩あり、

一聲汽笛發蘭貢 三百八旬線路長 世界名高產出米 俵堆所々停車場

余の俗譯

汽笛一聲蘭貢立てば 三百哩の線路が長い 米て名高いこの國

どこのステーションも米袋

十三時十八分にベグの停車場に停る、電報し置きたる事として中食の用意あり、七分の停車中に食堂に駆け込みて匙をとる事として、五分前の鐘に驚かされ今一分と知らせくるゝ車長に促がされて車室に駆け戻るなど随分と急がしき食事なり、老師は精進料理外には食事を取られぬ事として、案内者は特に重箱詰の辨當の用意あり、握飯に油揚、蒟蒻、高野豆腐、人參などの煮しめを添へたり、國を離るゝ事遠き緬

精進料理

甸の車中此の珍味を見たる一行は何條黙し居るべき、老師に手傳ひて二箱三箱の食物は瞬く間に喰ひ盡して尙も舌なめづりて足らぬ顔なり、これが急ぎたりとはいへ中食をしたゝかに召しあがりたる日本紳士の餘興なりき。

停車場近くに名高き涅槃像の大佛あり、長さ三十間とは随分大なる者なり、煉瓦にて積み上げたるものにて千八百八十一年鐵道工事に要する砂利石を捜す爲めに派遣せる工夫に依りて發見せられ、初めは小山の森と思ひたる場所は此佛像なりし由にて、長さ百八十尺肩巾四十七尺あり、建設の年代さへ明かならぬものなるが兎に角稀代の大佛像と云ふべし。此緬甸鐵道は流石は英國人の監理する所とて、發車の際などは少しも動搖を感ぜず、何時の間に停車場を離れたるか心附かぬ程にて心持ちよし。

十六時頃東方遙かに山脈を見、十七時頃列車はチークの林に入る、印度鐵道時間は二十四時間制なり、十六時とは午後四時の事なり、ツンベルギヤの藍花美はしく藪を飾り、早生尾花の白穂風にそよぐトングー驛にて日暮れ假寢の床作るに、余は防寒の用意なきに夜中いたく冷えて六十五度に下れる程なれば、人々の外套など借りて打重ねまどかならぬ夢を結ぶ、夜月明る窓外白晝の如し、メクテラの平野に

月を見て

呀えわたる夜半の月影仰ぎ見て

ふる里おもふメクテラの原

一月六日 夜の明け放れたるは萬塔嶺近き頃にて、此邊の平野には刺多きサボテンとサボテン大戟、綠珊瑚などが多く、その原、かしの丘に見ゆる佛塔甚だ多く、半ばは崩れて草生ひ茂れるが藪の内に立てるに、牛羊の群、枯草を需めて其ほとりにさまよふ様物淋しきけしきなり。

塔多き國

緬甸は塔の多き國にて、小高き丘には彼處も此處も白く塗りたる塔あり、中には金色燦然たるもあり、蘭貢より萬塔嶺に到る汽車中より見ゆる數丈けにても幾百千なるを知らず、此塔なるものは墳墓の如きものにて、角形の土臺に圓き鐘形のもの、を築きたるものにて、煉瓦なり、これ死者の冥福を祈る爲めに建てられたるものにて、之れが爲めに財産を傾くるも惜まざる風あり、或人緬甸は塔倒れの國なりと罵りたるが左もありなん。

七時萬塔嶺驛につく、蘭貢より二百八十六哩なり、サルウキーン、ハウスに投じ直ちに馬車を命じて市中の見物を爲す、蘭貢も此處も人力車なく、新嘉坡の如く此車

日本商店

多き土地より來れば第一に目につく事なり、但し稀にあるも下級の労働者の乗用にて紳士の乗るべきものに非ず、馬車は黄色に塗りたる箱馬車にて御者臺の高きは目を惹けり、舊城の堀傍を通りて日本人唯一の商人なる山田商店を訪ふ、京都の人にて雜貨を鬻げり、外に日本人二戸あるも共に正業と見るべからざるものなり、こゝまで同行せる女連の落附けるなにかし樓とても云ふ可き家に立ち寄る、主婦は天草の産、海外に活動すること十餘年、此種の社會には珍らしき程、風采も賤しからぬ婦人にて、歡待甚だ力め、老師の爲めに精進料理を勧む。

市場

市場を見る、設備極めて完備し、市場として未だ此の如き立派なるものを見たることなし、名物の履物を購ふ、我雪駄に似て革裏に天鵝絨の表にて女の履物に妙なり。

阿羅漢寺

第一の名刹阿羅漢寺に詣る、本殿の圓塔高く空に聳え、内殿箔を塗りて金色燦然たり、佛像あり、面部を除く外盡く金箔を塗る、蓋し信者箔を需めて之れに塗るなり、善男善女の一群佛前に禮拜平伏するもの多く、花を捧げ燭を奉れり、花は多く睡蓮を供せり、老師詩あり。

金色燦然古塔存 阿羅漢寺別乾坤 滿堂風習人成市 求箔一心塗世尊

イラワデ河

舊城

車をイラワデ河畔に走らせて其河を見る、洋々たる大河濁りて淀み、汽船帆船の上下するもの多く、河畔に木工場、精米場の煙を上げるもの多し。

午後更に舊城内に入る、城は方形にて一邊一哩四分の一あり、蓮池之を圍む、城壁は赤煉瓦にて壘み、高さ二丈六尺五門あり、一千八百六十年より同八十五年の落城迄の王居なり、巨大にして而も實用には如何なりしかと思はるゝ、大砲を見、舊王城の模型を見て、舊王城に入る、廣間に玉座あるもの獅子、鸞象、蜂、鹿、孔雀、百合の座と稱ふるものなどあり、建築極めて壯大、金色燦然として結構の壯麗目を驚かすものあり、殊に謁見室は長さ三百尺にして六十尺の圓柱あり、其壁は金箔にて塗られ、建築の用材は盡くチーク樹にて甚だ壯觀なり、王朝全盛の當時を思ひ出づべし、小博物館あり、人物模型及び王朝時代の寶物若干を藏む、高塔あり、高さ百餘尺、九層樓にして廻廊を傳はりて頂上に登れば、城の内外をひと目に見下すべき勝景なり、城内の區劃整然、酸果樹の森之を被ひ、兵營其間に散見す、此市人口十三萬と稱せられ、あたりの風景極めて我京都に似たり、風景の相似たるのみならず、佛寺の數多きも似たる一つにて、尖頭著しき佛塔の數夥たしく、その山頂こゝの原頭バクタならぬはなく、此舊都の内外四哩の間には佛塔の數凡そ七千ありとぞ、こゝは供養のもの紀

萬塔嶺山

念のもの其建立の目的は單に宗教上の基礎に依るものにあらずと云ふ、廢殘の佛塔古色あるもの多き間を通りて四百五十塔に到る、大佛塔を圍みて四百五十餘の小塔相並び中に經文を彫める碑各一基を藏む、思ふに經文の不朽を傳へ國內經典の標準たらしむるものか、かくて夕暮時となりたれど萬塔嶺山の佛塔見んとて頂上に登れば與願の印の大佛陀立たせ給ふ、右手をさし延ばしたる姿は初めて見たる佛像なり、折から日は已に西に春きて遠くイラワデの河は夕やけに照りて紅く光りあたりの景色頗る壯觀なり、山は海拔九百餘尺と稱せられ岩石露出し石材と寶石ルビーの産地として名高く滿山タマリンドの小木と若干の灌木とあり、時乾燥季とて綠草の萌ゆるなく、たま／＼新緑の生ずるあれば羊群之れを食ひ去るごと、て風色轉た寂寞たるものあり、夜に入りホテルに歸る。

緬甸の衰亡

緬甸史

之を歴史に考ふるに今は昔緬甸王朝の時めきたりし十八世紀の末より十九世紀の初めの頃アラカン^{アラカン}を平げアッサム^{アッサム}を侵したることありけるが抑もこれが英國と戰を開く糸口にて、一千八百二十四年英國のキャンメル將軍先づ蘭貢を陥れ

舊城所感

尋て王は降りて土地を割き軍費を賠償して一旦事は落着したりしが、ミンドレミン王の時此萬塔嶺に都を遷し、其子のチボウ王に到り亦英國と戰端を開き一千八百八十五年都城陥れられて降を乞ひ、かくて英國は民政廳を萬塔嶺に置き一千八百九十七年緬甸を一州となしたるなり、余今日此亡國の王城を見感慨禁ずる能はざるものあり、乃ち萬塔嶺城の歌あり。

榮枯盛衰世の習ひ

はかりがたきは國の運

王道廢り民叛き

同族そこなふ暴虐に

佛罰忽ち報ひ來て

王は囚はれ國亡ぶ

時めきたりし王朝の

なごりを残す城の壁

玉ちりばめし樓閣は

ありし昔の跡偲ぶ

緑りは深きタマリンド

梢は高き扇椰子。

舊城守るつはものは

緬甸の國のものならじ

木の間がくれにひらめくは

夕日に燃ゆる英國旗

國は亡びて二十年

萬塔嶺城草深し。

國の守りと仰がれし

阿羅漢寺の御佛も

王城鎮護のそのために

建て列ねたる佛塔も

榮えし昔の夢のあと

舊都の歴史飾るのみ。

日置老師は余が歌を見て詩を興へらる、曰く

讀川上技師萬塔嶺城之歌有感綴七律和之

天運循環理甚明 先王暴虐失同情 空樓聳處餘瓦壁 斜日春邊照古城

客有徘徊談往事 民無蹶起問前程 百千佛塔何功德 遙祝戴冠萬歲聲

蘭貢に歸る

一月七日 朝名物のチーク製の小細工店を見チーク及白檀製の象を購ひ、十一時半の列車にて歸途につく、某々の婦人山田氏などの見送りあり。

一月八日 朝七時蘭貢停車場に着き老師の一行は齒科醫佐藤氏の宅に招かれ余は福島氏の宅に到り憇ひ、三井の小川氏等と食卓を共にす、同氏は先きに暹羅に同行せる縁故あり今圖らず蘭貢に再會せるなり、余が正月の雜煮を味はざりしと聞きたりとて態々其饗あり又風呂の設備もあり昨年來の汗を流せり、食後老師の一行に會し鳴海氏夫妻の案内にて近頃設けたりし日本人墓地に到る、郊外二哩の處にて老木茂れる果樹園を背景とせる形勝の地なり、無縁塔あり、各地に散在せる邦人の墓地を集め葬りしなり、老師の懇なる讀經あり、朗らかに誦する讀經に心耳も清み渡り我知らず頭の垂るるに初めて此供養受けたる幾十無縁の亡者も浮び

出づる事なるべし、余は旅行の途次閑さへあれば日本人の墓地に參詣せり、香港、吉隆坡、泗水、マカッサ等何等縁故を有せざる身ながら海外萬里の地に不歸の鬼となりたる亡者を弔ふと共に在留邦人が如何に亡者を待つかを視んとせり、今日は圖らずも佛家に伴はれて緬甸の邦人墓地を見るを得たるを幸なる。

景色よき公園

大佛塔

名高き公園を見る、ロイヤル、レイキの池水廣く樹木茂り水と樹との配合極めて能く眞に良公園なり、唯惜むべきは池水の濁れることのみ、去りてシュ、ウエダゴン、ボコダの大佛塔に到る、佛教徒の參拜するもの悉く跣足す、寺内掃除行き届かず之を跣足にて廻り行くこと恐れ入りたることなり、此佛塔は南亞に於ける最も名高き靈場の一つにて釋迦の遺物を秘藏するより佛徒の參拜踵を接するにて今の大塔は千七百六十八年に建築せられ臺基の廣さ千三百五十呎圓錐形の高塔高さ三百廿一呎上に鋼鐵の傘状のものあり、四十七呎にして周圍に鈍金の鐸數十を釣り下げ頂上の黄金の針は六十萬留比の價額を有するものと稱せられ金色燦然として目を射る、塔内に大なる鐘あり五十二噸の重量あり之も名高きもの、一つなり。佛像數百千殿堂金光まばゆく頗る美觀なり、佛像は蠟石製のもの多く顔容柔和なるも威嚴なく日本の佛像を見馴れたる身には有がたみなき心地せり、寺門内

に小店相並び花を賣り香を鬻く、花は寶冠木、睡蓮花なり、余香木を賣る店にて白檀の佛像一體を購ふ。

こゝにて最も癢に障りたるは跣足にて清からぬ寺内を巡り行く事にて寺内の巡查靴を穿つを許さず、佛教國の我等殊に佛蹟參拜の老僧と相伴ふことなれば敬意を表して靴は取りたるも老僧の心頗る平らかならぬさまなり、余先づ寺内を一巡して門に出て、一行を待つ折に心ともなく制札を讀めば、歐洲人ならぬ人々は總て脱靴すべしとあり、さてはと再び靴の儘に取つて返して階段を登るに警護の巡查遮り留めて道を塞ぐに我等は敬意を失はぬ限りは歐洲人と同等の待遇を受くべきものなりと云ひさかせて更に第二階段に進みて一行を待受け折り能くもラポイ寺のウキセイッタ大和尚老師を尋ね來り共に誘はれて其寺院に到る、老師と法問あり、席に英人の僧サキナ師あり、寺主珍藏の古經文を示し其一卷金屬製に漆を塗り黒字にて經文を寫せるもの二千年の古物と稱するものを老師に贈る、此珍品は未だ日本にては見ざるものなりと云ふ、來馬氏には印刷の新經文及貝多羅に寫せる經文余には古代の阿毘達摩論一卷を贈らる、此經文亦稀代の珍品にて全部完備せる貝多羅葉經文なれば一個人の珍藏すべきものに非ずと思はる、暹羅の

佛經典の贈與

アンゴラ號

古佛、緬甸の古經文いづれも此旅行中に得たる佛教關係の珍品と云ふべし。
午後三時新たに開ける三井の店を見てカルカッタ行の郵船「アンゴラ」號に乗る。
六千噸の新船にて設備甚だ完たし、余等三人亦一室なり、小川、福島、佐藤、鳴海夫妻、小田母子等老師を見送り來る、五時出帆河を下ること一時間潮加減の爲め碇を下ろし夜半出帆す。

緬甸の農業

面積

緬甸の總面積は二十三万六千七百三十八方哩農牧に従事するものは七百万人にして全人口の六十七パーセントを占め農耕地は千百三十七万英町にして内休閑地二百八十九万英町なり、而して下緬甸は全耕地の三分の二を占め其七分の六は米作地なり。

作物

上緬甸は耕地の半ばは米作にして残り粟、玉蜀黍、胡麻等にして製油用作物十三%草綿四—五%なり、米は勿論、主要作物にして年々の輸出額百五十万乃至二百万噸と稱せられ下緬甸に於ては灌溉は殆んど之を要する事なく多量の降雨量に依りて供給せらる、此地方には灌溉を要する所僅かに五千英町即ち八方哩の處のみなるも上緬甸にては灌溉を要する地面は八十万英町にして即ち千二百九十方哩を含めり。

稻作

下緬甸に於ける稻作は六月播種して九月に移植し十二月乃至一月に收穫す、土壤は肥沃にして施肥を要せず只乾燥季の終りに毎年刈株を燒きて其灰を肥料となすに過ぎず。

灌溉水なき處は一作のみに過ぎざれども上緬甸にては二作又は三作の處あり。上緬甸に於て間作又混作を爲すを普通とし或地方にては粟の種類と草綿と輪作し他の地方にては草綿と胡麻及粟、然る後に草綿又之に續き時としては晩生胡麻の次に玉蜀黍及早生豆類を栽うることもあり、又耕作せずして一年間休閑するものあり。

灌溉十分なる處は一作に稻を栽ふ收穫後更に稻を植うるを普通とす。稻の種類極めて多く色赤きあり白きあり青きあり黄なるもあり、又黒きもあり、其形長さ短き又圓き扁きもの等皆特別の名あり、其最も多き種は「モサバ」及「ニウエ、サバ」なり、其他「カウギイ」、「マイン」等枚舉に遑あらず。

米に次て主要なる作物は罌粟及草綿にしてアレカ椰子、甘蔗、煙草、芭蕉、果樹類も

第十一章 緬甸日記 緬甸の農業
其名を逸すべからざるものなり。

空く。れ。な。る。に。夕。や。け。て
萬。塔。嶺。丘。の。夕。景
山。紫。に。森。黒。く
黄。金。色。な。す。田。の。お。も。に
飛。び。交。ふ。鳥。は。白。鷺。か
椰子。の。木。末。は。緑。り。に。て
は。る。か。に。見。ゆ。る。し。ろ。が。ね。の
河。の。流。れ。は。イ。ラ。ワ。ア。か

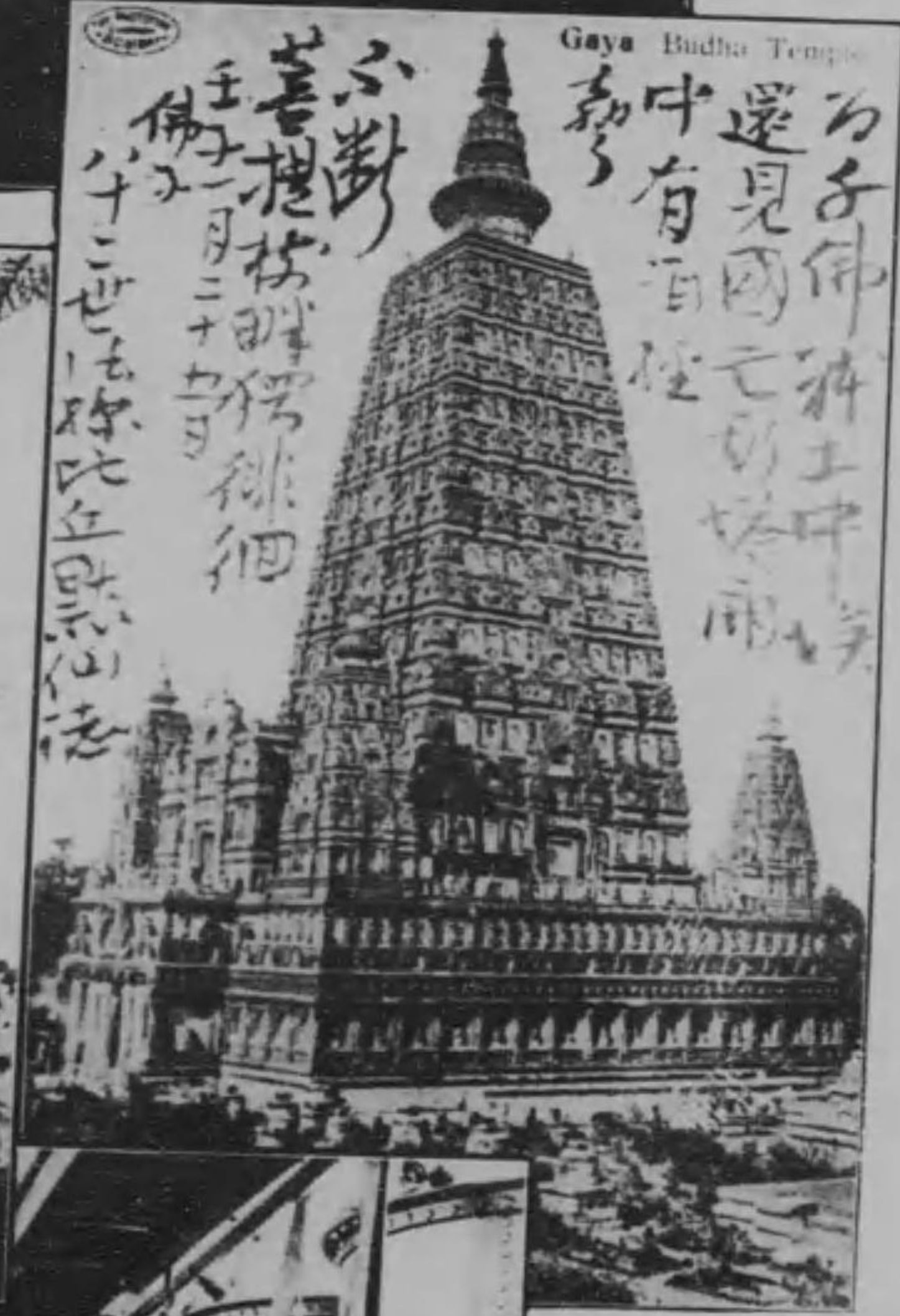
川上松龍

第十二章 印度日記

佛陀迦耶の大塔



ブサ農事研究所



幾那樹林



幾那工場

第十二章 印度日記

蘭貢よりカルカッタへ

一月九日 朝起き出づれば已に濁流を離れたり、海上穏やかにして終日陸を見ず。

一月十日 今日海は静かなり、船は西北を指せり。

一月十一日 朝起き出づれば已に濁流中に入り、恒河の水洋々として海の如く岸に近く船を進め、午過くる頃カルカッタ近づきたれば沿岸諸種の工場散在し汽船の往來漸くに繁く、兩岸アカシヤに似たる荳科植物の森、棗椰子のそこ此所に立てる景色今迄見たる熱帯の景色とは風物何となく異れり、老師詩あり

宿雲晴所入西方 船遡恒河流又長 八十哩程通甲谷 舷頭屈指伽耶場

余之を俗譯して老師に示す

年頃日頃の思ひが叶ひ

今日は著きます天笠に

恒河

こゝはガンジス流れは長し

著くは今日だが行く先遠し

みなと川上八十哩

待遠しいぞや伽耶の日は

カルカッタ

午後二時船はカルカッタの港に着きたれど潮加減にて波止場に入らず河の中流に錨卸せり、蘭貢より七百八十七哩を三晝夜にて着きけるなり、山上曹源氏サンパンにて老師の出迎ひに來り共に上陸し波止場に到れば平田領事、畑中佐、阿部三井出張所長、長嶺技師等の出迎あり、長嶺君今夜印度農事研究所のあるブサ行に決したりと聞き余も同行の事に決し、直ちにトーマス、クリクの店に赴きて汽車乗込の準備をなさしめ又ボーイ雇入の手續きなどし車中の用意とて毛布寝具の買込をなし本屋に案内記を求めなどして夜に入り三井の社宅に至り日置老師の一行と晚餐を共にし八時中央停車場に到り九時發の急行列車に乗る、平田領事、畑中佐三井の諸氏見送らる、鐵道は廣軌にて一室三人なり、今日は上陸以來目の廻るほど忙がしく奔走して漸く此列車に間に合ひたる程なり、今日の午後に着きて其夜の出發とはひどいねと云へば、かう云ふ事も旅の修業さと旅にては兄貴分なる長嶺

即夜の出發

君の云ふ、瓜哇にては案内者たりし余も今夜よりは長嶺君の領分内なれば何事も仰せのまゝに畏まる、瓜哇に逢ひ、新嘉坡に再會し、三度印度に逢ふ、學窓を同うし職を同うし而も親しき友人圖らず印度内地の旅行を同うすること其緣故や淺からぬ事と云ふべし。

印度

印度

三角形を爲せる英領印度半島は北緯三度より三十五度に及び東經六十七度より九十七度に到る東北千六百哩東南千九百哩、南西千三百哩、西北千二百哩其面積百八十万方哩、人口二億九千萬あり。

北にヒマラヤの大山脈千三百哩の城壁を築き其連脈中世界第一の高峰と稱する二萬九千尺のエベレストあり、西に亞刺比亞海、南にベンガル灣を控へ、インダス、ブラマフートラ、ガンジスの三大河共にヒマラヤの雪原に源を發して幾百千里の航運に便し而も幾十萬哩の土地を潤ほし、其流域の沃野には米、阿片、黃麻、綿花其他の雜穀無限の富を産し就中黃麻、綿花の如き世界市場の給源地たり。

印度の氣候變化頗る多く雨量の多きはアッサム地方の四百六十吋極少量は上

部シンドの三吋なるあり。

印度の最高温度は北部印度は五月中にして最も炎熱なるは上シンドのバット砂漠にして華氏百十七度乃至二十六度なり、最低温度は北部及中央印度にして十二月、一月なり華氏廿四度に下ることあり。

カルカッタ	一年平均温度	七八、〇
マドラス	一年平均温度	七九、〇
ボンベイ	一年平均温度	八二、九
		八〇、〇
アグラ	一年平均温度	七九、〇
シムラ	一年平均温度	五五、〇
ダージリン	一年平均温度	三五、〇

中央農事研究所

ガンジス河

一月十三日 朝四時過ぐる頃乗換驛なるモカマに着くカルカッタより二百八十四哩なり、こゝにて汽船、ベナレス號に移りてガンジス河を渡る、折柄濃霧四方をこめて咫尺も見え分かず船も爲めに帆出帆し兼ねて二時間許り遅くれたり、此間に食堂に入りて朝飯をしたゝめ居りしに同じ席に二人の客あり農業の話畜産の話など打交へ八時漸く錨を揚げ流れを浜ること四十分にて向岸のセマリアナエに著く、此邊一體ガンジスの水の持ち來れる沃土にて、油菜の花盛りなり、こゝにて乗れる列車は設備大に劣れり、見渡す限りは廣き平野にて畑能く開かれ椪果の森そ

作物の混植

こゝに見え畑作は油菜、樹豆、小麥多く亞麻仁を採る亞麻、蓖麻、甘藷、煙草、碗豆なども見ゆ、線路のあたりに多き樹木はキャベ樹、班芝綿、菩提樹等にて畑作物の色々の種類混植したるが多く、麥と油菜、碗豆を一つ畑に栽ゑたるもあり、又蕃椒と蓖麻、麥と亞麻とを植ゑたるもあり。

棗椰子

到る所に目に附くは扇椰子と棗椰子にて古々椰子は殆んど之を見ず、前者は専ら花柄より取る汁にて酒を醸し其葉は敷物を編み、後者は莖の上部を削りて液を採り砂糖又は酒を作る、今が丁度採液の時季と見え木と云ふ木は削り去られ素焼の壺をぶら下げて水を受くるを見たり、途中の驛より若き二人の女と三人の男乗込めるが米國育ちの女らしく喧嘩甚しくふざけ廻る様傍若無人にて乗合ひの一英人も眉をひそめたるが御轉婆も斯くては以ての外なり。ツイニの驛にて下れば兼ねて領事よりの書状にて長嶺君の到着時刻を報じ置きたる事とて農事研究所よりの牛車迎ひに來り居れるに乗り七哩を駈けさす、牛は逸物例の「カンクレヂ」種にて足並も早く一時間にてプサの村に至る、此處は一小村にて唯農事研究所ある爲めに土地の名の人に知られたる程の處なり。

牛車の出迎

農事研究所

俱樂部に到り投じ先づ中食して研究所の事務室に到れば所長は旅行中にて所

屬書記の印度人懇ろに案内してくれ先づ植物病理室、化學室を視農場主任を訪ひ更に養蠶室に到れば主任は印度人にてデー氏なり、此人三年間日本に留學し農科大學、西ヶ原、京都にて養蠶學を學び二年前に歸り來り専ら養蠶製絲の試験に當れり時に英語時に日本語の談話を交換して其仕事を見る。

試育中の蠶種は「エリ蠶」にて蓖麻を飼料とする者なり、此蠶は兼ねてワット氏の著書にて知り臺灣に移し得べき者と思ひ居るものなれば今現場を見て愉快限なし、此蠶は屋内の飼育十四日乃至十五日にて上簇し、蛹期一ヶ月卯期十日間なり、夏季六ヶ月間に五回の飼育を爲し得べきものにてもし之を戶外天然の儘に放置せば二十五日以上を要するものなりと云ふ、繭は山繭に似て小なり、蓖麻は容易に耕作し得べきものなれば臺灣にても農家の副業と爲さば有益なるべく只此卵を持ち行く方法は考へものなり、余の考にては新嘉坡を中繼所となし、先づ此處まで卵を送りて一回の繭を作らしめ之を臺灣に送らば妙なるべしとの考なるがデー氏の説は繭は一ヶ月間保持せらるべければ繭のまゝに送り得べしと云ふ、さらば試みに送りて試験二三回にして尙成功せざれば余の案に依るべしとて先づ百個の繭を貰ひ受くることとし最近の日本郵船廣島丸便にて香港より特別速達の方法

蓖麻蠶

を執り臺灣殖産局に發送することとなしぬ、デー氏とは今後蠶業上の連絡をとることを約し此度の繭若し途中にて失敗せば引き續き二回三回之を反覆することゝせり、もし幸に余の考通り臺灣にて養ひ得べくば余の印度みやげの一つは出來たるものと思へり、此夜デー氏の訪問ありて明夜晚餐の案内あり。

蓖麻蠶

蓖麻蠶は學名 *Attacus ricini* と稱する野蠶にしてヒマラヤ山麓地方及びアッサム方面に野生する樗蠶 *Attacus cynthia* より飼ひ馴らしたるものなるべしと云ふ、此繭より紡ぎたる絹糸は山繭糸と共に「アッサム、シルク」と稱せられて名高し、幼蟲は蓖麻の葉を飼料とするより「エリ、シルク」又「カストル、シルク」の名あり、「エリ」は蓖麻の印度名「カストル」は蓖麻の英名なれば譯して蓖麻蠶と稱す可し、此蠶に就ては近來「ア」に於て盛に飼育せられ獎勵すべき蠶種として尙試験を續行しつゝあるものなり。

産地

名稱

飼育法

蓖麻蠶は其飼育法極めて容易にして其飼料は普通の栽培する蓖麻を以てし、繭は家蠶の如く緻密ならざるも數層より成り糸も亦一樣ならざる故に之を繰らす

して紡ぐなり、家蠶繭は羽化を防ぐ爲めに之を殺す必要あるも、蓖麻蠶は羽化せしむる方製糸に容易なり。

蓖麻蠶は産卵數夥だしく一ケ年内に七八世代を重ねるを以て採繭回数も多く又幼蟲成蟲共家居に慣れて逃去の虞なし。

家蠶の飼育場は多少の設備を要するも此蠶は竹の柱に茅の屋根にて足るなり。繭は苛性曹達にて煮、綿花を紡ぐと同じき方法にて之を紡ぎ綿糸の如く織掛に掛く、布は美麗ならざるも其質強く之を染むるに繭のまゝ又絲若くは絹布も着色し易く、褪せせず、藍又はアニリン色素にて諸種の着色を爲し得るものなり。かゝる特徴あり飼育も容易なれば農家の副業として最も妙なり。

蓖麻蠶の飼育法は家蠶と大差なく卵孵化して幼蟲となれば蓖麻葉を食し四回脱皮して漸次に肥大老熟して繭を作りて蛹と爲り蛾となる。卵は單に棚上に放置して其孵化を待つも乾燥甚しき時は温布を被ふを可とす、孵化の際一二の幼蟲を見れば蓖麻の嫩葉を與ふれば毛子は之に昇り來る、さて之を他の容器に移して飼料を與ふ、幼蟲五齡となりて老熟すれば容器内を匍匐して繭を營む箇所を需む、此時飽屑、葉、枯葉又は紙屑を充たしたる兩内に入るれば三日にして繭を作る。

結繭後一週日にして之を離し羽化篩の上に排列す、此は篩狀の籠にして底に二三の棚あり之に繭を並べ斜めに置けば十日内外にて羽化す、成蟲は篩の上方に昇り排泄物は皆篩の目より落下して繭を汚す虞なし。

蛾は交尾後廿四時間の後之を離し雌蛾を産卵籠に移すなり而して産卵の際光線を避くるを可とす、一蛾の卵凡二三百粒なり、最も強壯なる卵を撰擇する場合には初日産出の物のみを採るべく其初日の産卵數は約八十粒を普通とす。プサにては世代七回を重ね一世代温暖の時季には四十五日寒冷の時季は八十日を要し、炎熱甚しく百十度に昇り乾燥劇しき時は繭を作るも羽化することなく多くは幼蟲の時に病死す。此虫には特種の病患と寄生蠅あり前者は乾燥期に生じ後者はアツサム地方に在り、故に最も炎暑の候を避くる時には病患を免るべく繭の輸入を仰がずして卵を取寄する時は寄生蠅傳播の虞なし。

飼料とすべき蓖麻の種類は赤葉種を除けば他は各種皆之に用ゆべく一英町の蓖麻は六百貫の葉を産し加之九十貫匁の種子即ち製油用のものを得べし、此蠶は蓖麻の外キャッサバ、イヌナツメ等をも食ふ。

繭に黄白の二種あるもプサにて飼養する種類は白繭種なり、繭の色は煮沸に依

紡糸法

りて消失す、繭は曹達又は蓖麻灰の溶液にて煮るべし、而して蓖麻灰中の炭酸曹達含量は二十八%なり。

繭一に對し灰一、〇曹達の場合は四分之一の割合に水に溶解し約四十五分間煮沸すれば脂分溶けて柔軟となる、之を水にて洗ひ後糸車にて紡ぐものにして他の方法は繭を執りし綿の如く一つの塊となし或は毛の如く軟かにして乾ける纖維を紡績することあり、前法は色稍汚穢にして細美なるも後法は白色なれども粗大なり。染色法極めて容易にして藍は最も好くアニリン色素類亦佳なり、綿糸に比して染色し易く而も褪色し難し。

研究所長の病理學者

畜産部

一月十四日 朝霧深く華氏六十四度に下り冬仕度せざる余はふるひあがる程なり、午前化學室所屬のガラス室を見、畜産部を見る係りの猶太人なにがしの案内にて畜舎エンシレージ室及牧場を見る、長嶺君は牛畜に就き委しく問ひ尋ね、余は牧草と牧場の日蔭樹などを観察す、牧場の草は「ダビ」「ラリ」「ドービ」などが主にして「ダビ」は我チガヤにて敷藁に用ゐる、「ドービ」は我行儀芝ギムナシスなり、日蔭樹は菩提樹、ベンガル榕

樹、アソカ樹、ルトラカ樹、印度棟樹などが多し、乳用牛は「モントゴメリ」種のみにて最多の乳量二ガロンを出す由、飼料は主に樹莖、燕麥、グラム豆等なり、綿羊も多きが主に肉用にて印度の「グールプ」種と波斯の「ダンバー」種の雜種にて一年三回の剪毛を爲すと云ふ。午後昆虫室を訪ひラック虫の説明を聞き、稻の害虫を見る、臺灣より寄贈を受けたりとて農事試験場の害虫報告など示し臺灣との比較に少許の稻の害虫を見る、鐵甲龜の標本には「ヒスビダ」「アネツセンス」の名あり。

所長バトラ
I氏

所長バトラI氏旅行先きより歸り來れりと聞き、病理室にて面會す、植物病菌學者にて多くの研究論文あり、先年余は此人の「ベンゴール州に於ける甘蔗の病害」を譯して糖務局出版の甘蔗病害論に收めたることあり、一見打解け近頃研究中なる稻の病害線蟲「チマトーダ」の實物を示され、尙今日は事務忙しければ明日曜の午前會見したしとの事にて茲を辭し農場に到り、役牛を見る、「グジラト」及「カンクレヂ」種の奄牛なり、夜長嶺君と共にI氏の宅に招かれて行く、化學助手ビスワナサ、アイエ、ルI氏相伴し、食卓は純印度式にて念入れの馳走にて飯の加減珍らしく口に適したるに驚き之も印度式かと問へば否これのみ日本式にて今日の珍客に主人自ら指圖して炊きたるなりと云ふ、皿數多く出て豆の汁、肉汁、魚肉、鶏肉種々の菓子等流石

印度式の宴
應

食後の香料

の大食家も菓子の皿出でたる頃には箸を執る勇氣なく、これは日本在學中日本人の好みたるものなりとて出したるは陶製の碗にて飯米を砂糖と牛乳にて煮たる菓子にて成程これは甘きものなり。食後嚙む爲めに出したる香料に「カーダモム」あり料理に入る、肉桂屬の乾葉あり香味強し。

日本の談、印度の話學術を説き宗教を論じ快談數刻九時辭し去る、異郷の人と日本語の物語をなせるなど面白い話の種と云ふべし。

一月十五日 今日出發の豫定なりしも尙ほ見るべきものあれば一日を延して滞在に決し午前所長を病理室に訪ふ、其厚意にて稻の新病害「チマトーダ」の檢鏡をなしたるが「タイレンカス」に屬すべきものなるも瓜哇の「タイレンカス、オリジ」とは異なるものと思ふ旨を談られたり、尙明朝再び會見を約して歸り午後四時植物園主任「ホーワード」氏より茶の案内あり夫妻の待遇懇切なり夫人も植物學者にて夫妻協力して交配試験に従事せり、茶終りて夫妻の案内にて圃場を見る、全力を交配試験新作物の創定に力め居り現に試験中のもの「煙草、樹莖、ヒビスカス」の二種、小麦、「トマト」、油菜、グラム豆等にて已に煙草、小麦の如きは性質確定したる新變種あり、設備よろしく「ホーワード」夫妻の熱心なる監督と研究は甚だ有効の成績を收めつゝ

茶に招かる

グラム豆

あるもの、如し、日暮近きも尙案内を續け、圃場より果樹園種物室などを案内し、れ説明甚だ親切なり、余は此處にてグラム豆の臺灣にも適したる作物なりと思ひつゝ此移植を試むることに決し長嶺君と共に此新作物輸入を爲すことに話し合ひぬ、綠肥としても飼料としても人の食用としても面白きものと思はる、これも印度みやげの一つなり、又並木用として長葉のアソカ樹長葉木最も風致ありて面白く此種子の採集を「ホーワード」氏に頼み若干の苗木をも得たり、此樹其葉長くカシに似て邊縁少しく縮れたり、研究所玄關前の大道路は此樹を並木に植ゑ込めり、余は先日緬甸の「マンダレー」市にて此並木を見て甚だ面白きものに思ひたるが此地にて更に有益なる樹種と考へたり、これも印度みやげの一つなり、土名「アソカ」に二種あり一は眞の「アソカ」即ち「サンスクリット」の「ア」は無ソカは憂にて無憂樹の漢譯あり、佛蹟關係の名木にて之は荳科植物なるも余の今日得たる「アソカ」は蕃荔枝科の木なり。

印度みやげ

寄生植物

午後川を渡りて向岸に到り農村を見る、チーク樹の並木頗る壯觀なり、此邊の木は主に紫檀とチークにて孰れもみごとなるものなり、農家の程度一體に低く貧弱の様憐れなり、油菜の根に列當ヘマクサの夥しく寄生するあり、此寄生植物は煙草、トマト等

をも害すと云ふ、此邊にての寄生顯花植物は此外に玄參科のストリガ屬あり主に蜀黍を害し時には甘蔗を害することありと云ふ。畑には菜の花、豌豆の花、亞麻の花美はしく咲き亂れ頗る美觀なり、亞麻は纖維用にあらずして其種子即ち亞麻仁採集の目的にて栽培するものなり。

一月十六日 朝病理室に到りバトラー氏を煩はして旅行中採收の茶、甘蔗の病菌を檢定して余の知らざりし茶の一種甘蔗の一種を知れり、余が一昨日牧場飼料貯藏室にて採集せる橙黄色にして美麗なる一菌を示せるに同氏は始めて見たる種類なりとて早速培養試験を行ひて種類を定むべしと約束あり、氏の研究論文中有益なるもの多く今日其數編を寄贈せらる、但し余が若干の論文の寄贈に答禮せられしものなり、氏が現に行へる里芋疫病の生活史研究は我農事試験場に於ても澤田技手の研究發表せるものと同じ問題なり。

迦耶城に向ふ

午後二時研究所より廻しくれたる牛車にて出發三時半ツイニ發の列車にて出發夜に入りガンジス河を渡りモカマ驛の待合室にて假寢し十七日午前五時の*

味好きホ、
ヅキの實、

牛糞の燃料

迦耶城

ンベイ行列車に乗り六時半モカマより五十二哩のバンギブル停車場に下り茲に長嶺君と別れ同氏は孟買に直行し余は獨り迦耶行の線に乗り換ゆ六時半發車、驛の果物賣より蜜柑、香蕉、酸漿を買ふ、蜜柑は外皮橙紅色にして少しく酸味ありホ、ヅキはセンナリホヅキにて甘酸口に適せり、線路の附近多く菩提樹と、ベンガル榕樹を栽う、畑作は主に小麥にて亞麻、GRAM豆も多し、線路近傍の乾燥地には刺多きサポテン茂れり、濃霧の間に扇椰子の梢見え黒き印度人の白き牛に車曳かせたるがその辻かしこの道に見ゆるけしき亦趣きあり、農家は皆低き土壁に草葺にて牛糞を扁く煎餅形にしたるを木の幹、石垣又家の壁などに叩き附けたるが多く燃料に供するものなり、村落稀に豚を見る、皆脊の毛逆立ちて野猪に似たり、十時半バンキブルより五十七哩にてガヤ驛に達し乃ち客待の馬車に飛び乗りて佛陀迦耶に向ふ。

迦耶は古き城下にて人口十萬と稱せらるゝも純粹なる印度町なれば如何にも疲れ果てたる人の如く見ゆる町にて市内の不潔言語の外なり、町を離れて田舎道に入れば右に小山あり山の頂きに白色に塗りたる塔あり、椽果の樹林多く、棗椰子多く皆葉の下を削りて素焼の壺を吊し下げて其汁を受くるが小鳥多く集り來り

て其汁を吸ひ或は栗鼠の之を嘗むるものあり、左には砂地の續ける川原ベルグーの河にてこれぞ佛蹟に名高きニラニ即尼連の川なり、近く東に見ゆるはモラカ山の山にて釋尊の修業し給ひし前正覺山是れなり、行くこと六哩にして佛陀迦耶の村に達せり。

山上氏より聞きたる宿を借る家の名を知らず行きさへすれば分るべしと思ひたりしが馭者の導くまゝに坂を上りて大塔を左に見て煉瓦いかめしき家に入る、こゝは佛教徒參拜者の爲めに設けられたる建築にて下男の導く居間に通れば暫く人も入らぬと見え室内異臭あり便所を見れば不潔さ云はん方なくこゝに泊らずに濟まぬ事かと思へば聊か心細からぬにあらず、米買ふ錢賜はれと云ふに木賃の宿とるとかとは是も心細く乞ふまゝに一留比を與ふればやがて汚なき布に米と食料を持來り釜と薪をも携へ來れり、いよ／＼料理を始むべき様子なるに其の不潔さに呆れて眺め居たりしが折柄波羅門教の大僧正マハンタの執事ナラヤンと云ふ人尋ね來り山上氏よりの書狀もあり我宅に來られよと云ふにそこに到ればマハンタ邸の一構へは城廓とも見ゆる大建築にて其別邸に誘はれ入る。翌日は五人の日本人來着の案内ありと云ふに乗て茲にて會合の約ありし日置

木賃のホテ

老師の一行なるべければ佛蹟の參拜は山上氏の説明を受くるに定め先づ附近の植物景を見る、名高き塔は小山の間を掘りて穿てる處にあり、大塔の周圍に數多の小塔あり、一碑石あり北畠道龍師の建てたるものと見ゆ

日本開闢來余始詣于釋尊墓前

明治十六年十二月四日

道 龍

と刻せり、佛蹟を一巡して歸る、夜靜かにして大厦の階上廣き古き部屋に只一人睡りにつきたる事とて物淋しく天井に懸け竝べたる宗門歴史の怪しき形したる彩色繪の目に入りて眼は愈々冴え古き城内の怪物屋敷に泊りたる心地してたまたま鳴く孔雀のこゑは猫の泣き聲に似て鋭く寂寞の宵はいよ／＼淋しく思はれたり、翌くる朝早く起き出で欄を攀ちて屋上に出づれば天未だ明けず滿天の星は鮮やかに東天の明星其光更に強し、思ふ三千年の昔釋尊此地此處に此の星を見て大悟正覺し給へるものなることを、歌あり

むすぼるゝむねのくもきり今はれて

さやかにおがむあけの明星

成覺の靈場

三千年のむかしをしのぶ佛陀伽耶の

ほとけのみあと菩提樹のかけ

「靈鷲の山月長へに明かに恒河の水昔ながらに流るれども人は生死の巷に迷ひ、世は盛衰の道を離れず、祇園精舎の花何時しか色あせて佛陀迦耶の塔石の苔あり、今や蕭々たる菩提樹の影、人杖を停めて低回するも誰か大聖釋迦の靈蹟を告げ得べき、然れども人死して道残り、法流今や世界を通じて佛教徒と稱せらるゝも無慮六億萬人と稱せらる、素より世道淪り人心移りたれば其氣已に失せて其名空しく残れるもの多からんも尙儼然として世界文明の一大勢力たるを失はず、抑々此一大宗教三千年の流傳を五十年の説法に收めたる宗祖佛陀の遺蹟中著しきもの四あり、佛陀迦耶は實に降魔の聖跡にして成覺の靈地なり。

傳へて曰ふ釋尊前正覺山を去りて西南行十四五里苦行所を去ること遠からずして畢鉢羅樹あり樹下に金剛座あり此座に於て正覺を成し給へりとあるは此處の事にして釋尊已に苦行を捨離し食を受け河に浴し尼蓮河を涉りて此處に來れ

佛陀迦耶の
大塔

ば河の西岸を去る事僅か數百歩にして一の畢鉢羅樹あり、枝葉青鮮にして翠蔭清爽なり樹下に磐石あり以て座とすべし、釋尊即ち吉祥草を得て之に敷き東面して結跏趺座し誓て曰く、我若し正覺を成さずんば即ち此座を起たずと此に於てか甚深の禪定に入り詳明は無始無明の迷暗を照破して永く死生の境域を超え發得せる金剛石壞の大力は襲來せる強軟二類の魔軍を推破して遠く誘惑怖畏の凡情を脱し廓然大悟して此に大聖佛陀と成り給ひしなりとぞ、佛陀迦耶に到る者先づ空に聳ゆる大塔を仰ぎ見て其壯大なる建築に驚かざるものなし、大塔高さ百七十六尺あり其建築の材料は石材と青色の甌にて漆喰を以て之を固め之を幾層に重ね層毎に壁龕整列し此内に佛像を安置し其佛像の間に蓮華又は輪寶等の彫刻ありて頗る精巧を極めたり、大塔の内部正面には石造の高座ありて獅子及象の形を彫み其上に石座ありて釋尊の石像あり、偏祖右肩の姿にて結跏趺座し左手は掌を上に向けて跌座上に置き右手は掌を伏せて膝上に垂れたる成覺の相を示したる聖像なり。

大塔の内部入口の左右に階段あり登れば廓廊あり四隅に各稜錐形の塔あり、一體の立佛像あり、階上の中央にある佛像は聖母摩耶夫人の立像なりと云ふ。

階段は此廻廊に盡きて其上には登りがたし、大塔の周圍僅か數間の處に玉垣の残れるあり其形完からず最古建築の遺物にて阿育王の建設に係る古物と傳へられ石質稍々赤く彫刻頗る氣品あり、西側及び背面には大小幾多の寶塔あり、然れども多くは破損して全形を見る可らず、大塔の前數間の處に二堂宇あり一は多羅菩薩一は辨財天女の堂なりと聞く、大塔は東に面し其南に階段あり之を登れば池あり水浴の處なり塔後に石垣を廻らしたる所に菩提樹あり、其北數間の處にも大なる菩提樹ありて空に聳えたり、前者は釋尊正覺の跡にして佛陀迦耶の菩提樹は最も名の聞えたる聖木なり。

玄奘の西域記に曰く、菩提樹の東に精舎あり高さ百六七十尺下基の面の廣さ廿餘步疊むに青甌を以てし塗るに石灰を以てす層龕には皆金像ありて四壁奇製を鏤作し或は珠形を連ね或は天仙の像あり上に金剛の阿摩落伽果を置く東面には接して重閣を作り檐宇特に三層を起し穰柱、棟梁、戸扉、寮牖、金銀彫鏤以て之を飾り珠玉厠錯以て之を填む奥室の邃宇洞戸三重なり外門の左右に各龕室あり左は則ち觀自在菩薩の像右は則ち慈氏菩薩の像なり、白銀を以て鑄成し高さ十餘尺あり、精舎の故地には無憂王先きに小精舎を建つ後に波羅門あり更に廣く之を建つ云

々、聖樹と稱せらるゝ菩提樹は幾度か伐り倒され植換へられたるものにして傳ふる處に據れば、佛滅二百餘年の後阿育王即位の始め邪道を信じ佛蹟を毀ち此聖樹を寸斷して焚きたりしが其遺株より新芽を生じたれば又も王妃の爲めに再び伐り倒されけるも新芽より三度成長し其後西曆五世紀の末設賞迦王の爲めに伐られ且其遺株を滅絶せん爲めに根を掘り穿ちて之を焼きたりしが其後數ヶ月にして摩竭陀王補刺拏摩之を慨き數千の牛を集めて其乳を注ぎ哀感祈る所ありしかば聖樹の新芽又生じ須臾にして丈餘の高さに及びたれば更に剪伐の恐を防がんとて高さ二丈四尺の石垣を廻らしたり、玄奘三藏の實見したる聖樹は即ち此木にて當時木の高さ四五丈なりしと云ふ、然るに一千二百二年回々教徒の王バクタイヤール、ギリヂの暴亂に遭ひてより以來此聖蹟の事を知るに由なく千八百三十三年頃緬甸の王使此地に到り聖樹の枝葉を採集して王に復命したりと云ふ、其後千八百八十年(明治十三年)大塔發掘の際一時聖樹を他に移したりしが緬甸及暹羅の佛教徒參拜し來るもの金箔を塗り香油を注ぎ或は多量に肥料を施したる結果遂に枯死したりしが大塔修繕の後一千八百八十五年カンニングハム氏其舊位置を鑑定して植附けたるもの即ち今日の聖樹なり。

六世紀の末葉に設賞迦王已に菩提樹を伐り倒し又佛像をも破毀せんとせしが像に接近するや恐怖の念起り之を毀つこと能はず大臣に命じて之を破毀せしめ代ふるに大自在天の像を以てすべきを命じたりしが大臣も之を恐れ唯だ大自在天の像を其前に畫かしめ僅かに王の命に従ひしと云ふ學者の研究に據れば大塔の建築は二世紀の中葉頃にして阿育王建設の故基上に建てたるものなるべく十世紀十一世紀の頃に**パロ**王朝に依りて更に修繕せられ後十二世紀の始め緬甸王大修繕を了し盛大なる供養法會を営みたりしが其の後百餘年摩竭陀國は全く回々教徒の掌中に歸し領内の堂宇は佛教も婆羅門も盡く破毀し去りしが此聖蹟亦其蹂躪する所となり大塔は遂に土中に埋没するに至りかくして佛陀迦耶の聖塔は地底深く埋められ佛陀の光明世界を照す能はざりしが學者の考證英國政府の盡力にて一千八百七十七年(明治十年)一月始めて發掘に着手し緬甸國王特使を派して其工事を監し一千八百八十年漸く大塔の全部を掘り出し八十四年其修覆を終り其工費十萬留比を要したりと云ふ、**チャールズ、ウアルキンス**氏大塔發掘前九十年此地に於て或る碑銘を發見して翻譯し、一千八百九年**ドクトル、ハミルトン**氏此地を訪ひて其研究を公けにし其後數氏の研究考證あり、將軍**カンニングハム**

ム氏又來り觀て發表する所ありしと云ふ。

釋宗演師嘗て詩あり

亡國山河多斷腸 回顧曠古事茫茫 伽耶城畔中天月 未必人間有此光

正覺山の參拜

一月十八日 待てる日置老師は急に旅程を變じて**ダイジリン**に**ヒマラヤ**山の雪けしき見んとて出發せりとて違約の通知あり、富士紡績の井上篤太郎氏三井孟買支店の辻氏と相伴ひて來りたれば共に佛塔を見る、山上氏の説明に此聖蹟を悉くさんものと樂みしことは駄目となり今度は余が人に説明の位置となりしぞおかしき、専門ならぬ余が如何にしてかゝる聖蹟の事を知りたりやとあやしみ思ひ給ふ人もある可れど門前の小僧は習はぬ經を讀む譬へあり、十日餘りの船中佛教に名ある默仙老師に同室せし事とてかゝる問題は元來好む所とて關係の文書など貪り讀みたるにてかくは人にも説明し得るなりけり、序に云ふ山上氏名は曹源佐賀の人**カルカッタ**大學に佛教の講義を受持てる佛教學者なり。午後前正覺山の佛蹟拜まんとて井上氏一行と共に行く**マハンタ**僧正の厚意にて其愛育する大

象に騎り行かれよとて用意ありわざ／＼其執事案内しくれたり。

僧院の庭には二頭の大象一は其年齢四十象牙の先きはわざと切り取られ其一つは二十歳にて血氣盛りのいたづら兒なり青地の毛氈に赤黄色々の縫取りしたる美はしき布片を地に引く計りなるを掛け其布片の左右の端に鈴を結び附けたり首の處に騎れる馭者は二たまたの鐵器の穂尖鋭きを持ちこれを象の頸に當てマリーマリーと掛聲して象を心の儘に扱ふ余等の仕度出來て庭に出つるに馭者は一と聲合圖すれば大象はおとなしくも先づ後足の膝を後ろに折り次に前足を折り屈めて地に躓づくを階子もてる男は其一方に階子を立てかくるを余先づ登りて前背に乗り井上氏後背に乗ると共に階子を外し一聲かくれば象は立ちあがるに小山の如き背上に座れる我等は振り落されじと綱にしがみ附き次の象には辻氏と寺の執事乗り前後してやがて徐ろに後門より尼連河の川原に乗り出せり見るは度々なれども乗るは初めての今日美はしく飾れる長き布れの兩端に鈴を着けたれば歩行毎に左右の鈴鋭く鳴るが二頭四個の鈴交る／＼面白き鳴音するに三千年の昔釋尊が前正覺山を去り佛陀伽耶に涉り給ひしと云ふ尼連河原を此古代の遺物たる大怪物に打騎り行く此日の旅我ながら大古の民に復りたる心地

して心ものどかなり。

やがて川を渉る川とは云へど淺く水極めて清し象は此水を飲むに長き鼻の先きを川水に挿し入れては之を口に曲げ入れ五回十回と度重り凡そ七八升も呑みたるべけれどいつ迄も際限もなければ馭者はマリーの掛聲して取手の穂先きを頸に突き立て急かせ向ひの岸に上れば小村ありこゝらにてはかく盛装したる象の外出も珍しと見え家々の男女老若皆軒端に立ちて我行列を眺め多數の小供は我等の跡に付き従ふも多し椽果の美はしき林を過ぎ棗の樹茂る中を通り余は象のあるくにつれ座りながらに高き木の枝を折り採りながら進む。

扇椰子高く聳ゆる間より赤裸々たる前正覺山を見る景色繪にも描き難き程なり又もや尼連河の支流を涉り行く事一時間にして岩山の麓に出て木も草も少き原を行きて前正覺山の裾に到る此邊の原には牛羊の放牧幾百千枯草を需めあるく様奇觀なり折柄尾長さ灰色の大猿象の鈴にや驚きけん一疋二疋原の内より逃げ出して山を指して走せ去るを付き來れる小供等面白げに追ひ廻すに此處彼處より五疋十疋やがて數十の猿羣を亂して逃げ廻る様珍しき眺めなり山麓にて象を下り岩山を登るに茨ある灌木多く草も花あるもの日本のニガナに似たる菊科

逃げ迷ふ猿の群

前正覺山

のもの玄參科、荳科植物などにて其他所屬も分らぬ小木あり、程なくタマリンドの樹此邊にては珍らしく大木となりたるもの一株ある處に到る、堅き赤色の岩に洞窟あり、此處ぞ名高き佛蹟にて洞穴は入口を閉し石漆にて固めたり、其内に入れば暗黒にて奥の壁に水氣あり光線の工合にて佛體の姿顯はるゝを拜むなり、昔は樹木も茂れる山なるべけれど今は赤裸々たる岩山にて三千年の昔を偲ぶには餘りに殺風景なり。

西域記第八に鉢羅笈菩提山唐にては前正覺と云ふ、如來將に正覺を證せんとして先づ此山に登る、故に之を前正覺と名くとあり、釋尊は此山の東北より登られけるが山動搖して安からず是れ成道の地に非ずと其西南より下りて東の方尼連河を渡り其河の西岸なる一株の畢鉢羅樹下に赴かれたりとぞ、尼連河は梵語のナエヲンジャナにて伽耶山の東、前正覺の西に在り南流して恒河に注ぐ、河幅廣き砂濱にて雨季の外平時は徒涉し得べく二條の水流あり、西なるを尼連禪河と云ひ、東の川をマハーナデーと云ひ相合流して一となる、此兩つの水流間に彼の釋尊は牧女より乳糜の供養ありし古跡ありと傳へらる。

山上より望めば尼連河を隔て、伽耶城下近く見え佛陀伽耶の大塔は扇椰子の

尼連河

象の食資

間に聳ゆるなど目も新たなる景色なり、歸りを急ぐは凡ての動物の性質なれど大象先生は中々緩々たるものにて其歩みはかどらず、ざりとて歩行の從者には駈足して漸く伴ひ行く程なり、象は空腹を感じたりと見えて路傍の草木を手當り否鼻あたり次第に折り取り掘り取りて召し上るが驚きたるは針茄子の刺多きものも殊更好物と見え鼻先きにて根がらみに引き抜き、さも甘さうに食ひ棗椰子、扇椰子の如き硬き葉も三枚五枚を一所にパリ／＼折取りて葉柄と共に噛み食ひ又丈け高き綿の樹の枝を折取りて葉も枝も食ひ盡す其力の強き其食食なる唯々恐縮の外なし、夕暮尼連河を渡りて僧院に歸る、夕照紅く大佛塔の高く聳ゆるあたりの空を染め、古く城廓に似たる僧院の屋根高きに扇椰子の立てる、孔雀、インコの美はしき大小の禽鳥の飛び翔くる、大象の彩衣は夕日に照りて更に紅きなど何れを見ても面白からぬはなく、折柄豚の子の怪獸に驚きて逃げ廻るなど又趣きある夕景なり、辻氏句あり

豚の子の親におくれて入日哉

波羅門のマハanta大僧正に逢ひ申さんとて執事に導かれて僧院の三階に登る、古き建物にて壁の間は古佛像梵字の碑石多く塗り込められいづれを見ても古色

正 波羅門大僧

を帯びたり、幾十の僧侶蹲り居るなかを通りて客室に到れば此處は極めて質素なるが大僧正は唯一枚の鬱金色の衣を召して接見會釋あるに此度佛蹟を拜し計らずも厚意を受けたるを謝したるに、此處まで遠路を尋ねられたるは誠に篤志の事と感謝するも如何にせば待遇の道を得べきか思ひ惑ふところなれど萬事は不行届なるべしなど懇ろなる辭あり、翌朝の出發は早き由なれば特に馬車の用意注意すべき旨など自ら執事に命ぜらる、一門の高僧身を持すること薄く人に驕らざる世辭馴れたる老僧の拶挨拶はいたく敬服して退き歸る、大塔所在地の石像彫刻物等は印度政府盡く之を保存し博物館の名を以て片石をも一屋に貯へ全く此等古塔の紀念物を手に入るゝこと能はざるもマハンタ邸内のもは手に入り得べきものありと聞き特に若干の石佛を貰ひ受けたり、余の手に入りたる數個の寶珠形小佛像中には阿育王當時の遺物と稱せらるゝもの一箇あり、是れ最も珍品にて紀元前二世紀のものとの鑑定せられ其他の三箇は紀元後二三世紀、黒色石の說法像は四五世紀のものなるべしと云ふ、此等は印度にても容易に手に入りがたき珍品なれば日本に持ち歸りなば日本の信心家は如何に悦ぶことなる可く、余の往きに暹羅にて得たる一千餘年前の釋迦如來の像を本尊として佛祖の正覺を得給ひし佛

手に入りたる佛像

蹟地にて得たる阿育王建設當時の遺物二千年以前のもの、緬甸古代の經典、瓜哇ポルポド、大佛塔の石片、暹羅にて掘り出したる象牙佛などいづれも一寺院の寶物たる價值あるべく、それに日本にては到底見る事も出来ぬ佛陀迦耶の植物、前正覺山の植物腊葉などは學術以外の珍品なるべし、尙ほ印度に來れるを幸ひに佛教關係の植物にて日本にて能く人に知られたる草木を調べ置かんとて注意して已に手に入りたる標品下の如きものあり。

釋尊の誕生に關係ある無憂樹

成覺に關係ある菩提樹及吉祥草

涅槃に關係ある娑羅樹

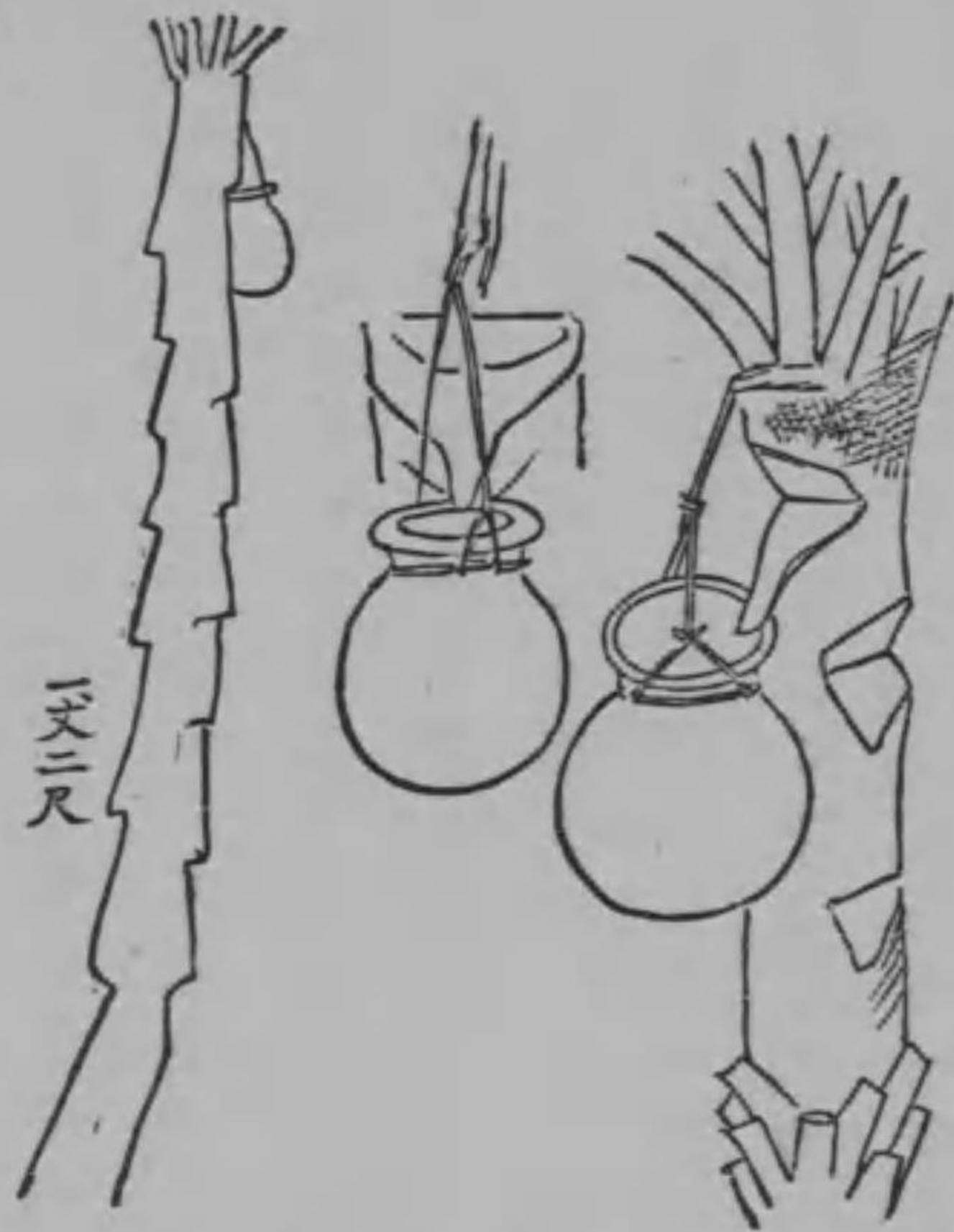
梅檀、七葉樹、優曇華、旋輻花なども考證して實物を得又圖書し置きたれば摩耶夫人が無憂樹の花の盛りに餘りに花の美しさに右手を伸べて枝にふれし際右腹より釋尊生れ給ひしと云へる名高き花は如何に美はしきものなりや、又三千年の昔より系統續きし佛陀伽耶の菩提樹、日本人の誰知らぬものなき娑羅雙樹の娑羅樹などは日本の佛教徒にとりては珍らしきものなるべし。

カルカッタに歸る

一月十八日 未明に出發六時ガヤ驛に着き井上氏の一行はベナレスに向ひ余

は十一時半の列車にてバンキブルに向ふ、此間多くの時間あればガヤの町を見る、町外れに棗椰子の汁を採る様を見て寫生をなす、臺灣南部に多き棗椰子(桃榔)は性狀殆んど同じきものなれば同じく汁液を採收し得べし、もし余の想像通りに採液し得べくば臺灣に一有用植物を加ふることなるべし。

棗椰子の採液



棗椰子

印度人の嫁入

鐵道沿路見る處の景色も漸くに馴れ印度式の珍らしき生活状態も追々に目馴れたり、小さき牛に荷を負はせて其の牛の尻尾をつかまへて追ひ行く小兒の多きは珍らしく、今日此頃は黄道吉日にや嫁入の多く客車に乗る、嫁御寮は轎より乗り

移る其折にも風呂敷の如き廣き布にてあたりを被ひたる間を借切りたる客車に入り附添の婦人いづれも色黒く光りたるが様々の持參物携へたり、嫁御寮は赤きかつぎ衣を目深く冠ることゝて沈魚落雁の御姿拜むこともなりかぬるが一寸なりとも美はしき嫁君の御顔見んと常に心がけて注意せるに何かのはづみにかつきの緩める間より見奉れば定めて御黒粉をや塗りたりけん色は飽く迄も黒く眼は光り耳輪と鼻の先きに孔をあけて簪めたる金色に光るものゝみぞ目に立てり、これが今日の婚君が待ち兼ね給ふ三國一の嫁君ぞや。

四時バンキブルに着きハンジャブ郵便列車を待つこと三時間にて七時半發、夜行の夢結びて十九日の夜明カルカッタ驛に著く。

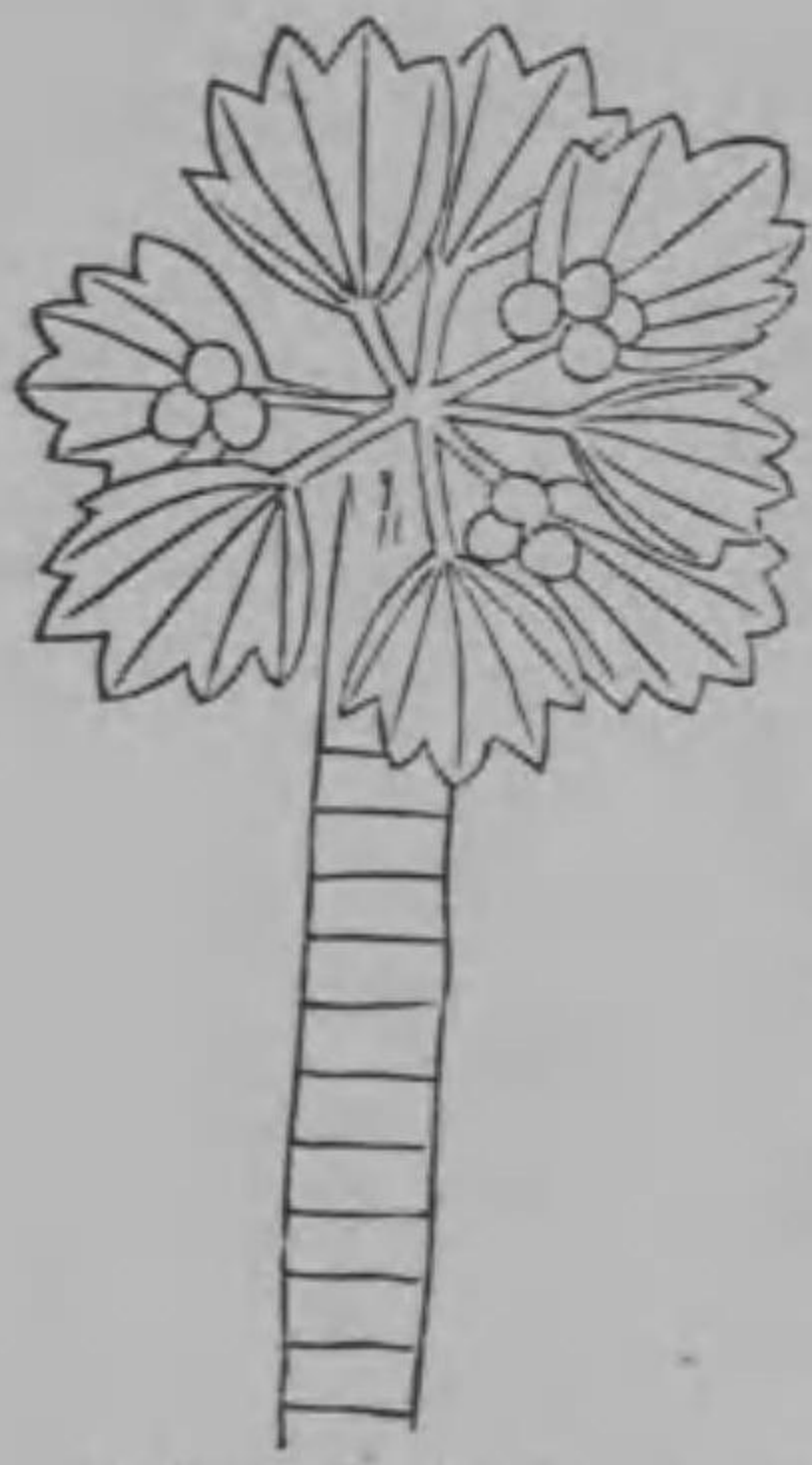
直ちに印度博物館見に行く昨日は婦人日として女の外には人を入れず今日は金曜日として學生日なり、結構の壯大陳列品の豊富東洋第一の稱あり、此館長には兼て渡瀬博士よりの紹介もあり調査の項目も多く緩々見る積りなれば今日は唯素通りのみにて半日を費せり、流石は佛教國として之に關する陳列品多く其精巧眼を驚かすもの多し。

余は佛教關係の彫刻物を見あるく内計らずも日本の菊の紋と同じき十六輪の

博物館

紋形を見兼ねて菊の御紋は佛教關係にて輪寶の形より出てたりと聞きしことあるが、余はもし其出所佛教關係が正しきものならば蓮華より轉化したるものにあらずやとの考へ浮び出て、これに關する印度古代の彫刻物を比較して余が説の愈々面白き根據あるを發見したり。

淺學のことなれば此等の事につき已に前人の説もあるべきなれど兎に角考へ



古佛代に畫用ひられたる扇椰子の意匠

も普通なるべきものと思ひ誤る人もあらんが佛畫には扇椰子を意匠とすべきものにて古代の佛彫刻には能く此意匠を用ひたるを見る、應用植物室は余の特に調査せんとするものにて其配置方法と材料の豊富なるには驚くほどにて、ワット氏の大著印度有用産物字彙の材料は盡く此處に網羅せられたること、思へば此一室丈けを見るにても三四日の時日を要するなるべし。

蓮華の意匠と菊の紋

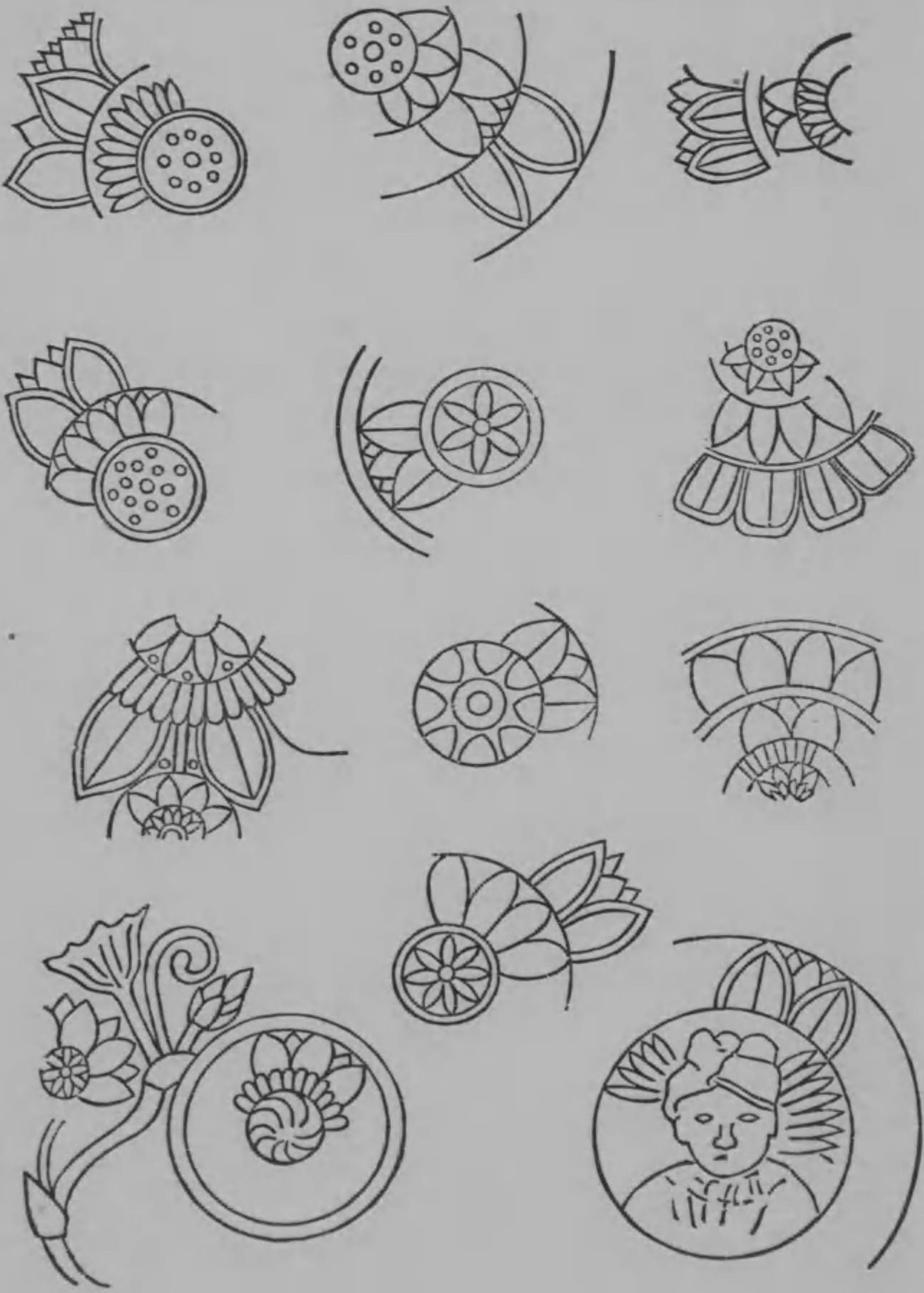
我皇室の御紋章なる菊の紋の起原に就ては種々の説あるが或は日輪の形より出てたりと云ひ或は菊は括り花の名あり括りたる花の義にて天子は日本を總括りする心にて菊を用ひ給ふ由の説もあり、又佛教に關する起原説にては輪寶より轉し來れるものなりなどの説もありとのことなるが元來菊は我國産にあらず廣東にては Kink 福州にては Kink 朝鮮は Kink と發音し我國も古くはクク と發音したるものにて菊の花を特に御紋章とされたる起原は明らかならず、松村博士の菊の紋の説は數年前東洋學藝雜誌に發表されしことあり、菊花の紋がアシリヤ國の古き彫刻にも顯れ居ることを詳述されけるが歐羅巴人は菊と云はずローゼット即ち被布のコハゼ止めの飾りに用ふる縫模様シワ模様の如きものを指すが又蓮華より轉じ來れりとの説もありと云へり。

菊の紋は種々の形あるも十六葉の菊紋は他にはなきものゝ如くに云ふ人あるが決して他になきことにあらず、十六葉は人間思想の自然に成るものにて圓を四分し更に之を二分して八となし之を重ねて十六となすは意匠としても爲し易き

ものなり今日の所謂菊の紋なるものも其起りは必ずしも菊の花其物を取りたるにあらざりて圓を四分して更に之を二分して又之を二分したる意匠を用ひたるものが自然に菊の花に似たるより更に菊花の形を加味したるものにあらずやと思はるゝとの説あり輪寶説も日輪説も偶々相似たるより起れる説なるべし。

外の國は別問題として印度古代の彫刻に見る菊形の紋は全く菊花に依れるにあらずして蓮華より轉じたるものと思はる、余がカルカッタ博物館の佛教彫刻物中に見たる蓮華の意匠畫を調べ見たるに甚だ興味ある諸種の變化の形體あるを知れり、蓮華をくづしたる意匠は菊の紋に似たるもの多し、故に曰く印度にて見る菊紋形は蓮華より來れるものなりと。

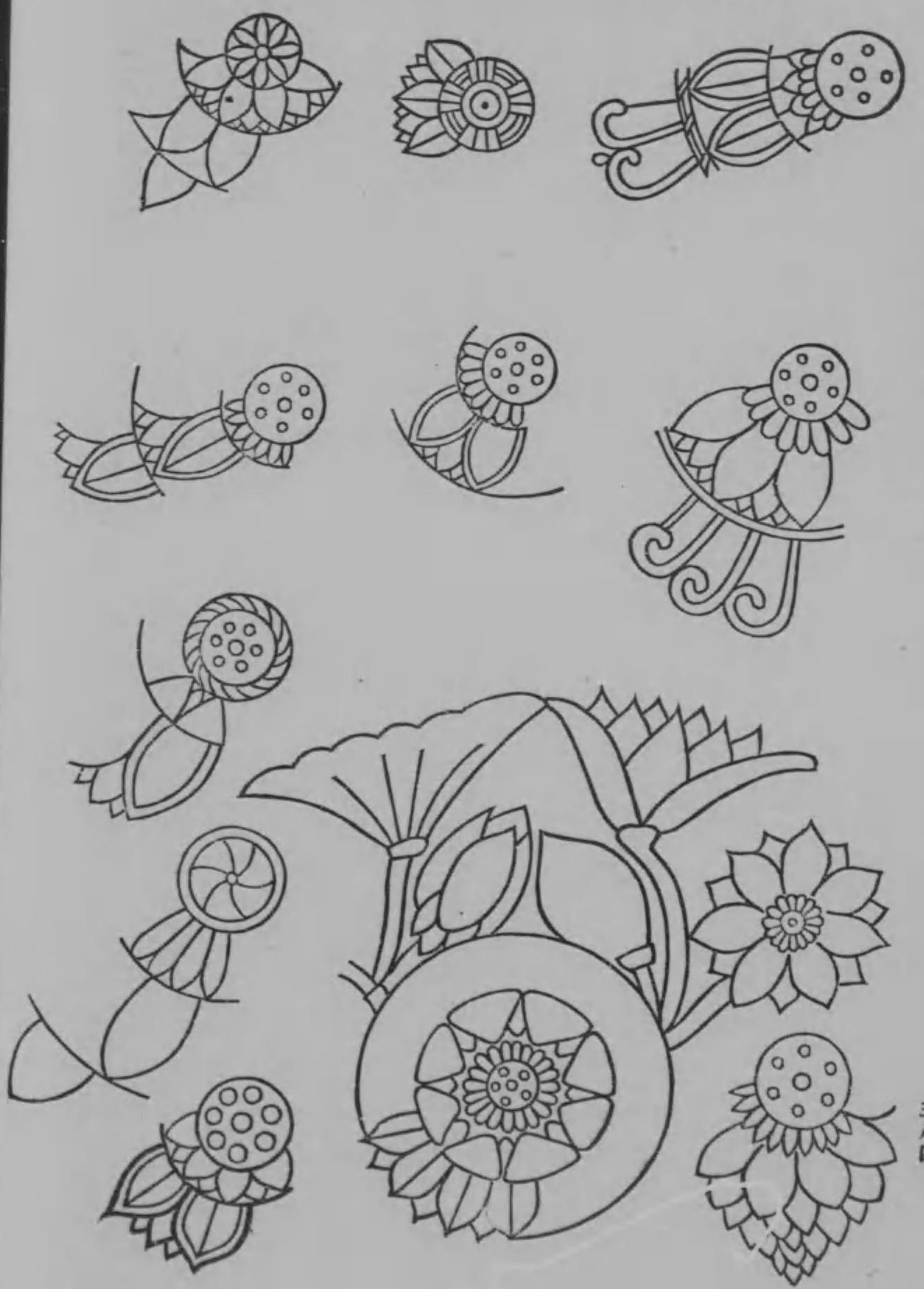
泥池の水面に浮べる蓮葉蓮花を以て清淨の花として之を崇めしは印度の如き熱帶地に於ては左もあるべきことにして盛に古代各種の彫刻殊に佛教關係の藝術に之を應用したるものゝ如く輪寶も亦佛教意匠に用ひられたる普通のものにして蓮花及び輪寶の意匠は互に相似たるより相通じたる意匠となれるものなるべく佛教徒の菊花紋は輪寶に出てたりとする説も蓮花説も強ち無意味のものにあらずるべし、菊の紋は輪寶に出てたりとの説は確證とすべき材料を有せざるが



第十二章 印度日記

蓮華の意匠と菊の紋

輪寶は轉輪
聖王の表章
なり帝室の
紋章に十六
菊形なるは
形により比
況したるも
のにて菊花
其物の日本
の風土にも
特殊の縁故
ありと思は
れず印度思
想の傳來に
出てももの
か(田中智
學氏)



印度及び他の國に於ける菊の紋は必ずしも菊其物を意匠とせるにあらずして蓮花若くは輪寶の意匠がたま〜我國の菊の紋に似たりと云ふに過ぎざるべし余が印度博物館にて見たる印度古代の彫刻物に現れたる蓮花意匠を寫したるもの前掲の圖の如し。

蓖麻油

一月二十一日 蓖麻油、菜種油工場を見る。蓖麻油工場は小規模のものなり、搾油の方法は先づ種子を壓搾機に掛けて粉末と爲し之を麻袋に包みて搾るものにて油量は三十六%なりと云ふ、別法として種子を炙りて臼にて搗き種子量の四倍の熱湯を加へて煮沸し絶えず其混合物を攪拌して上面に浮く油を抄ひ取る法もあり、又種子を一夜水に浸して翌朝麻布に包みて壓搾するものあり。

蓖麻の栽培面積は六十萬英町を超え製油工場百十二箇所にして千九百十年の蓖麻油の輸出量百萬ガロン其價百二十萬留比を超え蓖麻子は百九十萬本千二百六十萬留比に達せり、但し此油は印度にては家庭の燈火用にして又機械油に供し染料の補助劑となす、普通印度人の使用する油は一マウンドの價十乃至十六留比

なるも薬用油は二十四留比なり、油粕は燃料に供せらるゝも有毒なるを以て決して飼料と爲さず、肥料として有効なるのみならず往々瓦斯製造原料に供せらるゝことあり。

カルカッタ植物園

一月二十二日 市外七哩の處にあるカルカッタ植物園に到り三好博士よりの紹介ありし園長ゲージ氏を訪ふ、懇切丁寧余の知らんと欲するものを示し、自働車を引き出して同乗せしめ園内を乗り廻はして余の見んと欲する植物を示してくれられ、余が見んことを望めるヒマラヤ山下の幾那樹栽培地は同氏の監理に屬することゝして余が出發の日時を問ひ直ちに其主任に電報を發し又余が望む所の調査項目を聴き助言甚だ親切なり、植物園は東洋第二と稱せられポイテンゾルグ植物園に次ぐ大植物園にて腊葉室の設備大仕掛にして此方は瓜哇よりも優れりと思ふり、ほゞ午後園長邸の茶に招かれ夕方歸り同二十三日再び植物園に到り腊葉の比較研究を爲し書籍室にて調査す、園長余が爲めに幾那栽培地視察の日程を作り何時何分何驛にて乗り換へどの處にて中食すべく、此の驛より下車馬に乗る可

植物園

松風の木

く出迎の人待受け居るべしとのこと細かに書き示し與へらる、外國新渡來者に對する學者の親切注意の周到なる感謝の外なし。

植物園の門前の農家に其葉複葉にして松風草に似たる灌木あり、此木馬來半島にても採集し其他所在地之を見たるものなるが白花あり細長き實垂る、此物學名を「モリソガ、ブテリゴスヘルマ」と稱するものにて西部ヒマラヤの森林中に野生ありとのことなるが印度其他熱帶各地に廣く栽培せられ葉も花も嫩き實も食用に供せられカレーに加ふるものなり、此種子より搾れる油は「ベン、オイル」の名あり時計屋の必需品にて又機械類の精巧なる部分を滑らかならしむる用に供せらる、此植物は臺灣に移し得べき有用植物の一つなり。

動物園

一月二十四日 動物園を見る、規模極めて廣大なり、此夜日置老師の一行佛蹟地參拜の途につく、印度内地の探檢老體の健康を祈り在住日本人の主なるもの皆停車場に見送る。

幾那栽培地

行ダージリン

一月二十五日 午後五時三十分セルダダ驛發の列車にてダージリン線に向ふ、

三井の田島、佐々木兩氏等見送らる。此度はトーマス、クロク店の周旋にてボーイを雇ひて連れ行く。印度旅行にはなくてならぬものはボーイなり。八時半ダムグデヤトより更に汽車にて九時半出發、兼ねて約束し置きたる客車内に寢床作りて休む。二十六日午前六時カルカッタより三百二十八哩なるシリグリー驛に着く。此處にて輕便鐵道に乗り換ふ。車室は小にして僅かに四五人を容るべく山坂次第に高し。綿の木紅花あり臺灣のものに比すれば更に眞紅色にして燃ゆるが如し。菩提樹あり。椽果あり。波羅蜜あり。麻栗樹あり。林間綿の木と共に紅色を競ふものは刺桐花なり。畑には豌豆の花盛りなり。白鷺、人喰鳥多し。五百尺の處に天然林あり。拓いて茶を栽す。ソコナ驛舎紅花の笹葛イラダカツを立木にからませたるは頗る美觀なり。八百尺の處に山芭蕉を見アカメガシハ、パウヒニア、大猿オオサルの類多く、二千二百尺に登れば桃花正に盛にしてヨモギ多く此の高地尙バンダナスの藪あり。山は益、高く線路愈、急にして屈曲また屈曲せる線路は崖の間に架けられ仰げば奇岩峙ち俯すれば千仞の溪脚。下より雲立ちのぼる。三千尺に登れば冬枯の景色となり。四千五百尺の處より路傍に杉の林あり。鐵路益々急にして樹木も暖帶地方のものとなり。四千八百六十四尺

日本の杉

のクルセオンク驛に到れば急峻なる山坂は盡く拓きて茶細となし。谷間のそこそくに製茶場あり。杉の木次第に多く日本らしき景色となる。此の杉の木は五十年前フオーツン氏が日本より種子を移入せる物にて土地に適したる結果盛に蕃殖してダージリン附近一帯の景色を飾る木となりたるものなり。十一時過ソナダ驛に着く。此處は海拔六千五百五十二尺の處なり。ソナダ驛に下れば土人の手紙を持ち來るあり。幾那製造場主任シヨウ氏の使にて、苦力を送れば荷物を運ばしめよ。乗用に馬も送れり。途中雨に遭はぬを祈るなど短き手紙ながら其人の親切も亦嬉しくやがて馬に乗りて山坂を乗り行くに間もなく森林に入る。カシの種類多く木々の枝々は地衣、蘚苔に被はれたるを見れば、濕氣の多き處なるを知るべく、得ならぬ芳香の風に送られ來るに之を探せば瑞香花の白花誠に美はしく咲けるなり。之を折り取らせて馬上にかざし尙も登ること一哩許りにて幾那栽培地への指導標あり。登りは二哩半にて七千尺となり下りは八哩にて三千尺の谷に下るなり。日光も透さぬ密林を進むに樹下に陰草茂り蘚苔は地にも木にも岩にも密生す。下ること六哩林を出て、廣々したる眺望よき處に出たり。谷のそこそくに茶園あり。人家の一つ二つかなたの山此方の谷に見ゆ。更に峻しき山坂を下ること二哩にし

ソナダ驛の下車

ヒマラヤ山下の植物景

て美はしき杉林に入り、やがて幾那園を通り抜けてマングホーの小高き丘の上に建られたるシヨウ氏の官舎に入る。

懇待

庭には歐羅巴式の花草美はしく咲き亂れたり、其家に入ればシヨウ夫人先づ出て、愛憎よき挨拶あり、主人も出迎はれ直ちに茶の席に招かる、室はストーブにて暖きに夫妻の心よきもてなしにうれしく茶を啜り菓子を食べふに駈け入り来る三人の幼き愛兒に日本の御客様に御挨拶申さずやと夫人の云はるゝにいづれも小さき手さしのべて手を握る愛らしさ、やがて二疋の犬と一疋の猫も入り来り犬は半身立ち上りてチンチンをなすも愛嬌にて菓子を與ふればテーブルの下なる猫は我れにもとせがむ、温き家庭の快さは異郷の人に客となりたる心地せず暫しは雑談して二階なる我室に退く、夜はかゝる山中なればと唯黒の背廣にて食堂に入るに主人夫妻の衣服を改められたるに先づ驚かされ流石は英國紳士の家庭禮儀の正しきに敬服して旅中の略服を断りて食卓につく、食後はストーブの傍らにて茶談あり、幾那に關する書を需めしに主人は書齋に案内して一冊の古き本を與へられ我書室は化學書のみにて君の望むものは此一冊のみなりと云ふ、外にシキム雜録の一冊を借り、我室に退きて讀書夜を更かす。

幾那工場

此處は四千尺の高地とて冷氣強く與へられたる三枚の毛布にて尙寒く携へたる二枚の毛布を加へて寝につく。

一月二十七日 朝主人の案内にて幾那工場を見る、瓜哇にては遂に見る事能はざりし工場も此處にては残る處なく案内説明しけれたり、幾那製造の原理は極めて簡單なるものにて其順序は左の如し。

- | | | |
|---------|-------------|------------|
| 一、 樹皮細末 | 二、 加水 | 三、 苛性曹達注加 |
| 四、 煮沸 | 五、 沈澱 | 六、 油硫酸及水注加 |
| 七、 油除去 | 八、 酸性中和 | 九、 遠心器 |
| 十、 熱湯注加 | 十一、 濾過 | 十二、 遠心力分離 |
| 十三、 乾燥 | 十四、 硫酸キニートネ | |

順序は是丈けの事なれど藥品の調合は工業上の秘密に屬せり、此栽培地の原料の外は瓜哇より樹皮を買入れて製造する由樹皮中に含有するキニートの量は五乃至九パーセントにて瓜哇産に比すれば含量少し、研究室を見、栽培主任のルツセルス氏に紹介せられ同氏の案内にて栽培地を一めぐりす、苗床も見たしと云へば遙かに離れ、たれば午後案内すべしとて其官舎に到り地圖を見て一と先づ歸る。

此栽培地の總地積は三千英町にて内幾那樹の栽培は二百三十七英町、薪炭用樹の造林地八百十一英町あり、幾那樹はレゼリアナ種、サクシルプラ種及雜種二種を栽ふ薪炭材は日本杉、アベマキ、バツ克蘭デヤ^{バツ克蘭デヤ}及ヒマラヤ樺等なり。

午後二時ルツセルス氏の案内にて五哩ばかりも隔りたる苗床を見る、二千三百尺の森林内を拓ける所にて瓜哇の方法よりは稍々簡單にて苗床はレゼリアナ種のみなり、瓜哇と異るところは接木をせざることなり。

新たに開墾して苗木植附の準備中の處を見る傾斜地にして有機質多く柔軟なる土壤は最も幾那樹に適し八尺乃至十尺の距離に栽うるなり、瓜哇を見て更に印

日本人の來
りしことな
き山中

度を見たる余は幾那栽培に就ては信念愈々固く理解する處多く此の日本人の來れるとなき山中に踏み入りたる勞苦に對して確かに報いられたる心地せり。こゝまで追かけ來りし馬に乗り峻しき山坂を上りて薪炭用樹の造林地を見る、杉の木、アベマキ及バツ克蘭デヤ樹多し、杉の木は實に能く成育し此地方の一林木となれり、バツ克蘭デヤは生長速くして樹姿も美はしく薪材としては勿論庭木として、もよきものにて臺灣に移植したき一有用樹と思ひ種子を集めて印度みやげの一つとせり、やがて臺灣の山地殊に阿里山沿道などに此の木茂りて印度に日

日本文字の
揮毫

本杉繁茂するが如き日あるべし、余が目的なる純良なる幾那種子を手に入るとは政府直營の栽培地とて主任一個の取り計らひは出來かぬる事且つは熟季前なればカルカッタに歸りて夫々の順序をふむこと、し夕方巡視終りて歸ればシヨウ氏は余の希望せる幾那各種類の樹皮及硫酸キニ^ニチ、樹皮粉末及キニ^ニチ錠の見本と包装用箱材の標本三種を贈られたり、此夜食後雜話の間に余が紀念帖への揮毫を求めしに我が家の紀念帖にも書き置かれたし成るべく日本の筆にてとの所望に和洋兩様の揮毫をなしぬ。

幾那栽培の來歴及び其栽培

十九世紀の初め秘露及びポリビヤ地方の幾那天然林の濫伐は幾那皮の不足を來したるも此南米特種の藥料は他に供給地なき爲め印度政府及和蘭政府は探檢隊を派遣して幾那樹の種子及苗木を印度及瓜哇に輸入し銳意其栽培を試験したるが印度に於ては先づマドラスの管内なるニルギリ山及び東部ヒマラヤ山中のダイジリン地方に於て植栽に着手せり。

ベンガルに於ける植栽は數度の失敗を重ねたる後一千八百六十四年遂にダイ

ジリンの東南數哩の地なるルムジョー地方のセンカルに於て「サクシルブラ」種を植ふたるが一千八百七十五年には約三百萬本に達し同年工場の設立を見るに至れり。最初の製造は簡單なる越幾斯の製造に依り樹皮中に含まれたるアルカロイドの混合物を製造したるものにて一千八百七十五年には約五十封度を製し一千八百八十三年には約一萬封度の輸出額を見るに至り後幾那鹽工場を設立し一千八百七十四年頃より種類の植換に着手し今日は主に「レゼリアナ」種となれり。一千八百八十八年始めて幾那鹽製造に着手し同年は三百封度を産したり然るに次第に幾那鹽の價額下落するに至りたるは錫蘭及び南部印度に於て盛に其栽培に着手するに至れる結果にして一千八百七十年には一オンス二十留比なりしもの年々著しく下落したるより濫りに多額の幾那鹽を輸出し瓜哇に於ても殆ど同一の状態なりき。

一千八百九十八年頃ベルガルの植栽地所謂「マングホー」栽培地の名あるところにして此附近一帶に栽培地を擴め其面積約九十英町に達したるが此等の土地は森林地にして栽培地は二千呎乃至六千呎の高地なり。

幾那の栽培地は五十乃至百英町の林地を一區となし伐採を行ひ冬季に之を燒

棄し苗床より移し栽すべき樹間距離は四呎乃至六呎にて豫め穴を掘りて土壤を緩め空氣に曝し置くなり。

幾那の種子は極めて輕微なるものにて一オンス約七萬粒あり二三月頃成熟裂開するを以て之を集めて特別に整地せる床に播種す、苗床は差掛小屋にして竹を柱とし草屋根あり、屋根は前面の高さ五呎後方二呎となし、床は日光の直射により甚しき蒸發を防ぐ爲めに北面せしめ其苗半吋の高さとなれば約一時の間隔にて移植し後四吋の高さを度として更に移植を行ひ十月頃約一呎となれば草屋根を取り除き翌春まで日光に直射せしむ、栽培地の植附は密植の場合は一英町二千本移植の場合は一十本とし初年は手及鎌にて除草を行ひ二年以後は手輕に「ホー」又は手にて除草し、密植のものは三年後に間引をなすなり。

適當なる樹皮の採取は十年後なるを要し幼樹も老木も樹皮の製法は同一にして高さ二十呎以上に達する木は之れを根ながらに抜き根、幹、枝に分け皮は總て鈍刀にて剥ぎ取り籠に入れ乾燥小屋に入れ濕潤なる天候には特別に設けたる乾燥貯藏室に運び入る。

乾燥小屋は傾斜せる屋根の開放せるものにして割竹にて作れる五以上の階段

あり階段の高さは一呎乃至二呎なり、此床上に破碎せる樹皮を散布し空氣の通を自在ならしむ、かくしたる樹皮は貯藏室に移し置けば製造の時まで永く保存するを得べし。

栽培の種類は「レゼリアナ」種最も盛に栽培せられ、「オヒシナリス」種は「レゼリアナ」種の適せざる高地に適せり、而して採收したる樹皮は盡く小馬にて「マングホー」の工場に運送せらる。

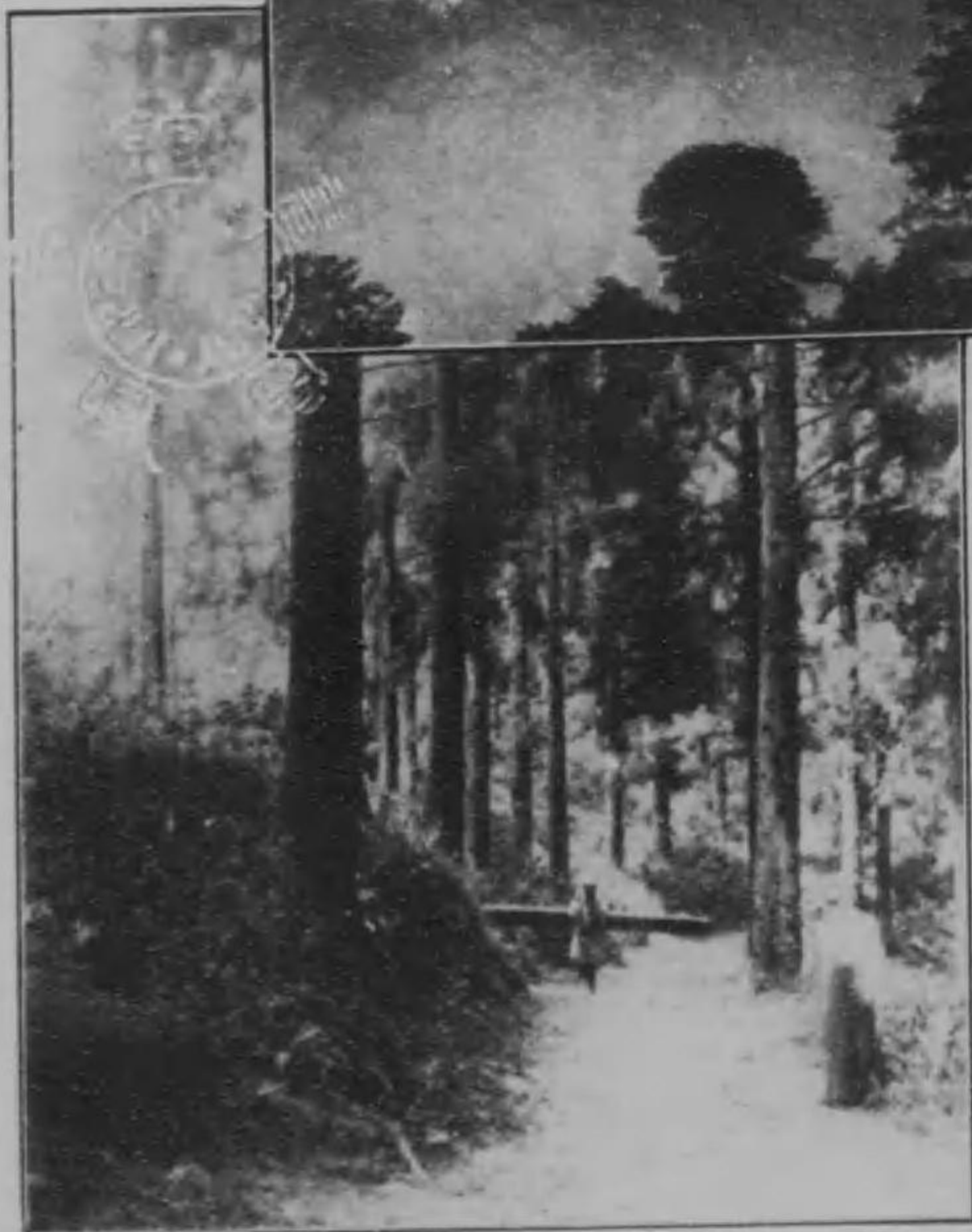
ダーヅリンに登る

一月二十八日 朝早く馬の用意も出来たりと聞き主人夫妻が心よりの歡待を謝して立ち出づるに幼き少女のグロドバイもうれしくペランダに立ちて我姿の見えずなるまで見送りくれたる主人に馬上帽を振りて最後の別れを告げて八哩の山坂を登り二哩の下りは嶮しければ馬を下りて植物採收を爲しつゝ下る、老樹の幹に白花美はしく咲ける蘭科植物あり、馬丁の若者を上らせて之を採るに葉はなく太く圓き葉脚より大なる白花の咲ける珍種なり、日なたの地上佐久間草多く紅花あり、紅き果も美はしきに之を採集す此草先年新高山上に採り後佐久間總督

佐久間草



ヒマラヤ山下



ダーヅリンより
見たるヒマラヤ山

マングホーの杉林

に隨行して阿里山に登るの日更に之を採集して紀念の命名を爲したるものにて
早田博士之をロガニア屬に收めたりしが後キユー植物園にてヒマラヤ山のもの
と比較研究の結果ヘミフラグマ屬に訂正したるものなり今日圖らずヒマラヤ連
脈の此處にて此生本を見るを得たり但し臺灣産は白花にして微紅を帶ぶるもの
なるにヒマラヤ産は淡紅花なり。

ソナダの停車場に下れる時已に郵便列車の發せる後なりければ待合室に入り
て憩ふに印度人の驛長尋ね來りて親切に何にかと世話してくれ茶を與へなどして
余は日本人を好むと云ふは御世辭のみにあらず遂に驛長室にストーブの傍らに
席を作り話談は印度宗教より家族制度に及び結婚制度を談りて日本の事を問ひ、
アドミラル、トゴを尋ね、ゼチラル、ノギに及び日本のシントイズム、ハラキリ、サ
ムライなど能くも日本を知れる彼の間に二時間を費し、やがて普通列車の來るに
乗りてダイジリンに向ふに驛長は我手を握りて前途の旅行の安全を祈る暇乞あ
り、何かと荷物の世話まで自ら驛夫を指圖して爲してくれぬ、かゝる際の人の情けは
ありがたく思はれたり、霧いつしか深くたち込めてあたりの景色も見え分かず、あ
る時は森林の中を通るに濕氣多ければ樹梢皆サルノヲガセなどにて被はれたる

親切なる驛長

を見る、鐵路は傾斜甚しき崖を開きて作られたれば千仞の巖石は今にも落ちかゝるが如く能くも斯る處に鐵道を作れりと思へる程なり、茶園あり茶の工場諸處にあり三時ダージリンにつけば一人の土人尋ね來りて手帳を示すを見れば此頃日置老師を案内して來れる山上氏の證明書あり、此男は先年大谷法主の僕たりしものにて良きものなれば安心して案内せしむべき旨の記載あり、外に井上雅二、畑少佐などの記名もあり、日本人には多く相接せる男と思へば安心して案内に頼みウイドランドホテルに入る。

觀光客多く別館の一室に導かる、寒ければストーブ焚かせて暖を探る、ストーブの火に接せざること茲に幾年目なるべく、火のそばうれしく手をかざす折に先きの案内者尋ね來て今日は日曜にてパザリの開かれ居れば見給へと導くまゝに行き見れば西藏、チバル、シキム、印度様々の人種入り混りての市場にて物珍らしく經めぐる。

山中の樂園

ダージリンは北緯二十七度海拔七千五百尺一年の平均温度五十八度の處にて今が年中の最も寒き時季なり、西藏の要路に當り今現に西藏の噠喇嘛は此地にあり、山角を開きて建てられたる町として風景絶佳眞に山中の一樂園なり、ここは千

八百卅九年英國のキャンブpell博士の經營を始めたる處にて當時は人家二十戸に過ぎざる寒村なりしも今は人口ペンガル州唯一の避暑地となり年々に歐米の觀光客多き名高き處となりぬ。

ヒマラヤの雪景

一月二十九日ヒマラヤの雪景色見んためタイガーヒルに登らんとして朝三時起き出て仕度輕々しく本館の前に出れば案内者と馬は已に余を待てり、茶もそこゝに濟せて馬に騎るに同じく出立つもの數頭外に婦人連は六人かきの轎にて西藏人之をかけり。

山坂に建て並べられたるが市街とて電燈の光りに暗を照す其景色美はしくやがて山坂を上りては下りゴームの町に下り更に登りて三哩ばかりにてタイガーヒルに登る、此時漸く夜はあけ放れたり、地上白く霜あり幾年振りにてか此の霜を見たることゝ珍らし、休息所あり盛に焚火して冷えたる手を暖め屋上の展望台に登る、山は八千尺の高峰にて草は皆冬枯れ篠竹茂る、満天の星いつしか影を失ひて雲四方を塞ぎヒマラヤ連脈と思ふ方は雲更に深く鎖していつ晴るべしとも見

タイガーヒル

高山植物園

えず、近き谷々より立ちのぼる雲はいやが上に深く、折柄朝日の雲間よりさしのぼるも須臾にして其影をかくし近き山々峰々も次第に其影を失ふにいたく失望せる人々は已むなく歸りの途につく、あはれ此遠き山道をヒマラヤの雪景見んばかりに夜を罩めて登り來れる望も絶え空しく馬を返すぞ本意なき、附近の植物など採集する内に二丈に餘る石南の大葉なるがあり珍らしきもの、一つなり、八時にホテルに歸りつき朝食後植物園に到る、隣り部屋の若き獨逸人尋ね來て君は植物學者と見受け申せり、余は東アフリカの獨領アマニに居る昆蟲學者なりと云ふに名刺を交換すればドクトル、モールスタット氏なり、共に相伴ひて植物園を見る、主任のケープ氏不在にて旅行先きより日本の紳士到りつく苦なれば厚待せよとの手紙ありたりとて留守の園丁懇ろに案内してくれたり、大温室あり櫻草の花盛りなり、名高きヒマラヤ石南は花季には早くダージリン名物の山櫻は花過ぎて實のみなるを枝折り貫ひ日蔭室を見、白花の木蘭美はしきを賞し小博物館にヒマラヤ産の哺乳類、禽鳥、昆蟲類の標本を見る、午後市内散歩土産など買ふ、西藏シキムの産物多く獸皮、虎、豹、熊、狐なども多し織物も名物の一つなり。

一月三十日 昨朝は折角待ち設けたるヒマラヤの雪景見かねたれば今朝はせ

天下の壯觀
ヒマラヤの
雪景

めて此地よりなりとも山の姿見たきものと五時に起き出づれば空はよく晴れ渡りて星の光あざやかなり、急ぎ仕度して暗の内を南の小山に登る、やがて明け放るゝ頃には雲又もや山のあたりを閉ざして其姿見え分かず又もや失望して歸途につくに雲の間よりそれかと思ゆる形見えたるも是れもまたくまに濃き雲の内に見えずなりぬ、六時十五分ホテルの我室に歸り來りふと北の空を見ればこは如何に遙かの雲の上に山の頂き朝日に照りかゞやきてあざやかに見え渡るがあり、これぞキンチンジャンガの峯にて二万八千五百五十六呎の高峯なり、やがて一つ二つの峯續きあざやかに見ゆるに嬉しさ限りなく、それを見渡すに一分毎に山の雪日光の爲めに變り行く様面白く、初めには紅く後は黄に遂に白く、雲は其下をめぐりて山はいよゝ高く見え、かくて二十分三十分と經るに雲は愈湧き立ち四十分にして全山雲の内にかくれ了んぬ。

あめつちのさかひに立てるヒマラヤの

嶺の白雪たにの白雲

日置老師先日此地に此雪景を見天下の壯觀なりとして詩あり、之を書き贈られ此雪景を見るの日此の詩を俗譯せよと需められき、今此壯大なる雪景を見て老師

の吟ずるところ甚だ詩趣多く感吟數回乃ち其心を俗譯せるも此の壯觀は俗歌は寧ろ凡俗化するものにあらざるなきか又前の三句佛史を知らざるものゝ意譯しがたきところと思ふも匆卒試みに老師に書き送れるものはかくなん

默仙老師の詩

五天笠土佛陀蹤 山脈貫通神氣鍾 白雪堆存童子昔 紅霞重顯莊嚴容
日昇染出黄金色 雲逆描來水墨龍 膽是仰之人識否 長鎮世界最高峯
俗 譯

山は雪山佛のみあと

數の中でも名は高い

見あぐるばかりの山又峰の

神々しいぞやヒマラヤは

今も昔の故事思ふ

峰の白雪のりのあと

下界暗いが遙かの空に

ほのぼの見えます山のかげ

朝日照るてる照る其光り

あかく染めたる雪の山

日影昇ればこんどは變る

峰の白雪こがね色

嶺にたなびく横雲見れば

墨繪にかいたる龍のかた

見れば見るほど氣高い山よ

これがヒマラヤ世界一

再び植物園に到り腊葉室にヒマラヤ植物を観る、ヒマラヤ櫻は紅花にして臺灣櫻に似たる種類なり。

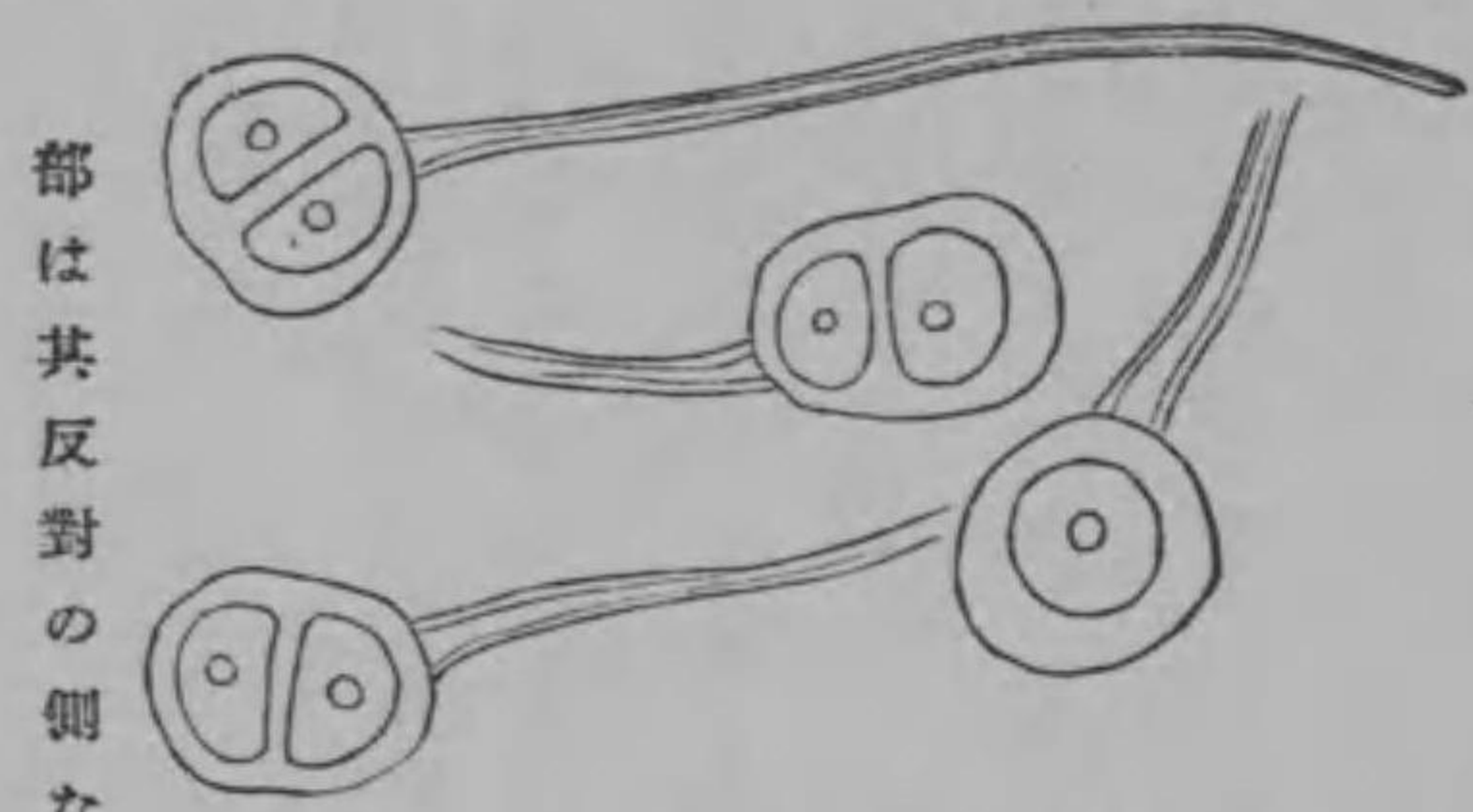
午後若き西藏人尋ね來り曰く、貴下の職業と旅行の目的如何と、余曰く君は何人にしてかゝる間を爲すや、彼曰く余は警察官吏なり、命を受けて來り問ふなり、曰く余は植物學者なり、我れの何人なるかは此携帶品にても分るべしと採集植物を示すに、彼曰く了承甚だ禮を缺けり、實は貴下は餘り人の上下せざる停車場より乗られ且つ深く山中に入られたりとの内報あり、故に御尋ねしたるのみなり、余曰く數日前日本高僧の一行此地に來れる筈なり、之を知れりや曰く然り日置及び山上二氏なるべく現に我が手帳に姓名あり、氏等は噓囁喇嘛に逢へり貴下も之を欲する

や曰く否余は植物調査以外に所要なし兩氏は佛教徒として法王に會見したるなるべきも余は何等の用件なし、彼曰く敢て問ふ貴下の職業且つ官吏として受けらるゝ報酬額如何、曰くかゝる事は君に答ふる限りに非ず、彼遂に辭し去る、これは警察の注意人物として視られたる者なり、妙なる事もあるもの哉、午後二時ドクトルモースタット氏と同行郵便列車に乗り翌三十一日午後二時カルカッタに歸着す。

新植物の發見

ヒマラヤ山中にて採集したる植物多く後日カルカッタ植物園にて園長ゲージ氏の檢定を受け又マングホーの山中にて採收したる禾本科植物に寄生したる銹菌を現に印度の菌類研究中なるブサの農事研究所長バットラー氏に送りたるに同氏は更に獨逸の菌學者シドウ氏に送りたる由なるが歸朝後に此銹菌は新種にて、ブクシニア、チグランデイと命名したる旨通知あり、但し此新種はシドウ氏は菌學雜誌第十卷第三號に發表せり、此新發見の銹菌の性狀左の如し。

寄主禾本科植物チグランデイ、マダガスカルレンシスの葉に寄生す
病徴各胞子堆は葉の兩面に生じ表面は裏面より其成長多し其形圓形又は橢圓形にし



Puccinia Negrandiae, Syd. n. sp.
禾本科植物チグランデイ、マダガスカルレンシスに寄生する新銹菌

部は其反對の側なり

て長徑三分の一乃至三分二ミ、メにして表皮外に膨起し暗褐色を呈す散在して生ずるものなれども往々相隣接するもの同一にして不規則なる病斑を呈す、葉上一面に發生する時葉は乾枯す。
病原菌 各胞子は二胞なるを普通とすれども往々單胞なることあり、雙胞各胞子は其形多くは橢圓形横隔部にて僅かに縫れ頂端厚膜にして四乃至九ミユ一の厚さあり基部圓頭にして各胞一個宛の核を有す單胞各胞子は形圓に近く只一個の核を有す胞子は始め黄褐色を呈すれ其後褐色濃褐色となる大さ三〇乃至三九ミユ二乃至三〇ミユ一あり單胞のものにありては長徑二七ミユ一なることあり。

擔子梗は無色透明にして胞子附着點より漸次頂部に向て漸細す膜は厚くして往々内部充實して些の間隙を有せざることあり大さ八七乃至一三八ミユ六乃至八ミユ一あり各胞子にありては擔子梗の附着點は一般各胞子に於ける如く其最基部にして眞直に附着するを普通とすれ共又中間附近に附着して胞子は横臥狀をなすことあり又斜傾することあり斯く横隔部附近に附着するときは胞子の厚膜

杉樹の移植

ヒマラヤ山麓を飾れる松林の美はしきは日本に見馴れたる林の景色なれば殊更に感興を惹きたるなり、此木を印度に輸入せるは英國の植物學者フォートン氏なる由なるが、此人は長き間支那の植物採集を爲し多大の發見あり、氏は一千八百二十二年にスコットランドに生れエヂンブルグ植物園に仕へ後倫敦王立園藝協會の温室係となり四度までも支那に派遣せられ一千八百八十年死せり。一千八百四十八年支那茶を印度に輸入する目的にて支那の茶産地を旅行し一千八百五十一年三月二千の茶苗と一萬七千の茶種を携へて印度カルカッタに上陸し北印度に到り九月英國に歸航し、一千八百五十六年二月再び印度に渡航し北西地方の茶産地を視察し九月に去れり、氏の日本に來れるは一千八百六十年及其翌年の兩度にて長崎より江戸に到れりと云ふ、氏の杉に就て注意せるは一千八百四十三年上海に於けるものにして後支那内地旅行の際屢々之を目撃し翌年上海にて始めて種子を採集して英國に送れり、これぞ歐洲に於ける杉樹を見る嚆矢なる、されば氏が印度に此種子を送れるは同時なりしや又は氏の渡航の折に携へ行きたるものなりや知り難けれども兎に角此前後に相違なく今日ヒマラヤ山中に美はしき杉林を見るに至りしは全くフォートン氏の功績に歸すべく東洋の名木にてヒマラ

ヤ山中の景色を彩るは面白きことと云ふべし。

カルカッタ植物園

位置

カルカッタ王立植物園はフーグッ河の西岸に在りカルカッタ市の中央より約六哩の距離にて川に沿ひて一哩の地積を占め其面積二百七十二英町あり、本園は千七百八十六年の開設に係り、園内沼多く老樹密生し林間園長官舎膳葉室等宏壯なる建物ありて風景極めて宜しくカルカッタ港に入る大小の船舶盡く此岸に沿ひて上り水深七十餘尺と稱せらる、日曜土曜にはカルカッタより小蒸汽の往復あり、平日は其上流一哩ばかりの工科大学前に一日數回の小蒸汽船通へり、余は滯在中二度は馬車一度は自働車二度は船にて通へり、距離遠き爲め日々容易に往復しかぬるは不便なれど日曜日は市民遊樂の場所なり。

植物園の設計は全く英國式の公園風にて分科園なるものなく園内植物目錄に依り見んと思ふ植物を検索せざるべからず、目錄に載せられたる樹性植物は其數極めて多く目錄の番號は九千九百三十號に終れり。園内縦横に設けられたる道路には印度植物に關係ある學者の名を附せり、フツカー、ダイヤ、スコット等と云

巨樹の壯觀

ふが如し、而して其通路には各特異の並木を栽ゑたるが其主なるものはマホガニ
 樹、大王椰子、扇椰子、寶冠木、長葉木等なり。マホガニの如きは合圍の大木あり、並
 木の壯觀は大王椰子にして扇椰子も頗る美觀なり。寶冠木は折柄の花季とて蓮華

狀の紅花簇生したるもの其艶麗眼を
 驚かすものあり。

積代の名木



一 樹提菩ルガンベ 二 葉樹提菩

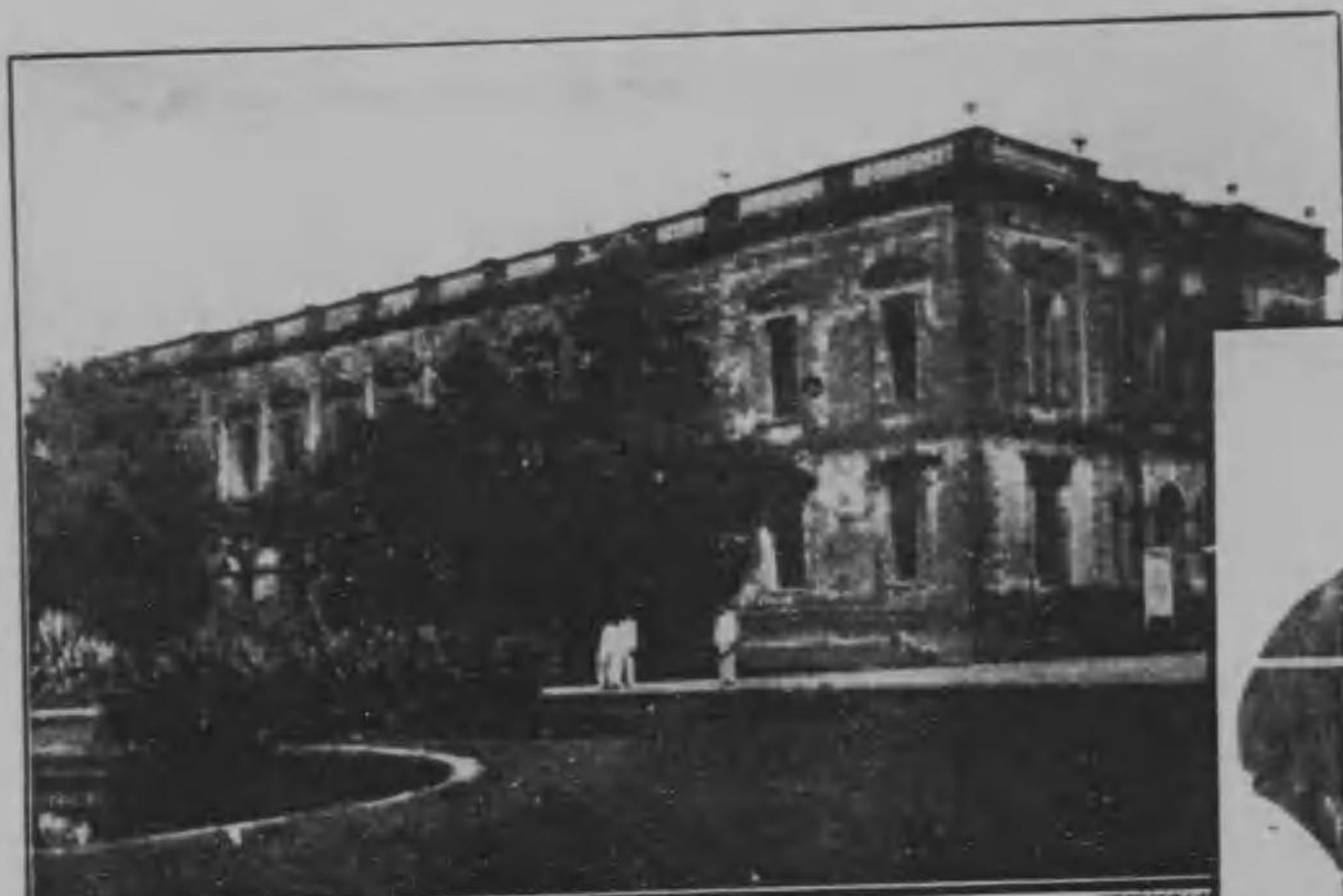
て學名は「ヒクス・ベンガレンシス」と稱するものなり、大小の幹には蔓草及び着生植
 物纏ひ付き此の一本の木の下に入れば宛然深山の林中に入りたるが如き觀あり。
 嫩き氣根の枝より垂れ下れるものは軟かにて損傷を受け易ければ竹筒に包みて

園内の植物中殊に世界の珍とすべ
 きもの數種あり、大榕樹は園内名物の
 一つにて年を経ること百四十三、年幹
 圍五十一呎、高さは八十五呎、樹冠九百
 九十七呎を被ひ氣根の數五百六十二
 本支柱を建てかけたが如く實に稀
 代の名木なり、此木印度特産の榕樹に

樹トシリク



桐梧葉變



孟買博物館



カルカッタ植物園大王椰子



カルカッタ動物園

保護せるが、かくせば氣根は安全に竹筒の内に伸長して地面に達するなり。

第二の名木は三好博士の所謂花頭木にして茜草科の喬木なり、葉の形煙草に似て今紅葉脱落の時季なり、馬拉加の産なるも今は世界一本と稱せらるゝものなり、余は園長ゲージ氏より此腊葉を貰ひたり。

第三はクリシナ樹にて十年前の發見に係り葉はベルガル榕樹に似たるも葉は囊狀となりて表面は囊狀葉の外側となり裏面は内面となり極めて奇形をなせり、此の木は高さ一丈に達せざる小木にて園長より生葉二枚を貰ひ受けたり。

第四は變葉梧桐にして梧桐の一種一本の葉盡く多趣多様に變化せる不思議の植物なり。

園内の日蔭室には羊齒、陰草、蘭科植物を栽ゑ、其外圍天井は盡く蔓草にて被ひたるものなり、外に大なる椰子室あり大小の椰子を雜植し此室内に入れば冷氣身を襲ひ外氣の溫熱を忘るゝ思ひあり。

園内は自働車及び馬車の通行を許し自由に乗車のまゝ觀覽し得べし、腊葉館は規模極めて廣大のものにして階上階下に腊葉棚を据ゑ、棚の間には高き卓子あり棚毎に組臺を添へ上部の腊葉を取り出すに便ならしむ、配列の順序はペンザム、フ

ツカー氏式にして各科の属は又自然分類によれるを以て検索の便利はアルハベツト順に及ばず、全體の腊葉は印度を主として亞細亞、歐羅巴、アメリカ之に次ぎ外に印度地方別に腊葉棚あり、特に一地方の植物を検索せんとするもの、研究に便利ならしむ、此腊葉室はツカー氏の大著印度植物志の資料にして特に印度植物志を隨所に置て腊葉の検索に便せり、所屬の助手は概ね印度人にして標品の檢定に従事するものあり、専ら寫生に取り係るものあり、其他標品整理の土人多く、館内極めて賑やかなり、階下に書庫あり、分類整然として標品と對照し得るに便なり、余が比較研究の爲め携へ來りし臺灣植物殊に高山植物はヒマラヤ山植物と比較して理解するものあり、又栽培植物中瓜哇、新嘉坡に於て檢定し得ざりしものにして此腊葉室にて解決したるものあり、印度渡航以來採集したる若干の植物は園長之を助手に命じて檢定せしめ、余の勞を省きて此時間を他の調査に利用せしめたり、園長は懇切丁寧能く余の望む所のものを與へられ、或種の報告を望めば直ちに書記を招きて之をせんさくせしめ、或は書庫中のものを割愛するあり、植物園の年報は重要な出版物にして大著述なり、余は臺灣植物調査の報文を贈りて印刷物交換の快諾を得たり。

此植物園は數日間往來したることゝ警衛の吏員も余を識り時に或は花を折り葉を摘むも誰何せざるに至り、出入必らず禮を行ふに至る、之に就て思ひ出せる一失策談あり、時は去年の十二月二十五日の事なるが親しき學友半澤學士を伴ひ、新嘉坡植物園に至り、園内を經ぐる折に友人は昆布羊齒の奇形なるを見て、其一葉を摘み取りけるに生憎にも巡査に見附かり、矢釜しく騒ぎ立て、其上官の取締に告げたりと見え、愈々事面倒と見たれば、懇意を受けたる園長に事情を話さんとせるも言語通せざる巡査を相手にて、それも思ふ通りならぬに、銀貨一つ取り出して握らせたるに、今度は打て變りし様子となり、我等を案内してこれも珍しからずや、あれも面白からずやと一々珍らしさうなる植物を指し示し、呉るるに至れることありき、これに懲りて其後は植物園のものはウツカッ手を出さぬことにしたり、但し手を出すは間違ひにて出さざるが當然の事なり。

印度博物館

カルカッタ博物館は其建築の壯大なること、其陳列品の豊富なること、東洋第一と稱すべく、間口三百尺に奥行二百七十尺の三階の石造建築にて、美術、技藝、人類

鑛物、動物を始め應用工藝品を含み殊に佛教關係の古彫刻古碑の如きは天下の珍たるもの多く佛骨の石棺及其内容の貴金寶石類の如きは目を驚かすものもあり、佛像多き中に女の陰部局所までも精巧に彫刻せるもの他の教派に屬する男女の佛體抱擁の像、男根崇拜關係のものなど随分と驚き入る陳列品もありて印度宗教の墮落とても云ふべきを窺ふべきもあり、又古代の美術を見るべき精巧のものも少からず、此室のみにても數日間見物する價はあるべし、鑛物室、動物室は見物人は素通りが多けれど其陳列方法と云ひ學界の好參考品たる品物多きは唯々美ましく、人類風俗の部にて印度領内の各種族の標本を等身大の人形となせる如きは手の掛りたるものにて、其他産業關係を模型にて示したるもうれしく有用天産物の一室は殊に有益なるものなり。

余は渡瀬博士の紹介ありたれば館長に會ひたしと思ひしも旅行不在中にて逢ひかねたり、産業調査部のフーハー氏に逢ひ又パーキル氏にも逢ひ懇切なる待遇をうけ其圖書室にて貴重なる材料を集めたる幾那問題に關する五箱の内閲を許され三日間ばかり通ひて之を見たり、ワット氏の大著述印度産業字彙の材料は皆此處に蒐集せられ近年は時々纏りたる農業上の問題を單行の小冊子として出版

し居り極めて有益なるものなり。

カルカッタ動物園

一千八百七十六年の創立にかゝり地積三十六英町あり、規模中々に壯大にして動物舍もみごととなるもの多く虎、獅子、豹、鱷、大蛇、猿、猴類、其他印度産の動物多く鳥類の鐵圍は中々に廣きもの多く大なるものも自在に飛び翔くる様に出來極樂鳥なども見もの、一つなり、大なる池あり、此の周圍の木には白鷺群をなして群れ來り動物の檻の内には野生の栗鼠など自在に入り込み遊び廻るなども面白し、印度各種族の思ひくゝの服裝したる男女の群り觀るなど是も動物園の一つの様に思はれ外國人の目には物珍らしく感ずる程なり。

カルカッタと日本人

カルカッタは北緯二十二度三十四分東經八十八度二十四分の處にあり、印度政廳の所在地にて近く都をデリーに遷さるべしとのとなるが人口百廿萬を超えたる大都會なれば十日内外の滞在にては町の方角が分る位の事にて余の如き特別

日本人團々歌

日の丸の旗

の用事を有せるものは市中の見物も充分ならず、一日知人に案内せられて名高きゼーン寺を見一日某夫人の案内にて東印度會社時代の根據地なりし、ウキリアム城の城廓を見たり、此昔の城は千七百五十六年の役に全然破壊せられ籠城者百四十六人、ブラック、ホールに幽閉慘殺せられたるより此城は敵を防ぐに足らざればとて二百萬磅十六ヶ年を費して千七百七十三年に落成せられたるものなりとぞ。滞在中入港したる日本郵船の廣島丸、吉林丸を訪ひたるが百十の船舶の碇卸せる間に唯一隻日の丸の國旗掲げたる船の勢よきが雜り居るなどは何とも云へぬ快感なり、いづれの國に行きても國旗はうれしきものなり、在住の日本人は三十餘名にて例の女連は外に五六十人あり、いづれの地にも此の種の連中勢力を有するは驚くべきことなり、日本人側の主なるは三井物産と正金銀行にて雜貨店には別所商店の支店一軒あるのみ、領事は親切にして能く世話の届き旅行者にも在住者にも評判能き平田氏歸朝を命ぜられ、柴田新領事倫敦より着任せり、送迎の會合盛なる折柄に來り合せたれば屢々日本人の會合に臨みて人々に會談する機會を得たり、此種の會にて酒一巡するや必ず合唱して歌ふは元氣よき日本人團々歌なるものにて此調子を聞く時は何共云へぬ勇ましき元氣のものなり記して印度に於

ける日本人の元氣を示すべし。

日本人團々歌(雪の進軍曲譜)

- 一、世界に轟く我が日の本に
男と生れて來た我々は
何でも大きい所が好きで
白雲萬里を船乗り出し
大きい天笠天下の寶庫
根城と定めた此カルカッタ
- 二、ヒマラヤの峯これ我抱負
ガンジスの流れこれ我度量
炎熱瘴癘事ともせず
磨き鍛へた三年五年
今じや靜かに雲行眺め
脾肉を嘆ずる健兒でござる
- 三、いてや平和の劍を抜いて

共に進まん此活舞臺

見渡す諸國のあの武者振りは

何れも劣らぬ好個の敵手

攻めて倒して倒して攻めて

大きい所を見せうじやないか

印度新聞の日本記事

チッタゴンと云ふ市の印度文の新聞に日本に關する記事あり其要點は

「日本の人は男女共に元氣あり國の爲めには一身を犠牲とすることは何とも思はず日本の皇帝は國民を愛すること我が子の如くなれば人民も皇室には極めて柔順にして皇帝の爲めには死を辭せざるなり印度にて昔は國王を神とせしが日本の皇帝も神と崇め居るなり日本の小學校にては生徒は祝節には皇帝の眞影を拜して皆崇敬の心を養へり小學校生徒の兩親は常に學校に來りて小供の缺點につき教師と相圖りて矯正する様に勉め家庭と學校との連絡を圓滿にせり印度にては小兒に嚴重なる懲罰を爲すことあるも日本にては母親が小

兒の惡事ある時は汝は日本人にあらざるやと云ひて叱れば小兒は自ら耻ぢて過失を正さんとするなり日本の普通教育は盛にして學齡兒童の男は九十七パーセント女は七十六パーセントは入學し小學は六年間にて卒り中學に進み高等中學大學に進むなり學校にては相撲柔道擊劍などにて體力と氣力を養ひ國の爲めに犠牲となる準備をなせり北國にては學校に雪合戦と云ふものあり生徒兩派に分れて相格闘して元氣を養へり學校の教師と生徒の關係は極めて親密にして殊に修學旅行の如きは教師は生徒と共に三等列車にて旅行を爲すこれは印度などにては見ることも出來ざる相違なり教師の性質は生徒の習慣を馴致するものにて其學業の嗜好なども常に教師に相談して決するものあり日本人は一體に小兒の時より自省の心を養ふ者にて印度ならば勝手に食物などに手を出すべきも日本にては母の許可を得ざれば手も出さぬ程なり此性質ある爲めに學校にては柔順にして上級生に對する禮儀を守れり又外國人に對し極めて親切を盡せり。

女子は學校に於て人體生理を習得するを以て一家の主婦となりては育兒に巧みなり常に小兒に教ふるに國のこと英勇豪傑例へば東郷ナポレオンの如き

話を聞かせ印度の如く化物盡しの話をなさず、日本の小兒はスバルタの國の如くに教養せられ極めて嚴格に教へ導かる、戦争に其子を送る時も母は涙を流さずして國の爲めに死すべきを諒すなり、力車を曳く賤しきものと雖も小兒の時は學校教育を受けよく世界のことを知れり、我が印度の如き大學を出てたる者も世界のことを知らざるものあるにあらずや、日本人にて印度を知らざるはなく、印度の如く弱き國ながら印度人は釋迦の生れたる處として日本人の爲めには尊敬せらるゝなり、世界に國旗を有する國多きも我等は國旗を有せず残念の事にあらずや。

日本の小兒は常に玩具として電車、船などの模型を弄び、各國旗を知り、知らずの間に世界の事情を知れり、かくて七才となれば小學校に入るなり、印度も日本と同じきことは學校に行き歸りには兩親に挨拶することなり、日本の小兒喧嘩を爲して若し負けたる時は母の前に耻ぢて之を祕し、又大人の喧嘩も濫りに警察などに訴へ出て、厄介になる如き事少し。』

随分と賞めたるものにあらずやと此寄稿者に談りしに余はかく見たるまゝに書きたるなりと云ふ、此寄稿者を誰れなりやと云ふに昨年東北農科大學を卒業し

て歸れる印度人の某氏なり、此人曰く日本にて母の事をオツカさんと云ふがこれはサンスクリットのオツカと同じく、日本のサムライは印度のサマール即ち戦争と同義、僧侶のポーサンはバホンと同意など説くも面白き説として聞けり。

カルカッタより孟買へ

二月八日 カルカッタは流石は印度の首府、學術の淵藪として我等の専門に關する研究の材料も頗る多く範圍を極限しながら一日居れば一日丈の調査事項を増し何時を限りともしがたければ名残は惜しけれど今日は愈々出發のことにとりきめ夜行九時半ハウラの停車場を發す、此季節に珍らしき由なる朝來の雨は尙晴れず、街路の泥濘田の中を行くが如き間を三井物産、正金銀行の人々態々と見送らる、印度旅行に缺くべからざるボーイも儉約して今度は乗換の世話もなければとて雇ひ入れず、さて人々と別れて闇の中行く客車の中にはカルカッタの若き英國の商人と乗り合せたるのみにていと氣樂なり、カルカッタの滞在は前後を合せ十日に餘り此間三井の阿部氏夫妻の一方ならぬ厚意を受けたりき、長き旅行中冷かなるホテル生活に飽きたる身の圖らずも今迄知らざりし人ながら家族的な

る待遇を受け冬の雪中より春風に逢ひたる心地して旅情も忘れて快き幾日を送りたるぞ幸なる。

二月九日 翌くる日の朝六時車室内の温度は六十三度なり、あたりは見渡す限りの平野にして麥の熟して黄色なるケシの花の純白なるグラム豆の青々たる、扇椰子のそこゝに立てる、アカシヤ、マンゴウなどの林茂れるなど行けどもく同じ景色なり。

パンキブルを過ぎて原野廣く小林茂れる中に牛羊の群枯草を需めてさまよふ様面白きけしきなり、サボテンの刺多き一種乾燥せる野に茂りアザミゲシの黄花河原にさけるなども目に附く植物景なり、かく變化なき印度平原をひた走りに走るほどに急ぐほどに九日の日も終日ゆられゆられて暮れ十日の午頃ボンベイにつきぬ、カルカッタを距ること千三百五十九哩なり、停車場には三井の辻、松坂氏出迎はれ直ちに其店に行き古郡支店長に導かれて其社宅にとまる。

孟 買

此處よりマドラスに陸行して錫蘭に渡る豫定なりしもかくては日數を要する

博物館

公園

パオバブ樹

無憂樹

事多ければ遂にコロンポに直航することとなし、滞在三日の間市中を駆け廻る、二度迄公園を訪ひ、動物園と博物館を見たり、博物館も動物園も共に公園の内にあり、アルバート博物館は規模大ならず陳列品少きも陳列の方法誠によく且多くの模倣あり、普通教育の目的より云へば最も成功したる陳列と云ふべし、動物園は動物の檻甚だ廣く殊に猛獸の如きは自在に馳駆し得べき面積の内に在り、熊の如き高き岩山の上に登り得る設備あり、ピクトリヤ公園は面積三十四英町あり、植物園を兼ねたる物にて學術上より云へば左程注意すべきものにあらず、最も珍らしく思へるは門内の兩側にある亞弗利加の名木パオバブ樹の大木にして其幹の下部著しく肥大せるが如きは頗る珍とすべし、園内アソカ樹即ち佛經の所謂無憂樹の紅花美はしく咲きたるを見一枝を得んことを事務室に申出てしに生憎日曜の事とて主事の不在なりしかば其許可を得る迄に稍々時を費して其枝を貰ひ受けぬ、植物園栽培植物の一枝たりとも大切にすること此の如きは寧ろ當然の事ながら、かゝる手數をしてまでも貰ひ受けたりき此の植物は花季早き爲めにカルカッタにては遂に之を得ざりしものなればなり、其花丹に似たる紅色にて手毬の如くに團り咲く、荳科植物なれど其花瓣四片にして雄蕊抽き出て長く其美しさは實にも三

千年の昔摩耶夫人が花園に出て、此の花の盛りに見とれて手さしのべて折り給ひけるも無理ならぬことゝて其折柄に釋尊降誕し給ひしと傳へらるゝにて此花は佛家に名高き物となりけるなり、アソカは梵語にて「ア」は無、「ソカ」は憂にて支那語に譯して無憂樹又は無憂花とはなしたるなり。

或る朝名高き波斯の拜火教徒の墓地寂滅塔ガウリニアフサイレンス見に行く、自働車にて朝の冷風に吹かれて駆け行く心地またなくすが、しく、やがてマラバールマラバールの其處に至ればこゝを守る男案内してくれたり、墓地とは云へど別に墓あるにてはなく高さ廿五呎厚さ五呎半周圍二百七十六呎の煉瓦の壁嚴重に圍める内に圓形に三段に區劃したる處の外側に男次に女、内側には小兒の屍體を並べ置けは印度語にてギダと稱ふる大鳥飛び來りて肉を啄み喰ひ瞬くまに骨のみとなる、此骨塔内の凹める處に落ち日熱に曝されて碎け、血又肉汁は流れて水渠を傳はりて廓外の溜りに出づ、茲には砂と木炭末ありて瀘され汚物は盡く淨められて清き水のみ流れ出づる装置にて屍體はかくして骨も肉も血も形を失ふにて此教徒は其教凡十萬ありてボンベイのみに四萬六千人ありと云ふ、人喰鳥の人肉を啄み去りて附近の家屋敷などに取り落すことあり、現に此の附近に水道の貯水池ありしをかゝる恐よりして

拜火教徒の
寂滅塔

人肉を啄む
ギダ鳥

紀元節

日本人俱樂部

水面を被ひて公園となせる程なり、寂滅塔の參觀は特許狀あるものに午前八時より九時までの一時間を限りて許すものなり、又市中に印度教の火葬場あり、市内に此珍らしき屍體の捨場あり、ボンベイと云ふ繁華の港にて見る不思議の一つと云ふべし、此日同乗して見物に行けるは桐谷洗鱗氏と三井横濱支店の豊田松舟なり、洗鱗氏は畫家にて佛畫研究の爲めに渡天せるにて余の紀念帖に人喰鳥を寫生し松舟は、人を食ふ鳥の寫生や椰子の下とぞ書き加へ案内者の拜火教徒は「ギダ」の印度文字を書き添へぬ、紀元節の朝領事の官宅に到り御眞影を拜し其夜日本人俱樂部の宴會に招かれ行く集る人三十餘名賑やかなる集會にて細君連も七八名あり日本料理にて鮪の刺身などあり酒は不思議に飲みえぬ人多し、俱樂部は海岸の冷しき處に建てられ五萬留比を費したる立派のものにて庭にはテニス、コートもあり、屋内は食堂、玉突室、ピアノ室などありて設備も整ひたるものなり、南洋印度に日本人の俱樂部あるは盤谷と此處のみなるが此地のものは結構と云ひ設備と云ひ遙かに優れり。

ボンベイ市

ボンベイ市はボンベイ州の西岸の小島に建てられたる市街にして此島は長さ十一哩半幅三乃至四哩面積二十二方哩にて其南端はコラバの嘴に終れり、北緯十

八度五十三分東徑七十二度五十二分に當り氣候平均七十九度二雨量七十吋なりと云ふ、人口百萬棉花の輸出最も多く一年の輸出高三百萬俵其他穀物、油用種子等其主なるものにて日本への輸出は棉花にて年額約一億萬留比に達せり。

瓜哇に遭ひ新嘉坡に會し甲谷他に逢ひたる長嶺技師とは又も此處にて相會する約束したりしが同氏は種牛買集めの爲め地方巡回中にてめぐり逢ひかねたるは不本意の事なれど余は前途を急ぐことゝして二月十四日出帆の便船に乗り錫蘭に向ふことゝなしぬ。

印度の牛畜と灌漑

牛畜

二度まで印度内地を旅行せる親友長嶺君は農業上の觀察も廣く余の如き飛脚的旅行者の觀る能はざるところを見聞せることなれば同君の専門なる牛畜に關することゝ灌漑の事に就ては同君の談話筆記を借りてこゝに掲ぐ。

「牛の効用としては、農業上或は運搬、又は乳用であります。其外印度に特別なる用途としては、陸軍で軍用として牛を盛んに使つて居ります。是れは印度政府で餘程大きな規模の牧場を設けまして殊に軍用牛を養成して居ります。丁度日本で申

すと軍馬の育成場のやうなものであります。そこで盛んに牛を拵へては軍用に適する様に訓練して軍隊に配附して居ります。此の牧場の大なるものは丁度北印度ブンチャブ州ヒサと云ふ所にありますが、今から約百年前に設立せられました。即ち千八百十三年と聞いて居りますが、其以來各方面に軍用牛を供給しまして其成績も頗る優等である。殊に足の早いのは殆んど馬に劣らぬ。大砲を曳かせまして一日に四十哩走つた例は珍らしくないと申して居る。ヒサの牧場は軍用の牛を作る計りでありませぬ。矢張り地方一帯の農業用の牛を改良する爲に種牛を作つて居ります。更に牛の用途につきまして、印度に於て特別に外に例を見ませぬのは牛が或る燃料の供給者と云ふやうな事になつて居ります。是れは一寸御聞きなれば奇態なやうな御感じがあると思ひますが、それはどふ云ふ事かと申しますれば牛糞を燃料として使つて居りますのです。是れは印度は非常に樹木の少ない所でありまして所にもよりますが先づ平地の大部分は悉く薪炭の不足な所でありまして、そこで牛糞を燃料として居ります。それで牛糞は非常に貴重なるものとして集めて居りますので、殆んど一塊の牛糞でも無駄に棄てぬ有様であります。そこで地方を旅行すると各所に牛市なるものがあります。さう云ふ所に行きますと何千

と云ふ牛が集つて居るのでありますが、老若の婦人が各々頭の上に笊を載せまして澤山にやつて来て居ります、何をするかと見て居りますと牛糞を集めて持つて行く、それを競争して集めて居りますが、甚しきは尾籠な話で御座いますが、牛が脱糞をしやうとすると其中途に之を收容せんと互に競争して居る有様であります、或る地方では牛糞は唯一の燃料と云ふ有様であります、それで印度に於きましては牛は印度人生活の如何なる點から申しましても、實に貴重な位置を占めて居りますので、印度では往々牛を神聖所謂神のやうに思つて居りますが、元を質せば前申述べた様な生活上最も必要な關係から起つて居ないかと想像されるのであります、それから尙印度の牛に付きまして變つた習慣のことを申しますれば、印度は到る所に神聖牛、セークレッドブルと云ふものがあります、是れは田舎を旅行致しまして往々見受くるのであります、これは或る御祝ひ事とか或は願掛でもするとか云ふ様な時に必ず宮に牛を捧げるのであります、其牛は極く小さい時に捧げますのであります、其牛は極く小さい時に捧げる中で優等なものを捧げます、それで一旦御宮に捧げますと、其處に飼つて置く譯ではない、其處らに牛を放つて置きます、其邊を何處となく徘徊して自分の好いた

ものを食べる、或は人の家に這入り物を食べる、是れは神聖牛であると云ふので手を付けませぬ、牛の仕放題に委せて置く、神聖牛は一方から申しますれば非常に感心な働きを爲す、即ち種牛の働きを爲して居る、之が良い牛を捧げますので、先づ優等な牛として蕃殖して大變な働きを爲して居る有様であります、然るに牛を神聖視して居りますのはヒンヅー教徒のみで他の種族では牛を神聖視して居りませぬので、偶々回教徒の家に牛が這入りますと直ぐ捉まへて殘酷な目に遭はす、甚しきに至ては打殺すと云ふやうな事になつて段々と神聖牛なる畜殖用の牛が減つて居る、それに代る種牛が出来なければならぬので印度政府に於きまして、是れは神聖牛の缺乏から起つた譯ではありますまいが蕃殖用の種牛を作る牧場を擴張致しまして、さうして良い牛を農村に配附すると云ふやうなことが行はれて居ります、それから印度に於きまして牛の養老院と云ふものがあります、是れはど

ういふものかと申しますれば、印度では牛を殺すと云ふことは殆んど宗教上の關係から、どんな年を老つても、どんなに怪我をしましても或は不具な牛が生れてもそれを殺すと云ふことは絶対になさせぬ、夫等のものは悉く或る一定の場所に收容して、相當の手當をして自然に斃れるを待つと云ふやうに、所謂牛の養老院で

灌溉

ありまして、之れは一般公衆の寄附金から成立つて居りますので、即ち到る處に設けられてあります。此金額は大きなものであります、それで孟買邊でも少し街の外れに参りますと牛の養老院がありますので、大抵二千頭三千頭位の牛が養はれて居ります。田舎の極少さい部落に行きましても五百頭或は千頭位の牛を收容して養つて居ると云ふ有様で、斯ふ云ふ事は外に例を見ませぬ所の一種の風習であります。此養老院なるものは牛の改良から申しますと弊害がありますので唯無益の費用が掛るのみならず自然劣等の子孫が繁殖するので寧ろこれは蕃殖上から見ると一向効能が無い弊害の多いものであります。併し印度の習慣としては決して牛を殺さぬと云ふ所からこれも致方ない次第であります。

次に印度の灌溉に就て極大要を申しませう。熱帶國が灌溉の必要なことは申す迄もありません。殊に印度の如きは雨の分布が非常に不平均であります。所に依つてはどうしても灌溉しなければ農作物が何も出来ない所があります。又或る地方に於きましては雨の量が非常に多く、殆んど一年七十、八十、九十、或は八、九十、寸の雨量があります。少しも灌溉の必要もない所もある。それから或る地方に於きましては中間に位して居りまして、灌溉せぬても出来ませんが、灌溉すれば一層收穫

が多くなる地方もありますので大別しますと、絶對的に灌溉の必要が無い所とそれから灌溉しなければ何も出来ませぬ所と、灌溉に依つて一層の收穫を増すと云ふところとある。灌溉しなければ何も出来ませぬ所と申しますと、北部印度のパンジャブ州及シンドが重なる地方で殊にシンド州は今度買ひ入れた牛の産地であります。此地方は雨量が一年に五、六、七、八、九、十、寸位のものです。灌溉せんければ殆ど何も出来ない有様であります。今度印度に参りましたので、シンド州の灌溉事業を見て参りました。が彼處は御承知の通り、インダス河が流れて居ります。インダス河の水を引いて居ります。灌溉溝は大分ありますが、其中で永久的の灌溉溝と一時的の灌溉溝と二つあります。即ち同じインダス河から引いて居りますが、一は水が漲つて居る時丈け水が来る、水の減水しました時には水を取らぬものと、一は永久灌溉するので何時でも水が来る所の二種類の灌溉溝がございます。が私の見ましたのは永久的灌溉溝で、シヤムラオ灌溉溝と申しまして印度の灌溉溝中ても頗る大きなものであります。丁度幹線が百三十哩あります。インダス河の水を引きました所が……それに副線が百八十哩程あります。して幹線の幅は丁度四十呎位あります。副線は大抵十五呎位になつて居ります。それが百八十哩

それから幹線が百三十哩、それで其副線から更に小さな支線を引いて居りますが、其支線は耕作者各自にする事になつて居ります、無論此事業は政府の事業でありまして、さうして畑に引くやうな小さな支線は耕作者各自やるが地方でやることになつて居ります、此の灌漑溝の面積はどの位かと申しますと、八十萬、エークル位あるさうです、然るに實際耕作して居る面積は未だ其の三分の一弱即ち大抵二十萬、エークルから廿五萬、エークル位しかないと申して居ります、何ぜさう云ふ風に夫れ程の面積の水が備つて居るのに灌漑面積が少ないかと申しますれば、シンド地方では灌漑溝が出来ます時迄殆んど沙漠のやうな所でありまして、人口の極めて粗薄な所であり、在來の人間では其何分の一も耕作が出来ない、其灌漑溝を引きましてから他の方面の移住を奨励して居りますが、今尙三分の一以下しか耕作して居らぬと云ふ有様であります、其地方の耕作物は綿と麥てありますが、其耕作の仕方であり、申しますのは、今一箇所の或る場所を耕作しますと三年に一遍しか作らぬ、一遍作りましたならば、跡は二年或は三年四年遊ばして置いて外の土地を作る、三年か四年経つた處で復たその所に歸つて作ると云ふので、畢竟人間が少ないのでさう云ふ方法でやつてるのであります、もう一つは印度では肥料

を餘り用ひませぬので、それで一遍作れば土地が瘦せる爲めに休まして置かなければならぬと農民が申して居ります、印度政府が灌漑溝を引きまして夫れが爲めに徵集する租税の取りかたが多いやうに思はれます、夫れで「エークル」に對する租税は作物の種類に依つて違つて居りますが、其地方の作物は重に綿と麥て綿は三、ルーパー、麥は二、ルーパーから一、ルーパー半が普通となつて居る而して作りました年丈け税金を課します、作らぬ年は税金を取らぬことになつて居ります、それですから百姓の方では作らぬ、放任して置けば租税が掛らぬものですから猶更放任して居りますから制限を設けてあります、即ち五年以上作らぬと其地所を沒收することになつて居ります、少くとも五年に一回作らなければならぬと云ふことになつて居ります、それで灌漑溝を開きまして土地杯を極く安くして拂下げて他の方面から移住を奨励して居りますが、前申します様に僅か三分の一にも足らぬと云ふ有様で三分の二以上は遊んで居る有様であります、灌漑溝につきましては前申せし如くに河から引きました溝であります、印度には、タンク、イリゲーシヨンがなか／＼多い、水を湛へて置いて夫を掛けます、是れは随分古くから行はれて中には千年以前に出來たものがあります、印度の灌漑事業は、英領になる前餘程

昔から行はれて居つたので、英領になりまして更に印度政府が大規模のものに致しました。併し起ころは非常に古いやうに聞いて居ります。此外到る所に「イリゲーション」の行はれて居るは井の「イリゲーション」であります。井を掘つて水を掛ける、是れは殆んど到る所に行はれて居ります。此面積はなか／＼廣くありまして、印度の一年間のイリゲーションの總面積は約四千四百萬、エークルあるそうです。四千四百萬、エークルある中で井の灌漑に依つて灌漑されて居る面積は約千三百萬「エークル」に達して居ると云ふことと殆んど三分の一の面積は井の「イリゲーション」に依て耕作されて居る有様であります。其遣り方は頗る簡單であります。或る者は唯掘り放して、井を掘りまして其直徑は一問或は一問半深さは六七間、さうして苦力賃は安いですが一箇の井を掘るのは十「ルピー」日本の六圓五六十錢であります。が、一年使へば更に新しく掘らなければならぬ有様で、少しく念を入れて作つたものは「バーマチントウエル」と申しますと、煉瓦或はコンクリートでありまして、一箇の井に對して四五百「ルピー」でありまして、或は千「ルピー」即六百五六十圓掛つて居るのがあります。どの位の面積に一箇の井で灌漑するかと申しますれば、極く小さいのが一「エークル」日本の四段歩餘、大きいので二十「エークル」是れ以上超

えるものは殆んどありません。大抵普通は五、六「エークル」から七、八「エークル」が普通であります。是れは悉く個人のものであります。水を汲むのはどうするかと云ふと、御承知の如く牛を使つて居ります。釣瓶で引き揚げる、是れは全部牛でやつて居ります。大抵の所は二頭、多くて八頭使つて居ります。釣瓶は多く牛の皮、綱も牛の皮で作つて居ります。水を引き揚げますには二頭の牛で釣瓶を揚げて一人の者が牛を操縦して行きます。此所に水を受ける所がありまして、畑の方に引いて居ります。是れは頗る簡単な物であります。私の見ましたのは八頭迄を見ましたが、八頭の牛で引き揚げるのに、一遍引き揚げると百二十「ガロン」の水を揚げます。一分半位で一回汲み上げる即一時間で四千八百「ガロン」位の水が揚ります。是れは八頭ですから餘程多い方ですが、而かもそれを御する者は大抵一人多くて二人位でやつて居ります。ので、牛を用ひた井の灌漑は印度に於きましては到る處に盛んに行はれて居ります。昨年以來丁度孟買の北の方は非常な旱魃でございまして、汽車の上から見ましても沙漠の状態で、畑のやうな所はありませぬ。中に點々青々として目の覺めるやうな作物があります。夫れは麥や牧草の類を耕作して居ります。所て取りも直さず井の灌漑の行はれて居る所てあります。」

印度の植物

印度の植物は故ジ・セフ・フリーカー卿が廿六年間力を盡して完成せる大著印度植物志の七卷に網羅せられ此書たる植物志中の大著述と稱せらる、同書に載するところの顕花植物は一萬五千九百種なるも最初の巻には緬甸及馬來地方の種類を逸し去り其後の研究に依りて更に多數の種類を増加し顕花植物の總數一萬七千種に達し百七十四科を含み羊齒類は約六百種なるべしと稱せらる、而して顕花植物中最も多數の種類を含むものは蘭科の一千六百種にして新種の發見は年々増加す、印度特産の分科は一もあるなく皆近隣の諸國と通有のものなり、而して種類數の多少に依りて主要なる科名を擧ぐれば左の如し。

- 一、蘭科
- 二、荳科
- 三、禾本科
- 四、茜草科
- 五、大戟科
- 六、水蓼衣科
- 七、菊科
- 八、莎草科
- 九、唇形科
- 十、蕁麻科

單子葉と双子葉との種類の比は一に對する二、三にして屬の比は一に對する七の割合なり、椰子類は二三十種、竹類百二十種、松柏類は唯廿五種、蘇鉄類五種あり、百種以上の種類を有する屬は十あり、石斛屬の二百種を首位とし、風露草屬之に次ぐ。

ヒマラヤ山脈殊に東部ヒマラヤの亞熱帶及温帶の植物は頗る我日本に類する屬種ありと稱せらる、余が數日間ダージリン方面にて採集したる植物五十餘種あり、中に全く我國産と同一のものあり、又類似せるもの尠からず、憾むらくは余の旅行當時は冬季に際し草本の多數枯死せるもの多く従て採集すべき種類少數なりしを。

フリーカー卿は印度植物系を九區に別けたり、乃ち左の如し。

- 一、東ヒマラヤ地方
- 二、西ヒマラヤ地方
- 三、インダス平原
- 四、ガンジス平原
- 五、マラバール地方
- 六、デツカン地方
- 七、セイロン島
- 八、緬甸地方
- 九、馬來半島

フリーカー卿

フリーカー卿は去年の暮に英國に於て死去せられたるが九十五の高齡なりき、余が一昨年臺灣植物目錄を印刷するや其一冊を贈呈したるに直筆の謝狀と共に印度植物要覽一冊を贈られたり、書狀中臺灣にはツリブネサウ屬の一新種あるは興味あることなりなど書かれたりき、余が印度旅行には卿の惠贈せられたる其著書

を携へ利益を受くること多く、カルカッタ植物園にては其採集標品を見、ヒマラヤ山中に入りては其著ヒマラヤ記行にて讀みたることを思ひ出でたりしが、旅中フイカー卿の計を聴き深き感慨に打たるゝものあり。

佛教關係の印度植物

我國にて普通其名を能く知らるゝ印度植物中其實物の如何なるものなりやを知らぬ人多し、今日まで佛教關係の植物に就き考證せられたるものもあるべけれども余の寡聞なる既に此種の研究の發表せられたるを知らざるものあるべし。余が佛教關係の印度植物に就て注意したる動機は先年印度渡航の際圖らず同船したる佛蹟參拜の爲め渡天せる日置黙仙師より佛教に關する話談を聴き其携帶の佛書などを讀みたるが印度にては有名なる佛蹟地佛陀迦耶及び前正覺山を觀多大の興味を以て其地の植物界を觀察したり。

余が印度旅行の紀念に佛教關係の植物殊に最も普通に佛經に現れたる植物に關して日置師に聴き先づ調査すべき種類を定めカルカッタに到り此等植物のサンスクリット名を調べて其學名を定め植物園に到りて其實物を視たり、園長ゲ

佛教關係の印度植物 (余が印度にて模寫又は寫生したるものに據り狩野永讓氏縮寫し速水不染氏更に轉寫せられたるものなり)



葉幼一ノ二 華曇優二 子種二ノ一 果莢上同一ノ一 樹蔓無一
種一上同二ノ二



花上同二ノ五 一ノ五 樹羅婆五 樹提善四 草祥吉三
實果上同三ノ五

ジ氏に此等植物を視んことを求めたるに氏は怪み問ひて曰く君の見んと欲する植物は印度にては普通のもの多し何故に此種類の調査を望むやと余は答ふるに

「此等の植物は佛教の經典に誌され日本人間には普通に知らるゝ植物なるを以て佛教國の植物學者として印度渡航の記念に此植物を調査するなり」と此に於て園長は自ら自動車を御して園内を駆廻り一々案内して指示し唯一種實物なきものは腊葉室の標品を割愛し園丁をして各種の標品を採收せしめて贈與せられたりき而して其圖書館に於て調査したるものと博物館内の佛教關係の古代彫刻に表れたる植物意匠を見て本編の材料を得たり。

余の記載する佛教關係植物は其數少く

釋迦の誕生に縁故ある無憂樹

成覺の靈場に関係ある菩提樹及び吉祥草

涅槃に関係ある娑羅双樹

等にして優曇華及び栴檀を附記せんとす。

一 無憂樹

梵語に阿輸迦とも云ふ事は佛書などにもあり阿輸迦はサンスクリットの *Asoka* より來れるは疑ひなく梵語の *a* は「無」*soka* は「憂」の義にて「アソカ」を漢譯して「無憂

傳へて曰ふ「釋迦の母麻耶夫人藍毗尼園に出て、憩ふ、折柄無憂樹の花の眞盛りにて其美はしさ云はん方なきに夫人右手を伸べて其の枝を取らんとせるに釋迦は左脇より誕生し給ふ」と、此由緒あるが爲めに佛教徒は此花を神聖のものとして尊むものなり、又或説には釋迦の生れたるは娑羅樹の下なりと云へるが、此樹は同じく荳科の喬木にて同じ時季に深赤色の美しき花の咲くものなり、學名は *Butea frondosa* と云ふものにて花の美しき點と印度に普通なる點より云へば此説あるも無理ならぬことなりと思はる。

無憂樹は印度にては右の理由より神聖のものとせらるゝが又愛の徵印として愛の神「カマ」に捧ぐるなり。

無憂樹は中部及東部即ヒマラヤ、ベンゴール、南印度、アラカン地方に産する荳科の喬木にて其分布錫蘭及馬來に及び、其花艶麗なるより廣く栽培せられ、殊に佛寺に多く暹羅にては道路の並木に栽ゑらるゝ處あり。

印度語にて *Asok, asoka*、ベンゴール語にて *Asok, asoka*、其他印度諸州概ね *Asok, asoka, ashok ashoka, usoge* 又 *ashopalava, kankeli, alsunkar, thavgabdo* 等の名あり、サンスクリット

語にては *Asoka, kankeli, vanjula* 等の稱呼あり。

學名は *Saraca indica, L.* なるも一名 *Jonesia Asoka, Roxb.* の名あり、此葉は複葉にして藤に似て花は夥多相集り、毎花四瓣、緋色又橙黄色にして花莖長く外に出て花期は三月より五月にして極めて艶麗なり。

印度にては此外に今一種「アソカ」と稱せらるゝ樹木ありて之も神聖なるものとして栽ゑらるゝが、こは蕃荔枝科の植物にて學名を *Guatelia longifolia* と云ひ前の無憂樹の雄木であると信ぜらる、此樹は緬甸に於ても神聖なるものとして栽植せらる。

無憂樹は薬用にも供せらるゝものにて樹皮は尿病殊に月經過多に効ありと云ひ其處方は樹皮の煎汁を牛乳に混じて用ふ。

夫人見無憂樹華果茂盛即舉右手欲牽摘之(本行經)

至臘伐尼林有釋種浴池澄清皎鏡雜華彌漫其北二十四五步有無憂樹今已枯悴菩薩誕靈之處(西域記)

二 菩提樹

菩提樹は印度佛教徒の最も尊崇するところにして殊に佛陀迦耶の此木は最も神聖なるものとせらる。梵語に之を阿師多羅阿輪陀樹、畢鉢羅樹と云ひ譯して菩提樹、覺樹、恩惟樹となせり。

此畢鉢羅樹は今日印度に於て廣く用ひらるゝ名にして Pipal, pippal, pipur, pimpal, piplo, pimpala, pipul 等の名あり、外に Ashathwa, aswat, asud, asvatha, losaz, lesak, jari, bobur, ali, bhor, arasa, aswartham, rai, raiga, ragi, ravi, kullaravi, rangi, bosri, arali, arle, haspath, asvala, nyangbandi, nyongbawde, bo 等の方言あり、サンスクリット語は Asvatham, asvatha なり。

學名は *Ficus religiosa*, L. にして *Ficus affnor*, Griff. の異名あり、中央印度 ベンゴール の山地森林中に産し印度到る處に栽植せられ又緬甸にも多し、桑科(蕁麻科)の喬木なり、日本には外に菩提樹と稱するものあり能く人に知らるゝも印度の菩提樹とは別種の植物にして菩提樹科の學名 *Tilia Miqueliana* と云ひ其葉の形稍相似たるを以て混同するに至りしものなるべし。

印度の菩提樹は婆羅門教徒も神聖のものとして之を貴び諸種の儀式には此葉を裝飾に用ふ、此木は能く寺院に植ゑられ又大に路傍の並木として栽植せらる。

菩提樹中最も名高きは佛陀迦耶の聖木にして錫蘭の舊都 アマリラダブラ の最も著名のものなり、前者は其の樹下にて釋迦が大悟成覺せる聖跡、後者は阿育王の子 マヘンド 及び其娘が枝を携へ行きて移したるものと傳へらる。

佛陀迦耶の菩提樹は佛滅後幾度か伐り倒され植換へられたるものにして、傳ふるところに依れば佛滅二百餘年の後阿育王即位の始め邪道を信し佛蹟を毀ち此聖樹を寸斷して之を焚きたるが其株より新芽を生ぜり、然るに王妃は再び之を伐り倒したるが其芽は三たび成長したりと云ふ、而して其後五世紀の末に設賞迦王之を伐り其根株を滅絶せんが爲めに根を掘り取りて之を焼きたりしに後數ヶ月 マガタ王 ホラダマ 之を慨き數千の牛を集めて其乳を注ぎ其蘇生を禱りたるに幸にも新芽を生じたれば伐採の害を防ぐために高さ二丈四尺の石垣を以て取り圍めりと云ふ、玄奘三藏の實見したりと云へる聖樹は則ち此木にして其當時は高さ四五丈に達したるものなりと云ふ。

一千二百二年回教徒の王 バクテイヤルキリヂ の暴亂に遭ひ其後の事は世に知られざりしが、一千八百三十三年頃緬甸王使が此菩提樹の枝葉を採取し歸りて復命し、一千八百八十年大塔發掘の際に一時聖樹を他に移したるが緬甸暹羅の佛教

徒參拜者が金箔を塗り香油を注ぎたるために枯死し、大塔修繕後一千八百八十五年カンニングハム氏其の位置を鑑定して植附けたるもの即ち現時の聖樹なり、此の如く幾多の變遷をなしたるものなるが釋迦成覺に關係ある聖樹の系統は此聖樹に残るものと信ぜらる、此聖木の葉の形は他のものと稍異なるもの、如く余も記念の爲め漸く此葉の數片を採集したり。

菩提樹は幹を伐れば白汁を生ず、是れ印度護謨樹と同質の護謨分を含むものにして烏鶉の原料に供せらる、樹皮は單寧質を含むを以て染料に用ひ又藥用にも供せらる、淋病に藥効あり根皮は消化劑なり、此葉及び小枝は象、水牛、羊の飼料となり葉及び果實は飢饉の際窮民の食料となる。

去伽耶城不遠詣阿輪陀樹乃至把天草清淨柔輦名曰吉祥乃至鋪地面座(法范珠林金剛座上菩提樹者即畢鉢羅之樹也(西域記))

三 吉祥草

吉祥に關する佛家の解釋に曰く祥とは天の禍福を降さんとして先づ其物を示して告悟するなり、吉は善なりと又曰く吉祥は草の名なり此草を清舎に敷けば不

淨を去る、佛煩惱の不淨を去らんが爲めに之を用ふと釋迦が菩提樹の下に座を執る時に敷物となしたる草の名なり、西域記に

菩薩既濯尼連河將趣菩提樹竊自思念何以爲座尋自發明當須淨草天帝釋化其身爲刈草人荷而逐路菩薩謂曰所荷之草頗惡耶化人聞命恭以草奉菩薩受已執而前進

との記事あり、特に此草を敷草に選みしは深き意味あるものにあらずして其邊に在る恰好の草なりしを以て採りたるものなるべし、余が迦耶に於て此草に當るべきものを探りしも容易に發見しがたかりき、梵語のクサは此吉祥草のことにして禾本科の雜草學名を *Tragrostis cynosuroides*, R. S. 一名 *Poa cynosuroides*, Retz. と云ひ印度名 *Dab, durva, Davoli* ヲンゴール語にては *Kusha* サンスクリットは *Kusha, kutla, durbla* と名づく。

波斯にては風車用の索に纖維を用ひ花に苦味あり利尿劑に供する處あり、水牛は此草を喰ふも他の牛は之を喰はず、阿富汗にては飼料用とし又印度にては葬式用を使用する處あり。

時帝釋天變刈草人在菩薩右掬草而立翠色青紺如孔雀尾菩薩問名答曰吉祥聞作

此念求利自他吉祥立前定證菩提念已乞草吉祥自言願先授吾菩提之起然後受草菩提記已取其淨草遍敷樹下金剛座向更座草(无量壽經鈔註)

四 娑羅樹

佛書に曰く娑羅は堅固と譯す冬夏に盛衰なし故に名く、釋迦佛此樹林にて入滅し給ふ娑羅双樹の双は其林樹の狀相なりとあり、娑羅双樹の花の色祇園精舎の鐘の聲と云ふ文句は誰一人知らぬ者もなき位に、廣く知らるゝものにて沙羅と云ふ樹は如何なる花の木かと疑ひ思ふ人多きことなり。

娑羅は梵語の *Sala* の音譯なるが印度にては今日も廣くサラの名にて通ぜり、*Sal, sala, s'hal, sal* サンスクリットにては *Sala* の外に *Asvakarna* の名あり。

學名は *Shorea rostrata, Gaertn.* と稱し龍腦香科の喬木にしてヒマラヤ山麓、中央印度の東ベンゴール西部の山中に産す、此木の材はチルク材に次ぐ良材にして鐵道の枕木に用ひらる、其樹脂は藥用に供せられ、其實は食用とする處あり、此林中にて釋迦は涅槃に入りしたため有名となりしものにて西域記にも此木のとを、其樹類擗而皮青白葉甚光と記せり、此木は印度到る處にあるものにあらず殊に平地に稀なり、

或人の印度記行に娑羅は椽果の事に誤りたるものあり、釋宗演師の佛蹟參拜記に伽耶附近の景を記し、道傍波羅樹參差として綠陰放牧に適すとあるが恐らく之も椽果を誤り認めたるものならむ、迦耶の平地には此樹を見ず。

歐羅巴人の書きし書に釋迦は娑羅樹の下に生れたりと記述したるものあり、津田敬武氏の「佛像の研究」にも此事ありしを以て念の爲めに出所を問合せたるに同氏の返信に「佛誕生に關係ある樹木として娑羅樹を掲げたるは娑羅樹の誤なれば訂正を要し娑羅樹は無憂樹の一名なれば自著にある娑羅樹と誤記したる記事は無憂樹に關する傳説にして、娑羅樹は佛滅に關係あるものにして翻譯名義集などを見ても明らかなり」との意味なり。

爾時世尊娑羅樹下寢臥寶牀於其中夜入第四釋寂然無聲(涅槃經)

西岸不遠至娑羅林其樹類擗而皮青白葉長光潤樹特高如來寂滅之所也(西域記)

五 栴檀

「栴檀は二葉より香ばし」と云へる諺は誰一人として知らぬ者なきが此センダンと云ふ木は香木なるを知るも日本の暖地にあるセンダンは香木にあらず諺も事

實にあらざるが如く思ふ人あり、然るに日本のセンダンMelia japonicaと稱するものにて栴檀は香の原料として名高き白檀の事なり、即ち檀香料植物にして學名を *Santalum album*, L. と云ひ印度の原産植物に梵語 *Chandana* を漢譯したるものにて印度にては廣く *Chandal*, *sandal*, *chandam* の名を有し *マイソール* *コインパトル* *サレム* の乾燥地に野生し二千尺乃至三千尺の高地に多く又隨處に栽培せらる。此木材は香料に供し又器具を作るが主として佛像を彫み又其種子油は燈火用に供し又木材の油は藥用とし歐羅巴の藥局にても廣く藥用に供せられ主に淋疾性に効ありと云ふ。

栴檀根芽漸々生長終欲成樹香氣昌盛觀佛三昧經
身塗諸香所謂栴檀鬱金也(西域記)

六 優曇華

優曇華はウドングUdambaraなり、梵語の *Udambara* より轉じ來れる名なり、優曇華又靈瑞華此華芽出而一千年荅而一千年開而一千年合三千年一度開華也」と云ひ「優曇華於世間中無會見者依中國此樹縱條出葉其大如拳其爲香美而無華故過去未來無見者」と

説き「世間有優曇樹但有實無有華也」と記し、又閩浮堤内有尊樹王名優曇鉢有實無華優鉢樹金華世乃有佛」とあり、此華生ずれば輪王出づ蓮華に似たり、花は梨に似て果の大き拳の如く其味甘し、華無くして子を結ぶ又華あるも値ひ難し、三千年にして一たび現すと佛教辭典などに記するものあり、優曇華の花咲くと云へば千載の一遇を意味するものにて日本ではウスバカゲロウの卵をウドングの花と信じ又地方に依りては珍らしく咲く花をウドングと稱せり、北國にて水芋の花をウドングと呼び芭蕉の花をウドングと云ひ、又無花果の事を云ふ處あり、要するに世に稀なる譬にする花なり。

優曇華は梵語より來りしものとすれば梵語の所謂 *Udambara* なるものを調査せざるべからず、此名の植物は印度植物に關する書籍を見るに *Ficus glomerata*, *Ixob. Gular*, *parva*, *lelka*, *umar*, *unraii*, *dimeri*, 等の名あり、又地方に依りて *Umbar*, *umbara* などの名もあり、ヒマラヤ山麓より中部及南部印度に亘り東は緬甸に至るまで分布するものにして其樹液は護謨を生じ樹皮は染料、其葉、樹皮及果は藥用となり、其實は食用ともなり、果は家畜の飼料、葉は象の好み食ふところにして印度人の間には此樹

のある附近には地下に潜める水流ありと信ぜられ又一の聖木として認めらる。佛教に關係ある優曇華なるものは果して前述の植物なりや否やは聊か疑問にして印度のカルカッタ博物館の佛教室に *Udumbara* (*Ficus glomerata*) the Bodhi-tree of *Buddha Kanakeemuni* と附記したる古代の彫刻あり其繪を見るに *Ficus* と云ふよりも寧ろ波羅蜜に似たり西域記に印度の物産を叙述したる内に烏曇跋羅果と云ふものあるが或は波羅蜜にあらずや優曇華は婆羅蜜なりと云ふ説は伊藤篤太郎博士も同説にして嘗て時事新報明治四十年十二月四日に文學と植物と云ふ題の下に佛經に現はれたる植物の一章中に此事を記されたることあり但同博士の記載中の寫眞は波羅蜜にあらずして麵麩果なり此二者の區別は波羅蜜の果實は幹及び大枝より垂れ下るが麵麩果は多く枝梢に生ずるものにて前者は英語の *Jack fruit* (*Artocarpus integrifolia*, L.) 後者は *Bread fruit* (*Artocarpus incisa*, L.) なり植物名實圖考に廣州府志又載波羅蜜樹無花結實果成或生一花甚難得即優曇鉢花也と之を案するに無花果屬も波羅蜜屬も其花隱微にして外觀に著しき花狀をなさざる爲めに普通花なきものと思ひ花なくして實を結ぶものと考へしなり故に三千年待てばとて幾萬年待てばとて花らしき花を見ること能はざるものなるも植物學上より云へ

ば完全なる花を明らかに認め得るものにして余等は優曇華の花咲く時に遭遇したるものと云ふべし臺灣に於て或人は臺灣府志の記事を執て「渣オモト」の一種紫花の種類を佛教の所謂優曇華なりと信ずるありと雖、そは府志の曇華にて佛教の優曇華とは別種にて赤嵌筆記には波羅蜜一名優曇華とあり優曇華に就て思ひ出てたることは北條九代記に優曇華の一章あることなり鎌倉にて芭蕉の花咲きしを優曇華なりとて騒ぎし面白き記事なり。

法華經云是人甚希有遇於優曇華疏云優曇華木名瑞應三千年一現則金輪天出(邪代醉)

波羅蜜一名優鉢曇廣東志南海廟中舊有東西二株高三四大葉如蘋菱而光潤肅梁時西域達奚司空所植他所有皆從此分種生五六年至徑尺削去其梢以銀鍼釘腰即結實成實乃花然常不作花故佛氏以優鉢曇花爲難得(臺灣使槎錄)

印度の酒代

ホテルで腹立つのは印度である、之も印度固有の習慣でなくて西人の悪い癖を付けたのである、印度のホテルに泊りていざ出立と謂ふ時になると十人餘りの黒奴の小僧がズラリと出口に立ち並び舉手の最敬禮を行ふ、皆之れ酒手の五錢十錢に有り付きたい爲めなのである、其理由を尋ねると甲は御部屋に湯を持って参り候、乙は水を以て参り候、丙は履を磨き候、丁は便所の御掃除を致し候、戊はコーヒを持って参り候、己は繪葉書を持って参り候、庚は喫煙室の番人にて御座候、辛は食堂ボーイに候、壬はボーイ頭に御座候、癸は門番にて御座候とぬかす、されば印度を旅行する時には白銅を澤山に隠しに入れ置くを要する、イヤハヤ厄介至極の事どもである、(志賀博士二度目の獨逸)

第十三章 錫蘭日記

大 麻 竹



カカオ樹

茶園



第十三章 錫蘭日記

孟買よりコロomboへ

インデヤ號

二月十四日 午後四時ホンベイ船渠に横附けせるビー、オー會社の「インデヤ」號に乗る。檢疫了りて我室と定められたる三百二十一號室に入る。狭けれど一人の室なり。八千噸の客船にて倫敦、上海間の郵船なり。三井の店員、郵船支店長、領事館の人々見送らる。二等には大阪の商人二人乗り合せ印度視察を終りての歸途にて思はざる談敵手を得たり。

パシーの女

波止場の混雑は甚しきものにて殊に印度各種族の眞黒なる顔色したる半裸體の苦力、白色の服装涼しげなるに白布の鉢巻したる、其他様々の服装に彩りしたる帽子を冠れるなど千態万狀の風俗皆此處に集まれり。このなかに特に目立ちて見ゆるはパシーの男女なり。男は歐羅巴風の服装にて女は華美艶麗なる輕き絹物の袈裟の如きを纏ひ金銀珠玉の耳飾腕輪を飾り衣服の色彩の派出やかなる目さひるばかりにて男女とも皮膚の色稍日本人に類し鼻は著しく高く誠に美人美男

の標本とも見るべし。

アラビヤ海

夕方満潮時を待て錨を揚げ陸地近く南に走る。

二月十五日 印度大陸を左舷に見て進むアラビヤ海上波静かなり正午北緯十五度三十四分東徑七十四度二十七分ボンベイより二百十七哩の處を航走す。

海上の飛蝶

二月十六日 終日陸地を見ず海上極めて穏やかなり。

二月十七日 朝八時半海上黒き鳳蝶多く南より飛び來りて北に去るを見たり十時コロombo港に入り檢疫終りて午頃上陸プリストルホテルに投ず客多く日本人三人漸く一室を得たり寶石商來り迫りてうるさし午後日本人唯一の内松商店を訪ふ雜貨を鬻ぎ兼て寶石を商ふ。

古倫母博物館

二月十八日 内松氏の案内にて市中見物公園に博物館を見る博物館は一千七百七十七年の創設に係り錫蘭に關する陳列品を集む階下は歴史及び工藝に關するものにして佛教關係の石像多し階段の壁にシグリ族の古書を掲げ階上は礦物動物を陳列せり寶石の豊富なる陳列品は最も入目を惹くべく動物中介類及骨節珊瑚石の如き又注意すべし館の内に圖書館附屬せり館の構内は廣き芝生にて玄関前には一千八百七十二年より五年間の總督にして本館の創立者たるケイ、グレ

多種の寶石

ゴリーの銅像あり。

カンデイ鐵道

二月十九日 午後二時十五分發の急行列車にてペラデニヤ植物園に向ふ汽車の窓に庇ありて日熱を防ぐ室内六人を容るべし椰子林の中を馳せ水濁れるケラニヤ河を渡り更に椰子の林を突き進む此邊見渡す限り椰子林にて處々に稻田あり水牛其間に徘徊す人家の附近に芭蕉檬果多く波羅蜜樹の種類多く金香木亦多し水邊龍舌草に似たるバンダ屬の植物澤潟に似たる水草等多し二十哩許りにして始めて小山ありホルラガウラ驛の東は山漸く高く山中の景色次第に美はしく線路は谷に沿ひ崖を傳はり墜道一つ又二つ奇巖屹立せる異形の山前面に現れ來り臺灣の恒春の風景に似たり稻田は階段を爲して脚下にあり綠蒼々たる椰子の大林は其裾に擴がれりアンガラ驛を経てアンガラ山三千四百尺の中腹の斷崖を通り午後五時ペラデニヤ驛に著き更にマハウエリカンガ河の鐵橋を過ぎて新停車場に到る此處は海拔一千五百尺なり停車場は纏ふに馬兜鈴科の蔓草を以てしさも涼しげなるに庭園百花咲き匂ふは流石は植物園所在地の停車場なりと思

ペラデニヤ

はしめたり。

植物園迄は五町許りもあるべく道路兩側の並木にはアメリカ合歡木の太木あり新緑今や萌えて美はしくバラ護謨の林あり下にはカカオ樹と茶樹を植う植物園を左に見て右に芝生の小山ありこの周りは競馬場なり近くの山々峰々緑色にて夕日を浴びたる山の姿は更に鮮やかにて路傍に見上ぐるばかりの斑芝の老木には紅花燃ゆるが如きがあり植物園の正門を距ること遠からずして小旅館あり兼て電報し置きたることゝて用意整へる一室に導かる此旅館は公設の所謂レストハウスにて客室僅に四外に食堂あるのみベランダには羊齒秋海棠の鉢を並べ軒に蘭の鉢を釣りて涼しげなり夜の食堂は田舎なれば泊り合せたる客は白服略装隨意にて余の外二人の客あり一は獨逸の植物學者一は此地の昆蟲學者なり備附の旅客名簿を繰り見るに一千九百十年二月四日ビー、ハヤタの署名あり早田博士の筆蹟なり萬里の異郷親しき學友の署名を見てなつかしさに堪えず直ちに紀念の繪葉書を同博士に書き送る旅はかゝることに心慰むるものぞかし。

曾遊の早田博士

植物園

有用植物園

護謨樹

二月二十日 朝植物園に到り園長ウキリス氏を訪ふ三好博士の紹介を有するを以てなり同氏去日退任して本國に歸り今副園長ロツク氏園長代理たり乃ち面會す事務に關する書類整理の後に會談すべければ暫く待たれよとの事故博物館を見て經めぐる内に園長出て來り自ら園内を案内して川を越え試験場に到り主任ホルムス氏に紹介して辭し去り余は更にホルムス氏の案内にて有用植物園を見る特に乞ふて護謨區に到るバラ護謨は一英町の栽培あり千九百五年の植附にして幹圍凡そ二尺七寸採液試験に二法あり一は縦線を劃し一は魚骨式なりマニホット護謨はダイゴトマ種千九百八年の栽培に係り幹圍一尺四寸セアラ種は千九百四年の栽培に係り幹圍一尺八寸カスチロア種は千九百三年の植附にて幹圍二尺七寸あり成育状態甚だ佳良なり。

樟樹の病害

樟樹は八十尺に十尺の距離に植附られ一千九百五年の十一月に植ゑたるものにして相當の成育状態なり病菌に侵されたる一本あり其葉を採集して病理室に到り菌類學者のベッチ氏に示せるに樟樹に此菌を見たるは始めてとの事にて共に檢鏡せるにベスタロチアの一種なりきベッチ氏は其の著バラ護謨の生理及病理に依りて知りたる人にて今介殼蟲に寄生する菌類の研究中なり余は瓜哇にて

有用植物

古々椰子の用途

採集せる樟樹介殼菌を贈り更に臺灣の同菌を贈るを約し病菌の檢鏡を共にして益する所多し、午後再び博物館に到り見る、カーダモンの原料「エレッタリア、カーダモム」印度にて料理用に供する香料樹葉は「シンナモムン、ゼイラニカム」なること扇椰子の用途極めて廣く籠、經典、纖維、玩具、澱粉、扇、繩等に作らるゝ最も有用の種類なることを知り、波羅蜜の種子は之を乾して食用とすべきものにて「カリオタ、ウレンス」孔雀椰子は澱粉及び砂糖を製すべく、キャツサバは之を輪切にして干し又粉末は煎餅に焼くべく、「アンチアリキス、イノキシア」の内皮は纖維を取り直ちに衣とすべく、古々椰子は用途極めて廣く本館陳列品中にも

箒、簾、籠、日用器具、柄杓、靴刷毛、杖、玩具、纖維、藥品（クレオソート）、コブラ、油、油粕等各種あり、葉、葉脈、果の纖維、子殻、子實等を原料とせるものなり、階上は植物腊葉室にて錫蘭植物及一般の植物を藏ひ。

二月二十一日 終日植物園に在り實地に就き各種の植物を見る。

カンデイの植物採集

二月二十二日 夜は涼しくして毛布を要する程なるが夜の明けて日の出づる

空は紅く霞めるカシアの花

毒蛇コブラ

までは風も涼しけれども一たび朝日の元り地上を射るや日熱急に刺すが如し、今日カンデイまで採集を試みんと思ひ立ち先づ植物園長に土人の採收者一人貸し給はずやと乞ひしに快く承諾して一人の錫蘭人を送り來れり、四十餘りの丈夫さうなる男にてサロンを着け髪には曲れる櫛を挿せり、二十五年も勤續せる採集家にて植物の學名を諳んぜり、日傘をさしかけて暑さを凌ぐ、十時の日盛りとて光力中々に強し、村落續きの好き道にて並木茂り多くはアメリカ合歡樹にて新緑萌え出て其莢果地に落ち散れり、行く／＼採集しながら進む、斑芝樹紅花燃ゆるが如く木綿樹は其花淡黄色なり、カカオを栽培せる處多し、村の窪みに人多く立ちて罵り騒ぐあり何事ぞと問へばコブラの出で來れるを追ひけるなりとぞ、かく迄に人山をなすほど毒蛇の行衛を失へるを氣遣へるなり、行くこと四哩にして停車場ある所に出でたり、カンデイなり、滿樹紅花霞みて日本の櫻を見る如き木あり、カシア、グランダスにて其花桃紅色にして極めて美觀なり。

市内を通りてタリハ椰子の葉にて作れる行李、籠など賣る店に入り其果柄の汁にて作れる砂糖の見本を購ひ時分時なればと案内者の誘ふまゝになにがしホテルと云へるに中食す、錫蘭式にて食卓は只カレー、ライスのみにして飯米は粘氣な

辛味強き錫蘭料理

きポロ／＼したるに牛肉、羊肉、野菜に五種ばかりの香料辛味を入れたるをかけ喰ふにて其辛さ舌も爛るるばかりなり、食物の中に混じたる樹葉を摘み取り之は何ぞと聞けば芸香科の大葉月橘の葉なりと云ふ、この葉は錫蘭にては最も普通に調理に供せらるるものなり、食後レディホルトニスReddy Holt Nissの山に登る、熱帯の森林陰暗き新道を登るに陰草、羊齒類、花ある木、實を結べる蔓など採收してやがて頂上に到る、蔓生の錦葵、タベルモンタナ、漆樹科のセミカルブス属の大木あり、省藤トクの種類多し、降りて佛齒を收めたる名高き寺院に到る、佛齒は開帳の時刻ありて見ざるも或る専門家の鑑定によれば性質人類のものにあらずと云へり、乞食の錢を乞ふ者うるさく付き纏ふ、人力車にて歸途につき、マハウエリ、カンガ川に沿ひて下る、奇岩に碎くる水流の奔沸誠に爽快にして彼方は岸を被ふ斧斤入らざる處、女林にして此方は岩石裸にして大戟科のサポテンダイゲキ茂れり、かくて水流廣く稍々緩やかなる所に出たり、この水中の岩石に珍奇なるポドステモン科の植物夥しく繁茂せり、此植物は海藻に似たる顯花植物にしてデクリヤ及ポドステモンの二屬あり、デクリヤに二種あり、其一種の如きは海藻のテングサに似たるを以て此草の花を供へざるものを見る時は藻類と誤るほどなり、案内者は靴を脱して水中に入り

名高き佛寺

海藻に似たる顯花植物

多數の採收を爲しくれたり、夕方ペラデニヤに歸る。

二月二十三日 午前植物園に到り有用植物の参考とすべきもの數十種の標品採集の特許を得て園丁をして採集せしめ、壓搾整理し午後植物博物館に入りカンデイ採集品を檢定して半日を費す、園藝主任マクミラン氏を訪ふ不在の爲めに逢はず、此人昨年「熱帯園藝」の著あり、此夜昨日連れ行きし採集者來り切りに生活難を説く、此人年齢四十五、二十五年間勤続し俸給は四十五圓を受くるも子女七人あり其教育の爲め學校に納むるもの約十留比生活極めて難しと云ひ余を雇ひくれずやなど云ふ、余我國の生活難は此地に勝れり且我に助手あり遠く君を招くの要なしと告ぐるや彼尙生活難を談りて已まず。

世界の樂園ペラデニヤ

ペラデニヤ植物園は熱帯植物園としては美はしき植物園にしてカルカッタ植物園に比し面積少きも美觀ありて能く整理せるとは新嘉坡の其れと相似たり、此地コロンボを距ること約七十哩にしてカンデイの町より四哩なり、ペラデニヤは番石榴生ずる平野の義にして番石榴は元來野生種にあざれば果實に適する意

植物園の位置

熱帯園藝

園物植ヤニデラベ

子椰葉李行



Talipot Palms.



口入園物植



圖面平



木臺内園

旅館

面積

氣候

植物の美動
物の奇

義に外ならざるべし、此地は元カンガイ王家の所領にして植物園は停車場及び郵便局より護謨、カカオ、茶園の間を通りて約十分間の歩行程に過ぎず、正門前に小旅館あり政府の設立する所謂レスト、ハウスにして主に植物園に所要ある旅客の爲めに設くるものなり、カンデイには數軒の設備完全き旅館あり馬車にて往復し得べし、コロンボより郵便列車に乗れば四時間にて達し得べく年々外國漫遊客の來り訪ふもの凡そ三千人なりと云ふ。

植物園は海拔約千六百尺あり其面積百五十英町あり、之に接して有用植物園の圃場同じく百五十英町ありマハエリ、カンガ河のU字形を爲せる間の丘陵起伏せる處にあり、氣候頗る溫和にして一年の平均七十六度高温九十五度を出てず、雨は時々降下し年中の降雨日數百七十日にして雨量は八十九吋なり、二月及四月は最も乾燥期にして四五月は暑氣最も強く植物は全く熱帶的性質を帯び纏繞性の物多く椰子、竹、林投、着生植物、蘭、羊齒及喬木多く喬木の根元は皺裂状を有するもの多し、葉は一般に大にして厚く且つ革狀なるもの多く花は概ね鮮美にして大なるのみならず其果實又巨大なるものあり大枝幹上に生ずるもの多し、之に加ふるに鳥、昆蟲、爬蟲類の怪異なる生活状態をなすものあり、彼の恐るべき毒蛇のコブラ及無

毒の綠蛇等の樹間に棲むもの少からず。

歴史

ペラデニヤ植物園の設立は今より九十年前にして一千八百廿一年に開設せらる。蓋し錫蘭征服後廿五年後の事なり、和蘭はコロンボ附近又はスラブ島に開園を企て、英國にては千七百九十九年にバクヤゴダに一千八百十年にスラブ島に一千八百十三年にハカラタウに開きペラデニヤは前記の年に設立せられたり、當時の園長はアレキサンダー・ムーン氏にして氏は錫蘭植物の研究に従事し一千八百廿四年に錫蘭植物目録を出版したるが其書中一千百廿七種の學名及土名を記せり。一千八百二十五年ムーン氏の死後數名の交代あり一千八百四十四年ガイデナ川氏園長の職に就きけるが此人は最も熱心なりし人にて園務大に擧り五年間奉職しヌワラ、エリヤにて死し、ドクトルシワイツ氏之に繼ぎ三十年間其職を奉じ一千八百八十年退隠して後二年にしてカンデイにて死しドクトル、トライメン氏之に繼ぎ園務益々擴張し應用植物博物館を設け分園を設立し一方には錫蘭植物志の著述に従事し事業半ばにして一千八百九十六年死後フツカー氏其業を補けて其著述大成せり、ドクトル、ウキリス氏其後任となり大に改良を圖り部門を分ちて各専門學者をして其研究に當らしめたり即ち園長の下に副園長、昆蟲學者細菌學

贈葉數

者化學者、植物園主事、分園主事、試驗園主任、綿作主任等を定めたり、本年ウキリス氏職を退きて現にロツク氏園務を代掌せり、事業の一として植物園年報の出版あり、外に農業彙報を發刊して、當業者の參考に供せり。

博物館所藏の錫蘭植物腊葉數左の如し

シワイツ氏	採品	一八四九年—一八八〇年	六、四九二
トライメン氏	採品	一八八〇年—一八九六年	二、八九〇
ウキリス氏	採品	一八九六年—一九一一年	一、六〇三
計			一〇、八九五

外に參考の外國植物五千種あり。

圖書館の書籍數は六千卷、パンフレット六千冊あり、植物園本園及三分園の豫算は總計二十三萬六千六百九十九留比七十八仙にして、其中ペラデニヤ園に屬する經費左の如し。

經費(園長、副園長、書記、俸給及旅費)	三七、二七七、六七
科	四六、六三八、六〇
植	三四、六〇〇、八四
試	四五、七七五、三七
園	
園	
中植物園本園に屬する傭人料は二萬五百三十三留比なり	

珍花名木

其樹冠は百三十尺の空を覆ひ其根元の高く地上に皺襞狀をなして大蛇の如くに蟠れる印度護謨樹は確かに園内の珍たるなり、温室植物として廣く歐米の人々に愛玩せらるゝ此植物もかゝる奇形の大木を見ては唯驚嘆するのみ、印度アツサムの原産所謂ランボン護謨樹これなり。

蘭園は世界最大の蘭と呼べるゝ一種あり、學名グラマトフィラム、スベシオサム花穂の長さ六七尺。

林投の一種高さ五六十尺其幹高く聳えて人頭大の巨大なる果を垂る、是れ即ちバンドナス、レラム。

大砲彈の木其名の奇なる如く其果實圓くして堅く舊砲彈に似たり、七八十尺の巨木の幹は紅色を帯べる美花簇り生ぜり真に一奇木なり、學名コロロヒタ、グイアチンシス。

大蘆竹の高さ百尺に達する巨大なる桿莖幾十相集れる真に壯觀なり、緬甸の原産學名デンドロカラムス、ジガンテウス。

大實椰子學名ロドイセア、セラルム是れセシュレン島の原産にて瓜哇のポイトシブルグにある一本は雌木此處にある一本は雄木なり、此椰子は一年只一葉を生

じ其果實の成熟には六年を要するものなり、先年此地の花粉を瓜哇に送りて成功せざりし話は瓜哇日記中に書きたる如し。

蠟燭樹其長く蠟燭状を爲したる果實幹より垂下せる奇木あり學名バトメンテイラ、セレイヘラ。

羊齒園の藪の巨木の幹に纏ひ昇れる天南星科の毒草に啞蔓あり學名デフエンバシア誤りて此汁を舌に附くれば音聲を發すること能はず苦悶數日に亘るべし。園内の大圓路に沿へる芝生の庭に沿うて此地訪問の帝王の手植に係る名木多し。

王者の手植
紀念木

COUROUPITA
GUIANENSIS
(Cannon-Ball Tree)
Planted By
T. R. H. Prince & Princess
of Wales
14th April 1901

好紀念の植樹にて此紀念植樹なるものは最も樹種を選ばざるべからざるもの

年 代	樹 木 名
フルシア、ヘンリー王妃	ボインシアナ、レギア(鳳凰木)
一千八百九十九年	
エドワード七世	ヒクス、レリジオサ(菩提樹)
一千八百七十五年	
露 國 皇 帝	メスア、ヘリア
一千八百九十一年	
希 臘 王	プロウニア、グランデセフス
一千八百九十一年	
アルシア、ヘンリー王	アムヘルレチア、ノピリス(環珞樹)
一千八百九十八年	
澳 太 利 帝	サラカ、インヂカ(無憂樹)
一千八百九十三年	
英 國 現 帝	コウロウヒタ、ゲイアネンシス(砲彈木)
一千九百一年	

と思ふ此紀念木の標札は皆同型にて其一つを参考の爲めに掲ぐ。

コロンボに歸る

二月二十四日 午前七時發の列車にてベラデニヤ驛を發し十一時コロンボに着く、途中のけしきは前日見たる所なれども山より平地に下る間の變化面白く椰子の森蔭に蟻塚の高く土を盛り上げたる、肉桂樹の栽培地、茶畑に栽ゑられたるバラ護謨樹其護謨樹の紅葉、落葉、新緑など樹毎に様々なる、並樹の降雨木即ちアメリカ合歡樹の合歡に似たる紅き花ある、田舎道を駆けゆく二輪車曳きたる牛の足並早きなど特に目につきたることなり。

プリストル、ホテルに歸れば瓜哇にて相逢ひたる東京潮谷商會の荒井氏同じ宿に在り、空室なしとして日本の紳士四人寢臺を並べて一つ部屋なれば學校生活の寄宿舎を見る如く、宿賃の幾割引かせずばなど罵るもあり、市中を散歩するに土産賣る店の者往來の人引き留めて寶石買はずや、繪葉書見ずやなどうるさく勸む、中には日本語にて客を招くもあり、餘りに御世辭能く遂ひ釣り込まれて或店に入りしに日本人の證明書一と握り持ち出して示すに曰く長谷場純孝なにがしの宮御附

寄宿舎生活
に似たり

曰く海軍將校曰くそれがし、店には東郷大將の額を掲げて日本人を得意客となすものゝ如し。

午後再び博物館を觀館長を訪ひしも不在にて逢はず、寶石の陳列貝類の陳列法の人目を引く様に並べたるを見館内をひとめぐりす。

古倫母の市街の並木の主なるものは

鳳凰木、アメリカ合歡、碁盤の足、欖仁樹、菩提樹

にして庭園の樹木の殊に目に立つものは甘藍木なり。

此夜内松商店に招かれて晚餐の饗を享く日本料理にて饅頭を添ふ、此店に土人の金工あり指輪を作る、型を大烏賊の甲に押し込みて鑄形を作り之に金汁を流し込むものにて頗る簡單なるものなり、烏賊の甲の利用法としてはイカにも面白きものと思ひ一つの標本を作らしむ。

此の日ホテルの庭前にて毒蛇コブラの藝を見る、蛇遣ひの男蛇籠の蓋を去り笛を吹き出せば籠の内なる蛇は鎌首立て、這ひ出て、あたりを見廻はすに男は其頭を撫づれば篋形に膨れて奇聲を發してのたくり廻る、名物の一つなれど心持よきみものにはあらず。

並木

烏賊の甲

毒蛇の藝

錫蘭の數字觀

面積 二萬五千方哩(千六百二十萬英吋)

人口 一千九百一年の國勢調査にては三百五十六萬五千九百五十四人、一千九百十一年には四百十萬六千三百五十人に達し此内七千五百九十二人は歐洲人にして一方哩百六十二人の割合なり。

行政區域 九州に分れ總督之を統べ九十のシビル、サーバント之を分治す。

人種 千九百一年の國勢調査によれば

シンハル	一、四五八、三二〇	カンヂイ	八七二、四八七
タミル	九五一、七四〇	モルメン	二二八、〇三四
ユーラシアン	二三、四八二	馬來	一一、九〇二
歐羅巴	六、三〇〇	ベダ	三、九七一
其他	九、七一八		

宗教 (千九百一年)

佛	二、一四一、四〇四	印度	八二六、八二六
回	二四六、一一八	耶蘇	三四九、二三九

河 最長河マハエリガンガ二百六哩

マルワツ、オヤ百四哩

山 最高山ピヅルタラガラ八千二百九十六呎、キリガルボツタ七千八百三十二呎
 都市 コロンボ十八萬人、カンデイ二萬九千人、ホイント、デ、ガレ四萬人、トワソコマ
 レ、一萬二千五百人、ヌワラ、エレヤ五千五百人、ジャフナ四萬八千人
 貿易 輸出入計 一八、七二〇、〇〇〇磅
 鐵道 五百七十六哩
 運河 百五十五哩
 教育 小學校生徒三十萬三千人
 交通 電信電話線四千三百哩、郵便局四百二十
 衛生 病院七十三
 動物 象、黑熊、水牛、鹿、鱈
 家畜 牛畜約百萬、馬四千、羊類及豚三十七萬五千
 工場 紡績千百、製油二千六百、製糖四
 耕地面積 三、九〇〇、〇〇〇英町
 内

輸出の主なるもの 一千九百九年

椰子	九〇〇、〇〇〇	果樹	二五〇、〇〇〇
稻	六二〇、〇〇〇	穀物	一一〇、〇〇〇
茶	三九八、〇〇〇	穀類	一八八、〇〇〇
肉桂、カダモム及香料	六四、〇〇〇	カ	三三、〇〇〇
樟	一、二〇〇	幾那	一〇〇
珈琲	二、〇〇〇	蔬	一一〇、〇〇〇
煙草	二五、〇〇〇	樹脂及薪炭用樹	一〇、〇〇〇
纖維植物	一、〇〇〇	香水	四〇、〇〇〇
牧草	一五、〇〇〇	草	

一千九百十一年の輸出價格

茶	八、四一〇萬留比	護	二、四五〇萬留比
椰子油	一、三七〇	コ	一、〇五〇
黒鉛	七四〇	檳榔子	二八〇
珈琲	一九二、八八六、五四五封度	ゴ	一、五二五、五五二封度
カカオ	九五〇w、t	幾那皮	一五六、〇八一封度
肉桂	八一、一二二w、t	カダモム	八二一、一八四封度
椰子(年平均産額)	六、四九九、一三六封度	椰子油	五九九、七九五〇w、t

子(年平均産額)一、〇〇〇——一、二〇〇〇(百万)約二百万は島内の消費

椰子、ア	二七〇	椰子 緞維	一八〇
椰子 果	一四〇	椰子 細	一二〇
カーダモム	七〇	煙草	八〇

同年又日本よりの輸入額は百九十萬五千五百七十五留比にして前年に比し二十一萬留比の増加にて錫蘭茶は六萬五千封度を輸出せり。

錫蘭の茶業

錫蘭の茶樹栽培は比較的 new しきものなるに係らず其進歩の迅速なるは驚くべきものあり其最初の栽培試験は千八百三十九年ベラデニヤ植物園に於て行はれたるも其製造費廉ならざる爲めに個人の經營としては珈琲の有利なるに及ばず又當時幾那皮も錫蘭に於ける有利なる事業なりしが一千八百六十年頃珈琲病の爲めに珈琲栽培地は全く荒廢に歸したる結果として珈琲園は茶園と變ずるに至れるなり茶樹の栽培は地下淺く横に根を張る珈琲よりも容易なるのみならず茶樹の根は深く地中に入り珈琲に利用せられざりし深土を利用し得るを以て茶の栽培を容易ならしむる一因となり又茶は珈琲よりも高地に栽培し得るが故に珈琲よりも其栽培範圍廣く漸次に原生林を拓きて新に茶園を作りしかば高地

世界の製茶

に於ける幾那樹事業は漸く衰退の已むなきものあるに至りぬ横斷鐵道の敷設と共に生産的條件を便宜低廉ならしめ従て茶業の進歩を助けかくして僅々數十年の間に錫蘭茶の生産は世界第一位を占むるに至れり其發達の迅速なるは次に示す數字に依りて之を推知するを得べし。

	産 額(封度)	價 格(留比)
一	八七三	二二三
一	八八三	五八
一	八九三	九一六、一七二
一	九〇三	四〇、七二三、三二九
一	九〇九	五八、一九八、六二二
一	九〇九	八一、〇一二、三七七

一千九百九年に於ける世界の茶の産額

	耕作面積(英町)	生産額(封度)	輸出額(封度)
支 那	三、〇〇〇、〇〇〇	六五〇、〇〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇、〇〇〇
日 本 及 臺 灣	二五〇、〇〇〇	六二、〇〇〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇、〇〇〇
印 度 及 緬 甸	五五六、〇〇〇	二六二、〇〇〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇、〇〇〇
錫 蘭	三九八、〇〇〇	一九四、〇〇〇、〇〇〇	一九二、〇〇〇、〇〇〇
瓜 哇	一一〇、〇〇〇	三八、〇〇〇、〇〇〇	三六、〇〇〇、〇〇〇
ナ タ ー ル	六、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	一三六、〇〇〇

ファイジー及ジャマイカ	五〇〇	
海峽殖民地、露西亞、 合衆國、中央アフリカ	二、五〇〇	
佛領殖民地安南	一、〇〇〇	
計	四、三二四、〇〇〇	
		六〇〇、〇〇〇
		七〇、〇〇〇
		二〇〇、〇〇〇
		一、二〇八、八七〇、〇〇〇
		四七四
		七一九、三二六、〇〇〇
		一五〇、〇〇〇
		四〇、〇〇〇

澳洲	三、五〇〇、〇〇〇	西及中央亞細亞	一〇、〇〇〇、〇〇〇
英領北アメリカ	四〇、〇〇〇、〇〇〇	西藏東亞(支那露以外)	二八、〇〇〇、〇〇〇
西印度グイアナ	二、五〇〇、〇〇〇	錫蘭	二、五〇〇、〇〇〇
英領西、南アフリカ	七、五〇〇、〇〇〇	支那	四、五〇〇、〇〇〇
蘭領東アフリカ	三、〇〇〇、〇〇〇	歐羅巴	四四、〇〇〇、〇〇〇
北アフリカ	一、八〇〇、〇〇〇	海峽殖民地諸島	二、〇〇〇、〇〇〇
印度	一〇、〇〇〇、〇〇〇	合衆國	二八三、〇〇〇、〇〇〇
日本	二八、〇〇〇、〇〇〇	チャン子ル島	一、五〇〇、〇〇〇
瓜哇	三、〇〇〇、〇〇〇	合衆國(太平洋岸を含む)	九〇、〇〇〇、〇〇〇
露西亞	一八四、〇〇〇、〇〇〇	計	一、二三一、八〇〇、〇〇〇
南アメリカ	六、〇〇〇、〇〇〇		

錫蘭の茶栽培面積及産額	一八六七	一八七七	一八〇七	一九〇七	一九〇八
面積	一〇〇	二、七二〇	二、一〇五	三九〇、〇〇〇	三九二、〇〇〇
産額	一〇〇	二、七二〇	二、一〇五	三九〇、〇〇〇	三九二、〇〇〇
				一七九、八四三、四六二	一七九、三九八、三一二
				一九〇九	一九一〇
				三九五、〇〇〇	三九八、〇〇〇
				一九二、八八六、五四五	

一英町の産額

一英町の産額は土地及年數に依りて同一ならず二三の實例を示す、
 一、四百五十八英町の茶園にて九年間の平均一英町の産額八百二十二封度にして
 最多は一千九百封度最少六百四十三封度
 二、十八年の平均産額七百九十六封度
 三、百一英町の二十六年間の平均産額千六十八封度
 瓜哇マラバール山の最肥沃なる茶園にては一英町の平均千八十二封度を産す
 る處あるも多くは平均一千封度を普通とし時としては一千九百封度の處あり。

小學校の學校園

學校園の事は我國にても随分と熱心に研究せられつゝ、ある問題なれば錫蘭に於ける學校園の事を記するは普通教育に従事せらるゝ諸君の爲めには或は参考となる點もあることと思ひ簡単に記述を試みん。

錫蘭に於ける學校園の經營は一千九百一年に施行し始めしものにて最初は多少の故障を免れざりしなり、其故障とは父兄が子弟に労働を爲さしむるを嫌ふことにて又教師の無能も實際的效果を收め難き一因なりしなり、一千九百一年の終りに學校園數は僅かに五に過ぎざりしもの今は二百四十六に増加したり。

學校園設置の目的は

- 一、學校の四圍を愉快にし兒童をして楽しき集會所たらしめ又人目に觸れては面白からぬ建物を被ひ匿すこと
- 二、學科程を輕むる爲め休養的戶外労働を爲さしむること
- 三、自然物即ち外國の動植物研究の場所たらしむること
- 四、園藝上の目的に依り有用又は裝飾用の植物を植栽すること
- 五、學校生活に實用的方面の事を教へ又農業的要素の練習を爲さしむること
- 六、農事改良上の事を爲さしめ栽培植物の種子に就き村民の注意を促す媒介たらしむること
- 七、種苗傳播の中心となり此等關係の事に就き教示すること
- 八、農業上の改良係と耕作者間の連絡を圖ること

目的

設計

- 九、直接又は生徒に依り村民を導き良耕作法を適用せしむること
 - 十、村民中の青年に農業の嗜好心を興へ植物の生育に就ての趣味を起さしめ尙自然を愛する心を授け以て田園生活を樂ましむること
 - 十一、生徒の家庭に庭園を作る様に獎勵すること
 - 十二、生徒をして労働を神聖なるものと信ぜしめ學校園に於ける労働の間に他の學校との競争を爲さしめ其間に體育を圖ること
- 此事業は教育部と植物園との間に於ける協力に依りて發達したるものにて一千九百六年後は植物園長之を監督することゝなれり、一年の經費は二萬五千百四十三留比懸賞金は一校五十留比宛なり、主任の下に管理者と助手を置く、主任の本部は古倫母植物園にて事務所と種子倉庫を有せり、附屬園は三英町の地積ありて花卉、蔬菜、果樹及び他の有用植物を蕃殖配附用に供せり、かくして年々種子及植物の五千組は島内地方小學に配附せられ此事務には園丁及び六人の苦力と常に關係從事す。

學校園を設置せんとする時には先づ面積土壤と給水上の事項を取調べもし其内に不適當なることあれば夫々之に對する調査を遂げもし尙缺點ある時は地方

吏の助力を乞ひて之を補ふこととせり。

各學校園は其位置定まれば相當器具を備へ又必要の個所には鐵針金の垣を作る其器具は小面積半英町のものには十五留比を要し一英町は其の倍額にて垣根用の針金は四線にて一英町二十五留比なり、支柱と水の供給は其地方の負擔にて學校園の面積は普通一英町にて教師は裝飾用植物を學校の前面に栽ゑ蔬菜果樹及特殊の有用植物を他側又は後方に栽うることとせり。

助手の仕事は常に巡回して學校園を監視し常に教師及生徒の仕事を指導す但此種の學校教師は師範學校に於て教養せらるゝなり。

助手は三人にて二人は實務に當り一人は事務を扱ひ必要の場合に特別の監督に派遣せらるゝものなり。

日々の日誌は監督及助手に依りて記載せられ校園を巡視したる場合に下の事項を報告するものとす。

監督の時日、學校名及位置、教師及主任、其校園に於ける趣味の如何、出席數、面積、給水状態、垣根、器具、有用園、裝飾園、指揮事項、推舉事項
教師は下記の事項に就て年四回の報告を爲すものなりとす。

學校各生徒數、平均出席數、面積、裝飾區、有用區、家庭園數、進度、特殊の要求事項、氣象の概觀等

錫蘭と臺灣

地勢の稍相似たる點より臺灣と錫蘭とを比較したる表を作りたるもの左の如し。

	錫蘭	臺灣
北緯	六—十度	二十二—二十五度
氣溫	八十度	七十—五度
雨量	二千二百耗	二千九十六耗
面積	三萬五千三百三十三方哩	一萬三千九百四十四方哩
人口	四百萬人	三百四十萬人
輸出入	一億八千萬圓	一億一千万圓
鐵道	五百七十六哩	二百九十哩
生徒	三十萬人	四萬人
高山	八千三百呎(八千尺)	一萬三千尺
大河	三百六哩	百二十哩

第十四章 歸航日記 (其一)

第十三章 錫蘭日記 錫蘭と臺灣

都 市	コロンボ 十八萬人	臺 北	十 萬人
家 畜(有角)	百 萬	四 十	七 萬
茶 輸 出 額	一億九千萬封度	二 千 四 百 萬 斤	
米	輸人千萬ブツセル(二千五百萬圓)	移 出	五 十 萬 石(五百八十萬圓)
顯 花 植 物	種 屬 科		百 四 十 六
	種		九 百 五 十 三
			二 千 五 百 四 十 一

錫蘭の蟲除祭

錫蘭の稻作害蟲豫防は唯た護符を立て、呪ひをなすのみにて其呪ひは砂又は灰を田地の境界に撒き散して田人は斷食を行ひ交際を避け又佛に祈願をこめて其冥助を需むる爲めに最と嚴肅に讀經するなり、又諸種の神々に哀願する不思議の儀式を施り行ふことあり、極めて嚴かなる言語もて呪の術をなす、夜中一人の者三軒の家より三本の箒を盗み來りそれを蔓草にて一つに括り結びて肩に荷ひて水田に到りて三度まで其周圍を歩き廻りて溝の取入口の内に之を捨て直ちに歸宅して翌朝まで無言の行をなすものにて歸宅後先づ衣服を改め米粥を食して一夜を過ごし翌朝は誰人にも逢はぬ様に田に行き一疋の蠅を捕へ松脂を燻べたる烟の中に其蠅を入れ百八度オンナモと唱へて蠅を放ちやるなり。(素木農學士錫蘭稻作に據る)

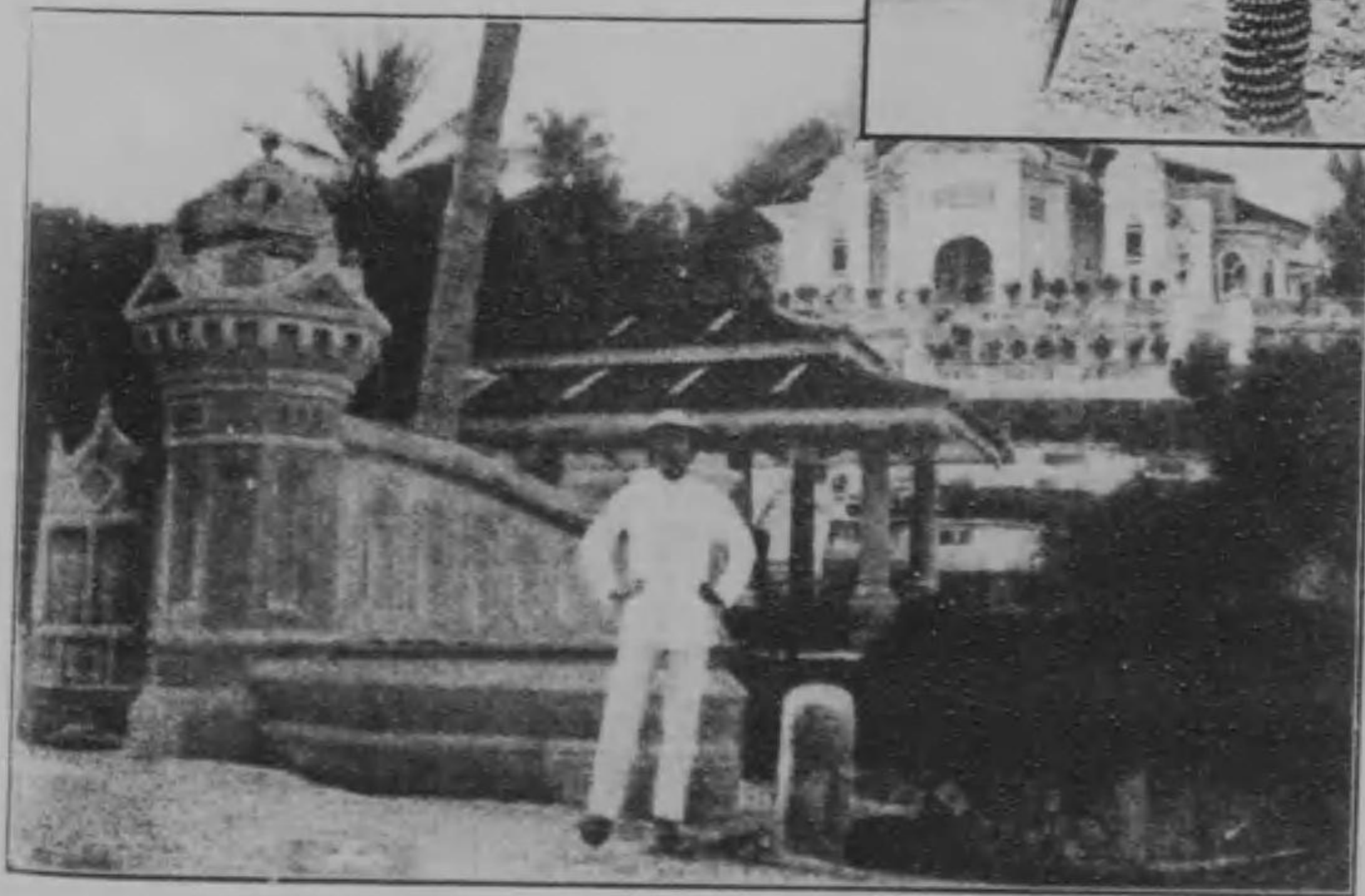
甘蔗の一種



新嘉坡馬來的水村



彼南の極樂寺



第十四章 歸航日記 其一

錫蘭より新嘉坡へ

二月二十五日 獨逸郵船「ブリンセス」アリス號に乗る北ロイド會社の船にて一萬一千噸の巨船なり、客多く設備亦完く、午後五時音樂隊の勇ましき進行曲と共に錨を揚げ徐かに印度洋指して漕ぎ出せり、同じく乗るは荒井氏と大阪の香水商佐原氏にて皆若き連中とて喫咽室に一卓を圍み電扇吹かせ泡立つ御國名物の麥酒を酌みて時の移り行くを知らぬまでに笑ひ興ずるも面白き船の旅なり。

印度洋

正午の位置

月 日	北 緯	東 經	前日よりの航海	彼南迄
二月廿六日	五度四六分	八三度二七分	二六八浬	一〇一八浬
二月廿七日	五度四六分	八九度	三三一浬	六八七浬
二月廿八日	五度三七分	九四度三一分	三三〇浬	三五七浬

水曜の夜上甲板にて舞踏會あり、かゝることは興味なき余はうるさしと之を避

け室に逃げ籠りて讀書す、夜も更けて二時過ぐる頃迄踊り狂ふ物音騒がしく、音楽隊の賑なる樂音を遠音にききして子守歌さく心地に睡に入る。

二月二十八日 午後スマトラの島を近く右舷に見る、此邊少しく波あり。

二月二十九日 朝八時彼南の島影を見十時其西角を右舷に進む、頂緑樹鬱蒼たる間に白色の燈臺あり風光極めて明媚なり、海水次第に淡藍色となり港に近づくに従ひて濁り海月夥だしく波上に漂ふ、十一時彼南の港に入り、午後一時棧橋につく、二時上陸して直ちに馬車を雇ひ獨り植物園に走らす、行くこと三哩にして到る、山を負ひたる處に在り、山中瀑布あり、風景絶佳の地なり、門を入りて右に曲り日蔭室を見羊齒室を通り山麓の大道を行き苗床に入れば椰子の苗蘭の苗多し、こゝを出て、蘭室あり珍奇の蘭今や花あり艶麗真に眼を樂ましむるに足れり、小事務室あり、刺を通じて園長モハメド、ハニフ氏に逢はんことを需む、氏市に出て、在らず助手の馬來人案内し園内をめぐる、ベラ州より移したる有毒植物、アンチアリキス、タキシフオリヤあり、蕁麻科の樹木にして土人之を毒矢に用ふるものなり、土名ウバ、ストリーと云ふ、蘭室の邊りに大葉の梧桐、ステルキュリア、マクロヒラあり、黒柿「デオスヒイロス、デスコラー」あり臺灣の毛柿に似たり、其一枝を需めたるも園長不

海月夥だ
き彼南の海
植物園

毒木

在の故を以て之を得がたかりき、事務室に腊葉室ありしも其標品今や皆新嘉坡植物園に移さる、彼南植物標品を張り附けたる若干冊あり、植物園の面積は七十五英町にして近來水道水源地となすの舉あり、園内後葛紫花盛んにして艶美なるとコンチャ屬の紫花極めて人目を惹けり、午後四時船に歸る。

三月一日 朝七時出帆終日海は静かなり正午船の位置北緯四度三十七分東徑百五十度十七分にて今朝よりの航程七十哩新嘉坡迄は三百十八哩なり。

新嘉坡の別れ

三月二日 午前八時新嘉坡の島を見九時入港、ボルネオ埠頭に着く、直ちに上陸して碩田館に入る、久しき間の馴染としてこゝの宿に歸れば我が家の心地して心も緩やかなり。

一千九百十一年に於ける新嘉坡の出入船舶は三万一千五百六十隻一千七百二十一万噸餘にして商船の國別は

英國	八百一十一萬噸
獨逸	百九十五萬噸

新嘉坡の貿易

和蘭	百九十五万噸
日本	百十八万噸
佛國	六十三万噸

其貿易統計を見るに輸入四億六千四百萬圓輸出三億九千八百萬圓合計八億六千三百萬圓なり而して各國別にせば

馬來半嶋	一億五千七百萬弗	英吉利	一億二千五百萬弗
蘭領印度	一億二千四百萬	英領印度	六千九百萬
香港及支那	五千萬	暹羅	四千七百萬
合衆國	四千萬	獨逸	千九百萬
日本	千三百萬	佛蘭西	千百萬
奧太利	千萬		

輸入品の主なるものは米、阿片、木綿、魚類、煙草、石炭、砂糖、機械、鏡類にして輸出品は錫、護謨、コブラ、香料、タピヲカ、檳榔膏、藤等なり。

日本の貿易は千三百十八萬弗にして輸入品は石炭約三百萬弗、燐寸百三十萬絹布類五十七萬は最も重要なるものなりと云ふ。

名残惜しき出帆

日本語にて
用を辨ずる
日本の船

こゝにては見残したる日本人經營の護謨山見に行く豫定なりしも二個月目に受取れる郵便中處理せざればならぬ事など出來、荷物の整理も中々にてかくて二日三日を費し其間に調査し残したることなどを整へ二夜ばかりは徹夜して仕事を了れるは六日なり、此日熱田丸歐羅巴より入港し七日午前乗り込む船室は殆んど満員なり、こゝにて一等船室に乗れるは五人なり、其中なる千本農務省技師、五明領事館書記生、得丸氏などは知れる人として圖らずも談敵を得たり、岩谷領事及夫人其他知れる人の多く見送りにと來られ正午過ぎに錨を揚げたる我船の徐かに波止場を離るゝに互に打ち振る手巾の見えずなるまで立ち盡して名残を惜しみぬ、去年の六月の末に此地に來りしよりこゝを中心として北に南に又西に幾度か旅を續けたることゝして新嘉坡は余には感興多き土地となり知る人も多く何とはなしに名残の惜まるゝ心地せり。

乗合の日本人は歐羅巴よりは大阪の柿原判事、山内司法省參事官、藤原海軍中佐、夫妻、彫刻家の永島氏、新嘉坡よりは五名にて皆同じ食卓なり、此連中頗るの大食家揃ひにていつも食卓を離るゝは最後なり、外國船に飽きたる身の何事を命ずるにも心のまゝに用を辨ずること何よりもうれしく、讀書に飽けば話相手欲しき連中

甲板にも喫煙室にも多く、いつの間にか皆心易き談友となり、デッキ、ピリヤードの戯れに互の年を忘れて打興じ愉快なる航海五日、六日香港に着く日の遅かれと云ふもの、久振りにて母國の土地踏む人々の航走早かれと祈る者皆思ひ思ひなり。正午船の位置

月 日	北 緯	東 經	前日よりの航程	香港まで	氣温	水温
三月 八日	四度五六分	一〇六度三四分	二八七	一、一五〇	八一	八二
全 九日	九度一分	一〇八度五七分	二九二	八五八	八二	八二
全 十日	一三度三四分	一一〇度三四分	三〇四	五五四	八一	八二
全 十一日	一八度一七分	一一三度四四分	三一二	二四五	八〇	八〇

古倫母にて逢へる柔道師範の白井氏錫蘭屈指の富豪ソイサ氏夫妻を連れて日本觀光の旅中なるがあり、同氏の荷物の内に毒蛇の標本あり、其名ポランガト稱し最も劇烈なる毒蛇なりと云ふ、氏は余が博物館に關係ありと聞き特に此の蛇の標本を贈らる、臺灣東部の毒蛇と似たる物にて、或は同一種なるべきか、兎に角臺灣毒蛇の研究者には好箇の参考品なるべく悦んで氏の厚意を受けて荷物一つ殖えたり、余の携へたる瓶詰の内にも變色蜥蜴あり、歩行魚あり、毒蝎あり、博物標本の幾箱さへ携へそれに苗木の小函十七までも携へニユーギニア産の石斛蘭の花真

博物標本

香港

盛りなる一鉢をも持ち來れるにこれは食堂の傍らに置きたるに乗合せの人々美はしき花よと立停りては花に手を觸るゝに惜しや其蕾の一を折り損じ咲きたる花をも傷めぬ蘭の名を「デンドロビウム、パレノブシス」と云ひ石斛の種類なれど其花胡蝶蘭に似て其色紅く最も美なり。

三月十二日 午前九時香港に入り九龍の埠頭に横付けせり、直ちに上陸して東京ホテルに入り、先づ領事館を訪ひ宿に歸るや同船同卓の人々相會して久振りにて疊の上に安座して中食を共にす、千本技師余が記念帖に書きて曰く

瓜哇て逢ふたが縁のはし

又も相見るシンガポリア

なさけも熱田の船の上

今日が別れの宴かいな

午後三井物産に新嘉坡にて相知れる林支店長を訪ひ臺灣の平野技師比律賓より歸りて同じ宿に在りと聞き急ぎ四階の其室を訪ひ互に奇遇に驚きて別後を談る、思はぬ處に思はぬ人に逢ふは快事と云ふべし。

思はぬ處に思はぬ人

日本人は熱を恐れず
日本人は北緯五十度以南の國民なり、故に皮膚淺黒く熱を恐れず、故に布哇、フレスノ、帝
國、谿谷、ブラジル、馬來半島にて成功せり、要するに日本人の西洋人と競争して、成算ある
は熱を恐れざる所にある。(志賀重昂氏)

隔岸樓臺層一層 *
晚來椰樹冷搖漾 *
南天三月水雲蒸 *
數點流螢大似燈 *
志賀 矧川 *

第十五章 馬尼拉日記



サカデの栽培



馬尼ラの田舎



馬尼ラの青物賣

第十五章 馬尼拉日記

香港より馬尼拉へ

健康診断

三月十五日 濠洲航路の郵船日光丸出帆すべしと聞き切符買にやる、米國醫の健康診断書なければ賣らずと云ふに指定醫師を訪ふに、寫眞を添へざれば診断せずと云ふ、うるさきことを云ふもの哉と郵船會社に至り大谷助役に逢ひ添書を貰ひて再び其醫師に至る、眼を一寸見たるのみにて一弗拂ひ通過の署名を得て切符を買ふ、馬尼拉行の船には斯くして初めて乗り込み得たり、話は後の事なれど此序に書くべきとあり、さて船の出帆に先ち米國醫の檢疫あり、船馬尼拉に着けば港外にて同じく診察し一々種痘の上ならては上陸を許さず、濠洲への客中一寸なりとも此島の土をふむ者は強制種痘を受けざるべからず。

英國婦人の一人男の兒の上陸をせがみ居るものありけるがもし種痘なしに上陸出来ぬものならば上陸せざるまでなりと云ひ張り居るもありき、次に港務官は旅行券に奥書し何日に上陸したる旨を記入するなり、余は長き旅行中旅行券を取り

入國税

出したるは米國領の馬尼拉が初めてなり、お國柄にも似合ぬことをするものと思へり、それに労働者の上陸を制限することにて同船の二十餘人中七名までは、トラホームなりとて上陸拒絶せられたるなり、毎航海必ず此拒絶者あり皆香港にて醫師の診断を経たる者にて馬尼拉の上陸は安心出来ぬ由、余は入國税は九弗ばかり拂ひ労働者は五十弗を納むる規定なり。

種痘に就て余が困りたるは其方法よろしからぬ爲めか他の病毒入りたる見え局部著しく腫れ上りて痛み強く遂に化膿して數日惱みたることなり。

午過出帆北水道を出づ一等の船客六十餘客室は皆塞がり食堂の賑々しさ云はん方なし、日本人の船客は堤遞信技師、東京製綱會社兵庫支店の山田氏、マニラ麻商土生氏、郵船の香港助役大谷氏と余の五人なり、港外波荒く晚餐の食卓に就きし日本人は唯一人ありしのみ。

三月十六日 夜波浪高く船大に動搖し午後稍々収まる、正午船の位置香港より二百九十七哩北緯十八度二十八分東徑百十七度二十分氣温七十九度水温七十八度夕方日本人船長室に集り船長及堤、土生の三氏かたみ代りに得意の寫眞器持ち出して上甲板上に寫眞す。

呂宋島

博物館

女子の服装

三月十七日 朝島影を左舷に見る是れ呂宋島の西岸サンパレス地方なり陸に近く南に進み七時馬尼拉灣口に入る一島ありグランドアイランドと云ふ要塞なり、廣き灣内を進み右にチャペラ軍港を見つゝ九時防波堤の沖にかゝり檢疫終りて十一時第三埠頭に着く、三井の人々出迎はる出張所長大熊氏に誘はれて其社宅に到る、午後帝國領事館に到り杉村領事に逢ひ郵便物を受取る、三井本店の田中法學士と共に博物館を観る、二階建てにて階上人類學に關する陳列と階下木材の標本とは頗る豊富なるものにて他に陳列品整理中なり、館の入口に日本産の大蟹の額あり、飯島博士の寄贈なりと云ふ。

馬尼拉に上陸して先づ目につきしは、土人の女子の服装にて洋装に似て上衣は肩の張り出せる冷しげなる麻布の色様々なるに下は湯文字の上は大巾の前垂を着けたるにて色彩色々なるも殊に紅が多く其姿何となく優美にて余が南洋各地にて見たりし女の風俗中こゝほど氣に入りたるものなき程なり。

植物學者メリル氏

三月十八日 科學局の植物室にメリル氏を訪ふ米國の人植物學者にして比律

賓群島植物研究のオーソリチーなり兼て屢々文通したることある人とて一見舊知の如く待遇極めて懇切なり、余は先づ携へ來れる紅頭嶼植物と本島北部の植物と比較を始めしにメリル氏はやりかけたる仕事を捨て、余が仕事に手傳ひ呉れ余が疑問も爲めに氷解するもの多く今日一日にて得たる點多し。

メリル氏余が爲めに科學局の各部を案内してくれたり、化學部、細菌部、動物部、礦物部等設備大に完く圖書室の設備亦觀るべし。

三日間此局に通ひて見たしと思ふ標本を對照したり、植物室は標本室と研究室とは一緒にてメリル氏は植物の分類學的研究に従事し日々檢定する新種多く今日まで新種の記述五百に餘れる由、標本の精査終れば直ちに記事を作り自らタイプライターに掛け一々標本に添附す、傍らに一婦人ありて専ら標本の整理を爲せり、室内標本箱はエンゲレル式にて排置せられ分科表ありて檢索に便し科中の所屬はアルファベット順なり、標本の數四萬に餘り比律賓産の標本包紙は白き紙片を張り外國産は赤き紙片にて互に區別し易からしむ、標本の整理は今日まで見たる標本室にても最完備したるものにして唯一人の仕事としては實にみごとなるものと思へり。

別室に準備室あり二人の土人助手標本を作り重複品を整理して外國と交換を取り扱へり。

東京大學より贈れる臺灣植物中余が採品にて余が總督府標本室の火災前の採集品あり今圖らず比律賓にて我採品を見懷舊の情禁ずる能はざるものあり、メリル氏は能く余が手紙にて照會したる植物の事を記憶して一々其植物を取り出して示し説明してくれたり、其中にブラタス島植物中ニシザワノキと稱するものは比律賓に産せざるものにて分布上極めて興味を感じたるものなりしが近頃此島中に得たる由又同氏がかねて鑑定しがたしと云ひしブラタス島のウドノキは旅行中ピソニヤ屬なることを確めし旨を語りしにそれならば此島にも栽培せりと云ふ、ブラタス植物につき此度の旅行に地理的分布を調べたりしがメリル氏の厚意にて比律賓所産の種類を確め茲に余が數年來調査したりしブラタス植物に關する小論文は完結するを得たり。

一日招かれて同氏の私宅に到る市街を去る三哩灣頭波打際に臨めるニツバ葺の涼しき家なり、折柄ミセス、メリルは用事ありて幼兒を携へて市中に出て、在らず中食の卓を共にし樂しき談話を交換して直ちに科學局に引き返へして研究を

續けて相別る、別辭亦頗る懇切にして將來臺灣植物と比較研究上の連絡を約せり。メリル氏の紹介にて鑛物部主任に逢ひ臺北博物館の鑛物交換を約し岡本氏の依頼に係るルゾナイトの標本を需めしに直ちに陳列品中の一鑛石を取り之を半分に割りて與へられ之につき自ら筆を取りて書きたるものを添へくれたり、學者に人種の區別なきはうれしきことと云ふべし。

學者に人種の區別なし

大學の博物館

サントトマス大學の博物館は最も動物標本に富めり、此大學は千六百十一年の創設に係れるものにて比島學藝の淵藪なり、各種の標本中殊に目を惹きたるは畸形動物の標本多きことにて牛豚、人の二頭數足、一頭二體様々の化物あり、日本の牌の標本あり嘉永何年何々院何々居士と書きたる物にて長崎あたりにて手に入りたるものと思はる、日本の甲冑二領あり、又アテテラ、マニラ學校には考古學及博物學上の貴重なる標品能く蒐集せらる。

ゼント派の古寺

馬尼拉は舊教の寺院多き處にて宗教上日本との關係も密接なるところなり、余の見たるゼント派の古寺は建築壯大比人の手に成れる彫刻精巧實に目を驚かすものあり、迫害に逢ひたる信者の歴史畫中日本信徒の迫害と稱する古畫あり三人の信者十字架にかゝれる畫にてひざまづきて拜し居るは支那人なり、日本と支那との區別附かぬ折のことなれば所謂繪空事なるべく唯委しき事を尋ねかねたるは遺憾のことなり、日本關係の一つとして本島の癩病院の起因は日本より送られたる癩病患者の救護なる由、そは千六百三十三年日本にては耶蘇教徒處刑せられ徳川將軍は百五十人の癩病患者を日本船に載せて馬尼拉に遣はして曰ひけるは是れ皆耶蘇教信者の世話したるものなれば宜しく其方にて世話致さるべしとなり、西班牙は砲撃して船を沈めんとしたるも一先づ之を受くることとなり、同患者を市中花やかなる行列にて通過せしめテラオに家を作りて住はしめ今日の癩病院の基を爲せりと云ふ、かくて總督は日本將軍に返翰を送りて今後再びかゝる患者を送る時は患者も附添人も共に殺戮すべしと云ひたりとぞ。

馬尼拉市